
カンピオーネ！
魔王たちの断章
Campione XVIII
丈月 城
Illustration シコルスキー
ダッシュエックス文庫


カンピオーネ！
魔王たちの断章
Campione XVIII
丈月 城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
魔王たちの断章
Campione XVIII


piece of memories...


「はあああああっ！」
巨大なムカデの神獣は
自由自在に地中を移動している――


楽しい晩餐会がとんでもないことに……!?

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

　高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

　《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

　霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

　《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

　当代随一とされる「太刀の媛巫女」。護堂の「剣」として侍る。

甘粕冬馬

　正史編纂委員会のエージェント。

サーシャ・デヤンスタール・ヴォバン

東欧の魔王。最古参のカンピオーネの一人。

アイーシャ夫人

妖しき洞穴の女王とうたわれる謎多きカンピオーネ。

Contents

ダッシュエックス文庫DIGITAL

カンピオーネ！

XVIII 魔王たちの断章

丈月　城

第１話　媛巫女たちと七人目のカンピオーネ

「カンピオーネっていうのはさ、英語だと『champion』に当たる言葉なんだ」

　長い黒髪の少女――清せい秋しゆう院いん恵え那なが語る。

　明朗な人ひと柄がらをそのまま表す、軽妙な語り口だった。

「王様とか戦士くらいの意味だと思えばいいのかな。あの人たちをふつうの人間や魔術師、霊力者なんかと区別するために、イタリアの人がつけた呼び方」

「たしかに、あちらの言葉らしい響きですね」

　万ま里り谷やひかりはこくりとうなずいて、あいづちを打った。

　語り手である恵那が一六歳、聴き手であるひかりは一二歳で小学六年生。やや歳としが離れているふたりは、先輩と後輩の関係であった。

　どちらも『媛ひめ巫み女こ』と呼ばれる、日本古来の特殊な霊力者なのだ。

　ひかりの姉も媛巫女で、恵那とはかなり親しい。そのため『太た刀ちの媛巫女』とも呼ばれる清秋院恵那は、気軽に万里谷家を訪ねてくる。

　今夜もふらりとやってきて、「ちょっと一晩泊めてよ」と笑顔で言ったのだ。

　たまたま両親の帰りが遅い日で、ひかりの姉は夕食作りをはじめる直前だった。姉は突然の来訪者をやわらかな笑顔で迎えいれ、妹に言いつけたのである。

『晩ご飯ができるまで、恵那さんのお相手をしてあげて』

　と。

　姉――万里谷祐ゆ理りはおだやかで心やさしい、おっとりとしたお嬢さまである。同じ家で生まれ育った妹を、お嬢さま気質という点では遥はるかに上まわっている。

（まあ、やさしいだけのお嬢さまでないことも、妹なので重々承知していたが）

　そんな姉と能天気で奔ほん放ぽうな恵那。ふたりは不思議なほど仲がよかった。

　ひかりもそういう姉たちが好きだった。だから、よろこんで「恵那姉さま」の話し相手をおおせつかったのだが。

　雑談の途中で、ひかりはふと問いかけた。

　そもカンピオーネとはいかなる者なりしか、と。ここ数カ月、万里谷家の近辺――具体的には姉のすぐそばで荒れ狂っているらしい災さい厄やくの運び手は何者なのかと。

「でも恵那姉さま。カンピオーネ――神殺しの方々はイタリアにだけいらっしゃるわけじゃありませんよね？」

　媛巫女見習いのひかりは、カンピオーネに対して敬語を使う。

　彼らは覇は者しやであり、王者であり、魔王なのだと教育されているからだ。

　カンピオーネとは『神』を殺あやめて、その聖なる権けん能のうを簒さん奪だつした超人たち。神々とさえ比ひ肩けんしうる力の所有者である。彼らは人類の枠から逸いつ脱だつした『王』なのだ。

「うん。大昔から数えたら、歴代全員で何十人になるかはわからないけど、あの人たちはいろんな国といろんな文明で生まれてきた。数百年の間にひとりしか生まれなかった時期もあれば、今みたいに

幾人もの王様が覇を競った時期もある」

　恵那はよどみなく、軽やかに語っていく。

「西洋だけじゃなくて、もちろん東洋でも生まれたし、アメリカの方や太平洋のどまんなかに浮かぶ小さな島で誕生したこともあるらしいよ」

　実は清秋院恵那、『お嬢さま』という点では万里谷家の姉妹を凌りよう駕がする。

　先祖に戦国大名まで持つ名家の生まれ。フランクな言動からは想像しづらいが、諸芸に通じ、教養も十分にそなえる少女であった。

「一応、最近まで日本では生まれなかったみたい。でも記録されてないだけで、実は歴史のどこかで日本出身の神殺しがいても不思議じゃないけどね。実際、海を渡ってきた魔王の記録はちゃんと残ってるわけだし」

　日本をふくむ漢字文化圏では、古来カンピオーネのことを『羅ら刹せつ王おう』『魔王』などと記してきた。もちろん一部の識者のみがひそかに伝えてきた呼称であったが。

「二百年くらい前かな。イタリアのなんとかって魔術師さんがはじめて神殺し――『カンピオーネ』についての本をまとめたんだ」

「本ですか!?」

「うん。こういう人たちをカンピオーネと呼ぶことにしよう。彼らはこんなにすごい人たちだから、絶対さからっちゃいけないよーみたいな」

　語りながら、恵那はしみじみと故人を偲しのぶ顔になった。

「なんかねー。何十年もカンピオーネに部下として仕つかえて、その間、主君にさんざん振りまわされて苦労したんだって。で、主君がどこかで戦死したのを機に、自分の知ってることを本にしたんだとか。世の中に警けい鐘しようってやつを鳴らすために」

「く、苦労されたんですか？」

「カンピオーネの人たちは無茶苦茶だからさ。恵那なんかは逆にそ

ういうの楽しいけど、ふつうの人はやっぱり引いちゃうのかもね……」

　ひかりは不安に駆られた。

　破は天てん荒こうなことでは媛巫女随ずい一いちの清秋院恵那。その彼女に『無茶苦茶』と言わしめる存在、カンピオーネ。神を殺めるほど埒らち外がいである者。

　やはり、彼らのそばにいることは並大抵の苦労ではないのだ。

　現在、世界には七人のカンピオーネがいるという。ひかりはその名を思い浮かべた。

　嵐を呼ぶバルカン半島の狼ろう王おう、デヤンスタール・ヴォバン侯こう爵しやく。

　中国最強の武ぶ俠きよう王おうにして方術をきわめた最高の道士、羅ら濠ごう教主。

　妖あやしき洞穴の女王、アイーシャ夫人。

　知略と探索に長たけた神速の貴公子、黒王子アレク。

　五つの姿に変身するという仮面の英雄、ジョン・プルートー・スミス。

　全てを斬きり裂く剣と鋼はがねの肉体を持つ、剣の王サルバトーレ・ドニ。

　そして、最も若き七人目。はじめて日本国から誕生した神殺し、草くさ薙なぎ護ご堂どう！

「そ、そんな人にお仕えしてるんだから、お姉ちゃんもやっぱりすごく苦労してるんじゃ⁉」

　姉・万里谷祐理は数カ月前、草薙護堂なるカンピオーネの協力者となった。

　だが、具体的にどういうことをしているのか？

　姉が語ろうとしないため、ひかりは今ひとつわかっていなかっ

た。

　また、媛巫女見習いである彼女の耳には、さまざまなうわさ話も入ってくる。それらの真しん偽ぎ定かでない情報が不安をさらにあおるのだ。

「そりゃあね。草薙の王様はいい人だけど、やっぱりカンピオーネだし」

「く、草薙さまは高校生でもあるんですよねっ？」

「うん、そう。祐理や恵那と同い歳。高校一年生だよ」

「お姉ちゃん以外にも、イタリアから来た方々を側近にされてるんですよねっ？」

「そ。恵那みたいに剣術と呪術の両方を身につけた向こうの魔術師さんがふたり、いつもくっついてる。ほら、テンプル騎士ってやつ」

　ひかりの問いかけに、恵那は整然と答えてくれる。

　テンプル騎士。騎士であり魔術師でもあった中世ヨーロッパの異能者たち。その末まつ裔えいが今でも欧州では魔術結社を作り、活動しているという。

　その知識を思い出して、ひかりは大きくうなずいた。

「ひとりはエリカさん。強いだけじゃなくて、すごく頭がいい人だよ。もうひとりはリリアナさん。只ただの騎士じゃなくて魔女でもあるから、術だけならエリカさんよりすこし上かな」

「……そ、それで本当なんでしょうか!?」

　かねてよりの疑惑をたしかめようと、ひかりは身を乗り出した。

「そのおふたりとお姉ちゃん——三人そろって草薙さまの『愛人』だというのは!?」

　にわかには信じがたいうわさであった。

　いや、相手は魔王カンピオーネ。一般的な倫理観など草ぞう履り

のように踏みにじって、その程度のでたらめをしでかしてもおかしくはない。

　だが、姉の祐理が『魔王の愛人』というのは……。

　妹にとっては、まったく信じがたい話であった。姉は深しん窓そうのお嬢さま育ちで、男子と親しくなった経験など皆無。まあ、媛巫女のおつとめで年長の男性と接する機会はあるはずだが、それはあくまで仕事としてだ。

　まじめで潔癖、奥手でひかえめ、大和やまと撫なで子しこを絵に描いたような姉がまさか——。

　しかし、この数カ月。姉・万里谷祐理がカンピオーネ・草薙護堂の愛人であると、何度も聞く機会があった。姉に直接問いただしてみたら、

『わ、私と護堂さんは只のお友達です……』

　うつむきながら否定されたのだが。

　しかし、そのときの顔。否定しながらも赤面する姉の顔。

　あれは怒りではなく、明らかに羞しゅう恥ちで赤くなっていた。また、姉が男子のファーストネームを口にしたことも驚きだった。その名をささやくとき、すこしだけうれしそうに——まんざらでもなさそうに見えたことも。

「ちがうちがう。三人そろって愛人なんかじゃないよ」

「そ、そうでしたか。やっぱり、そんなことありえないですよねっ」

　恵那があっさり疑惑を否定したので、ひかりは安あん堵どしたのだが。

　しかし、続く一言が全てを台なしにした。

「恵那もさ。この間、王様の『女』になったんだ。だから四人まとめてだよ」

「えええええええええ——————————っ!?」

　驚きよう愕がく的すぎる新情報。ひかりはつい大声を出してしまった。

「えええ、恵那姉さまもごいっしょなんですか!?」

「事情を話すと長くなるけど、そういうことになっちゃったんだなー。あ、でも安心して。子供作ったりとか、女としての仕事は祐理の方を優先してねって王様には頼んであるから」

「ここ、子供!?」

「だって、そういうことも考えなきゃダメでしょ」

「でで、でもっ。お姉ちゃんたち、まだ高一なのに！」

「そ。もう一六歳だから結婚だってできるよ。まあ、お相手の王様が一八歳未満だから、すぐそうはならないだろうけどさ。あ、でも、カンピオーネの人たちには法律なんてあってないようなものだし、気にしなくてもいいのかな」

　昔は一五歳くらいで元げん服ぷくしてたわけだしねと、恵那はあっけらかんと言う。

　その口ぶりから、ひかりは理解した。冗談ではないのだ。清秋院恵那も姉の祐理も、草薙護堂という若きカンピオーネと只ならぬ仲になってしまったのだ！

「じゃあ草薙さまは、私のお兄さまになるかもしれない方なんですね……」

「なる〝かも〟じゃないよ。絶対なってくれるよ。そりゃ誰が正式な奥さんになるかはまだわからないけどさ。王様は祐理や恵那たちを無責任に放り捨てたりしないから」

　ひそやかな自信を込めて、恵那は断言した。

「あの人はきっとそういう人。心の深いところでつながった相手には、ふつうじゃありえないくらいバカ正直に面倒見てくれる人。なんていうのかなー、穴だらけなんだけど器うつわはでっかい人だと思うよ、草薙の王様は」

　微妙にこきおろしつつも、愛情を込めて草薙護堂の人となりを語

る。

　こんな恵那をはじめて見たので、ひかりは心底驚いた。

　太刀の媛巫女、清秋院恵那。彼女は『神がかり』という特異な霊力を操る、世界でも唯ただひとりの逸材である。この能力を研ぎすますため、恵那はしょっちゅう深み山やまに分け入り、大自然のなかで心身を清めている。

　そのせいか、ひどく動物的なのだ。

　理性よりも感性、理論よりも勘かんこそを判断の基準にする。だが逆に、だからこそ出会って間もない人間の心根も嗅きゆう覚かくで見きわめてしまう。

　恵那のそういう面をよく知っているので、ひかりは深くうなずいた。

「神様を殺した魔王さまだというから、もっと怖い人なのかと思ってました……」

「ふふっ。なんか困ったことがあったら、王様に相談してみるのもいいかもね。きっといろいろ真剣に考えてくれるはずだよ」

「そ、そうなんですか!?」

「何かあるんだ？　じゃあ、恵那も相談に乗ろうか。言ってみな～」

「あ、はい。でしたら、晩ごはんのあとにでも。……でも、そうと聞いたら、べつのことも心配になってきました」

「へえ、どんなこと？」

「うちのお姉ちゃん、草薙さまに〝愛人〟としてお仕えしてるんですよね。男の方とのおつきあいみたいなことがまちがいなく苦手な人だから、大丈夫なのかなーって……」

　ひかりが懸け念ねんを口にすると、恵那はくすりと微笑ほほえんだ。

「あー……それがねー。エリカさんあたりとくらべたら、たしかに

ちょっと旗色悪いけど、祐理も結構上う手まくやってるみたいだよ」

「え！　あのお姉ちゃんが、ですか!?」

「うん。恵那も男の子とおつきあいするのが上手い方だとは思わないけど、それでもああいうことで祐理に先を越されてるとは本当に意外だったし」

「あ、ああいうこと!?」

　ひかりはドキドキしながら考える。

　草薙護堂なる異性とつきあうにあたって、おとなしい姉の方が大胆不敵な恵那よりも一歩か二歩先んじているらしい。では、〝ああいうこと〟とは具体的に何なのか？

　是ぜ非ひともそれを聞き出さなければ——！

　胸のドキドキにまかせて質問を重ねようとしたときだった。

「え、恵那さんっ。何のお話をされているんですか!?　ひかりも変なことを気にするのはやめなさい！」

　いきなり現れた姉・万里谷祐理に注意されてしまった。

　ひかりと恵那が騒がしくしていたので、台所から様子を見に来たのだろう。いつも物腰のやわらかい姉にしては珍しい大声だった。

　恥ずかしさで顔を真っ赤にして、うろたえているのが見て取れる。

　やはり、これは姉にとって一生の大事なのだ。ひかりはうなずきながら、おずおずと異論を唱えることにした。



「で、でもね。お相手はふつうの人じゃないから、私たち家族もきちんと事情を知って、覚悟をかためておいた方がいいと思うの。ほら、お姉ちゃんが正式にお輿こし入いれすることになったら、家の関係でいろいろあるかもだし」

　万里谷家の長女が魔王カンピオーネの正室となる。あるいは、その子供を懐妊する。

　そういう事態になったとき、祐理の後ろ盾だてとなって矢や面おもてに立てるほど、万里谷家の『格』はたいしたことないのだ。だが。

「そこは気にしなくてもいいよ。いざとなったら、清秋院の名前を使えばいいから」

　すかさず恵那が言ってくれた。

「何かうるさいこと言う人や一族がいたら、うちがなんとかするよ。祐理を清秋院の養女にする手だってあるしね。ま、でも、この辺は沙さ耶やの宮みやの馨かおるさんも上手くやるだろうから、変なことにはならないんじゃないかな」

　清秋院家とならぶ呪術の名族、沙耶宮家まで。ひかりは目を丸くした。

　この二家が後ろ盾につくほど、姉の祐理は神殺しの魔王である人物と〝親密〟な関係になっているのだ！

「じゃあ、やっぱり私にも『お兄さま』ができるんだ……」

「だよね、祐理？　王様と祐理はもう只のお友達じゃないんだよね？」

　ひかりはつぶやき、恵那は問いかける。

　妹と友人の反応を前にして、媛巫女・万里谷祐理は——

「そ、それはたしかにそういうことも言いましたけど！　とにかく、まだ早いんです。私と護堂さんはまだ高校生ですし、未成年ですからっ。わ、私、お夕飯の準備にもどります！」

うろたえ、うつむき、こちらを正視しないようにしながら、逃げ出してしまった。

注意をうながしたい気持ちよりも、羞恥心が勝ったのだろう。

「ちょっとぶしつけに話しすぎちゃったかなあ……。あやまってこよ」

ばつが悪いのか、恵那は珍しく神妙な顔で腰を上げた。

そのまま祐理のあとを追って、廊ろう下かへ出ていく。一方、ひかりはまだ見ぬ『お兄さま』の存在を知って、ある決意をかためていた。

「お姉ちゃんと恵那姉さまの旦那様……絶対に会わなくちゃ！」

この決意がのちにカンピオーネ・草薙護堂をちょっとした騒動に巻きこむきっかけとなるのだが、それはまたべつの物語である。

ちなみに。

このとき恵那が語った内容を知れば、当の草薙護堂は即座に吠ほえただろう。

「俺のことを見境なしの女好きみたいに語るな！　エリカも万里谷もリリアナも愛人とかじゃないしっ。そもそも清秋院、おまえを愛人にした覚えは金こん輪りん際ざいない！」

などと。

客観的に見て、どちらの言い分が事実に近いかはともかくとして。

さらに、もしこの言いぐさを彼に近しい女子たちが聞いたと仮定するならば。

エリカ・ブランデッリは「この期ごにおよんでそう言えるところが、この人の異常性の表れよね」と皮肉げにつぶやき、リリアナ・クラニチャールは「やはり女性問題については、まったく自覚がないのですね」と生き真ま面じ目めに論評するかもしれない。

　そして、万里谷祐理はとりあえず護堂の言い分に異を唱えないものの、そっと目を伏せて心の裡うちである種の感情を整理しようとするかもしれない。

　そうした反応を護堂が目まの当たりにすれば、「い、いや、たしかに只の友達ってのとはすこしちがうと思うけど……」と、あわて気味に口走るかもしれないが。

　これらはひとまず、仮定の話である。

第２話　王様の晩餐会

　房ぼう総そうの海を舞台にした一大決戦。

　女神アテナ、軍神ランスロット、カンピオーネ草くさ薙なぎ護ご堂どうが覇はを競った激闘である。このとき孤こ軍ぐん奮ふん闘とうした清せい秋しゆう院いん恵え那なは、心身共にいちじるしく消しよう耗もうした。

　結果、強制休養を命じられ、秩ちち父ぶの清秋院本家にて雌し伏ふくすることになった。

　家にひきこもって療養すること半月。ドクターストップが解けたあとは、また半月ほど霊場として名高い秩父の両りよう神かみ山さんにこもり、深しん山ざんの霊気で心と体を研ぎすませた。

　かくして全快した恵那は山を下り、清浄ならざる大都会・東京へ向かったのである。

「半月近くも家でじーっとしてるのはイヤでイヤでたまらなかったけど……本当に退屈で死にそうになったけど……」

　千ち代よ田だ区三番町にある、大たい正しよう時代に建てられた洋館の応接間。

　そのなかで、恵那は万ばん感かんの思いをこめて言った。

　野の放ほう図ずな自然児の彼女にとって、ここしばらくの強制休養は人生ゲームで『二〇回休み』になるくらい耐えがたく、つらい時間だったのだ。

「ようやく戻ってこられてよかったよ。……でもさ。祐ゆ理りもリ

リアナさんもずるいよね」

　竹を割ったようにさっぱりした気き性しようの恵那だが、このときばかりはすこしだけ恨うらみがましい目で仲間たちを見つめた。

「どういう意味だ、清秋院恵那？」

「ずるい……と、おっしゃいますと？」

　リリアナ・クラニチャールが不審そうに問い、万ま里り谷や祐理は上品に首をかしげている。

　ひさしぶりに東京へ来た恵那は、あるお願いをするために、彼女たちを沙さ耶やの宮みや家け別邸に呼び出したのである。

　この古くて広い洋館は、恵那の幼なじみにして媛ひめ巫み女こ仲間の所有物だった。

「だって、恵那がいない間もこっちは盛りあがってたんでしょ？　みんなでロンドンに行ったり、神様と戦ったりして。話を聞いて、すごくうらやましかったんだ。恵那だけ除のけ者みたいでさ。つまんなかった」

　と、恵那は子供のように口をとがらせたのだが。

「盛りあがった、か……」

「うらやましい、ですか……」

　リリアナと祐理は憂ゆう鬱うつの翳かげでそれぞれの顔を曇くもらせた。

「あのとき盛りあがっていた人間は、ごく少数だと思う。草薙護堂と、あとはアレク――アレクサンドル・ガスコインさまくらいか」

　恵那たちの王の名と、イングランドの若き魔王の名をリリアナは口にした。

　何かとお騒がせな貴人たちへの憂ゆう慮りよと、彼らを止められなかった己おのれへの自責の念がブレンドされた面おも持もちだった。

「おふたりとも本当にやりたい放題だったと申しますか……。最後にはベイブリッジまであんなことになってしまいましたし」

　祐理は恥じいるように顔を伏せ、身をすくめた。

　この件に深く関係――どころか〝荷か担たん〟したことに、忸じく怩じたるものがあるのだろう。

　しかし、恵那はむしろ彼女たちがうらやましかった。

　横浜のベイブリッジで起きた『前代未み聞もんの崩落事故！』のニュース。恵那は山ごもりを終えたあとで知り、さらにその真相を教えられて、膝ひざを打った。

　さすが王様！　呼んでくれたら恵那も助すけ太だ刀ちして、いっしょに大暴れしたのに！

「ねえねえ。そのときの王様、変な呪のろいを受けて、すごかったんだって？　いつもだってメチャクチャやるのに、さらに破壊力二倍みたいな感じで？」

「「…………」」

「報告書を読んだんだけどさ。その場に立ち合った祐理やリリアナさん、くわしいこと何にも話してないじゃん。それじゃ王様がどうすごかったのか、わかんないよ。怪け我がしてた恵那をかわいそうだと思って、ちゃんと話してほしいな～」

「お、お断りする！　何と言うか……清秋院恵那にはまだ早いっ！」

「そ、そうですっ。それに護堂さんご本人のプライバシーにもかかわることですし、みだりに詮せん索さくすべきではないと思いますっ！」

　リリアナも祐理もなぜか顔を赤らめ、お願いを即座にはねつけた。

「えーっ。ふたりともケチくさいなァ」

　恵那はふたたび口をとがらせた。

　だが、明朗快活・自由闊かつ達たつが清秋院恵那の売り。いやがる人間から根掘り葉掘り聞き出そうとするほど野や暮ぼでもない。いいのだ。まだ訊きく相手はエリカ・ブランデッリがいるし、何より最大の当事者・草薙護堂がいた。

「じゃあ、あとで王様に直接訊いてみようかな？」

「……それもいいかもしれないな。草薙護堂も大いに困るだろうが」

「……すこしいい薬になって、今後は多少なりとも慎つつしんでもらえるかもしれませんしね」

　恵那のつぶやきにリリアナがうなずき、祐理も祈るようにささやく。

　どうやら草薙護堂にとっても話しづらい一件らしい。面白い。何としても真相を突きとめなくては。決意を固める恵那だった。

「それはそうとね。今日ふたりに来てもらったのは、相談があるからなんだ」

「ほう」

「わたしでよろしければ、もちろんうかがわせていただきます。……ですが、そういうことでしたらエリカさんはお呼びにならないのですか？」

　エリカ・ブランデッリは頭脳明めい晰せきな切れ者である。

　奔ほん放ぽうに見えてサロンの女主人めいた配慮もできるし、人づきあいも意外と如じよオさいない。なので祐理のすすめるとおり、相談相手としてはたしかに適格者だろう。

　だが、そこでリリアナが言った。

「エリカなら用事があるとか言って、昨日から東京をはなれているぞ。あと、あの女にはあまり個人的な弱みを見せるべきではないと思う。……言いたくないが、たしかにエリカの助言は適切だったり有益だったりすることは多い。でも、何年かあとで取引や脅きよう迫はくの材料にされたりとか、ちょっとアレな何やらがあるというか……」

身に覚えがあるのか、途中から言葉がもにゃもにゃしはじめた。

まあ、それはエリカにとってリリアナが気やすい相手だから、何かとイタズラしたくなるのではと思いつつ、恵那はきっぱりと言った。

「実はエリカさんを頼るつもりは、恵那にもないんだ。なんといっても、これはいかにしてエリカさんと〝差〟をつけるかっていう挑戦だからね。ライバルのあの人がいたら、台なしになっちゃう」

「まあ、エリカさんと⁉」

「うん。そのためにこんなものまで用意したんだ」

驚く祐理に言いはなち、恵那は新たな〝相棒〟を取りあげた。

それは一振りの短刀だった。刀身には丁てい寧ねいにさらしを巻きつけてある。それをほどいて、恵那は愛刀の姿を仲間たちにさらけ出した。

厚く幅広の蛤はまぐり刃ばで、切っ先は鋭くのび、反そりは浅い。

「ずいぶんとよく切れそうだな」

「さすがリリアナさん、いい目してるね。こいつはね、うちの床とこの間まに飾られてた同どう田た貫ぬきを近所の刀鍛か冶じさんの作業場に持ちこんで、摺すりあげてもらったんだ」

「どう――たぬき？」

やはりミラノ育ちだけあって、同田貫正まさ国くにの銘めいにはピンとこないようだ。

だが恵那の説明で、リリアナは察しよく理解してくれた。

「つまり、本当はもっと長かった年代物の日本刀をわざわざ短く切って、そのサイズに仕立て直したという意味か！」

「え、恵那さん。私、刀のことはほとんど存じあげないのですが」

一方、祐理はおそるおそるという感じで訊いてきた。

「とても貴重なお品なのではありませんか？　重要文化財級の美術品だったりとかは……？」

　日本刀の銘は、刀身のいちばん元のほう、柄つかに差し込む部分に刻まれる。

　摺りあげをするときは、当然そこの部分を切除せざるを得ない。銘のない日本刀が美術品としての価値を失うのは言うまでもなかった。

「そこまでの品じゃないよ。……摺りあげを頼んだ刀鍛冶のおじさんは『もったいなくて涙が出る』って泣いてたけど。でも、どうせうちの家で眠ってたやつだしね」



　秩父の清秋院本家は槍やり・弓・刀・甲かつ冑ちゅうなど、多くの武具を所有している。

　清せい和わ源げん氏じの血をひく武将の家系なので、その手のコレクションにはことかかないのだ。本来なら、平成の世では観賞以外の用途はない。だが、恵那は『実用』のために持ち出すことがしばしばあった。

「やっぱり、道具は実際に使ってあげるのがいちばんだよ」

「だとしても、もったいないにもほどがあるだろう……」

　憂うれえるリリアナに、恵那はあっけらかんと答えた。

「そんなことないって。——実は恵那もね。療養中ヒマだったし、いろいろ試したんだ。刀工の人が日本刀を鍛きたえる要領で造ったのとか、錆さびなくて便利らしいステンレスのとか。でも、どれも満足できる切れ味じゃなくて、こいつを造ってもらうことにしたんだよ」

　恵那はほれぼれと〝愛刀〟を見つめた。

　同田貫はがっしりした造りで、見た目の華やかさは二の次の、あくまで〝実用〟本位の刀である。無骨な機能美にあふれる刃やいばだった。

「ステンレス、ですか？」

　祐理が目を丸くした。

「あの……それですと、まるで包丁の話のようにも聞こえるのですが」

「そうそう、それそれ。前にエリカさんと料理勝負で引き分けてから、恵那は料理の腕を上達させたくてさ。で、まず道具にこだわってみようと思って。実家で手頃なのを調達できて、よかったよ」

「つまり、それは武器ではなく料理道具——ただの包丁だと？」

「うん」

　リリアナの確認に、恵那はうなずいた。

　そして、問題の短刀……正しくは和包丁を振りあげてみせる。

　世界にひとつだけの逸いつ品ぴん、あらゆる食材を寸断するために『太た刀ちの媛巫女』清秋院恵那がこだわり抜いて造らせた愛刀である。

　その質実剛健な刃を眺めて、リリアナと祐理はそろって嘆たん息そくした。

「金で買えるものでもないだろうが、時価いくらぐらいなんだ……？」

「すくなくとも数百万円はすると思います……」

「でさ。道具の次は料理の先生でしょ？　ふたりとも、よかったら恵那にいろいろ教えてよ」

　大和やまと撫なで子しこの鑑かがみというべき祐理は、恵那もよく知る料理上手。

　リリアナもその道の達たつ者しやだと聞いている。というわけで、恵那はふたりの前で両手を合わせ、拝み倒した。

「このとおり、一生のお願い！」

「まあ、そういうことなら……断る理由は特にないな」

「私もです。でしたら今度、いっしょにお料理をしてみましょうか？」

　リリアナは快かい諾だくし、祐理もしっとり微笑ほほえみながら申し出てくれた。

「そのときにいろいろお教えするということでいかがでしょう？」

「本当!?　ありがとう！　あ、もしできたら、今日これからはダメ？　鉄は熱いうちに打てっていうし。あとで王様も呼んで、晩ごはんは恵那たちの手料理ってのはどう？」

「今から？　わたしはかまわないが――ずいぶんと急だな」

リリアナが目を丸くしたので、恵那は事情を語ることにした。

「東京に来る前の夜、猟師をやってる知り合いのおっちゃんに山で会ったんだ。最近、料理をはじめたって言ったら『いいのがあるから持ってけ』って、すごいのを分けてくれてさ。宅急便でこっちに送って、王様やみんなにごちそうしようと思ったんだ」

「すごい食材なのですか？」

「うん。高級厳選食材ってやつ。めったにお目にかかれないよ」

「山でとれたのなら……野鳥とか？」

「それとも、天然物の茸きのこや山菜などでしょうか？」

さすがの祐理とリリアナも、山のことにはうといようだ。

ちょっと誇らしい気分になった恵那はふふんと笑い、そして言った。

「そんなありきたりのじゃないよ。二メートルを超すメスのツキノワグマ。この数カ月、埼さい玉たまと群ぐん馬まの境目あたりに出没して、人里を徘はい徊かいしたりもしてたんだって。猟師のおっちゃんたちが苦労して追いかけて、ようやくしとめたそうだよ。ツキノワグマなのにすごい大きさだって、みんな驚いたらしいんだ」

「……熊なのですか？」

「……それが高級厳選食材？」

「うん。ちゃんと料理したら旨うまいって、おじさんも言ってたよ。恵那は熊鍋にするくらいしか思いつかないんだけど、いい料理の仕方ないかな？」

しかし、達人ふたりの反応はかんばしくなかった。

「す、すいません。熊肉を食材に使った経験は私にもないので……」

「右に同じというやつだ……。そもそも食べたことがないぞ。清秋院恵那、あなたの方はどうなんだ？　あれだけ山に出入りしているなら、そういう経験もありそうなものだが？」

「残念。実は一回もないんだ」

　恵那は山ごもり中、身を清めるため精しよう進じん潔けつ斎さいにつとめることが多い。

　肉や魚といった動物性タンパク質はもちろん、ネギ類やニンニクなど精のつく野菜も避け、果ては五ご穀こく断だちまで行う。精進落としにイワナや野ウサギをつかまえて食するときもあったが、そのために大型獣を狩ったりはしなかった。

「そっか。休養中に何度か王様からお見舞いの電話をもらったりしたから、お礼もかねてごちそうしたかったんだけど。ツキノワグマ、どうしようかな……」

　つぶやいてから、恵那はうーんと腕組みした。すると、

「草薙さんがそんなことを？　恵那さんが退屈されてないかと、気を遣つかわれたのですね」

　祐理が微笑ましげに言った。

「そうみたい。王様、何日か置きに電話くれてさ。三〇分とか一時間くらい、特に意味もないけどおしゃべりしてた。でも、半月間ずっと家に閉じこもってたから、楽しいことはそれくらいだったんだ。王様のおかげですこしマシな療養生活になったよ」

「なるほど。草薙護堂も時と場合によってはマメになるんだな……」

　一方、リリアナはちょっとうらやましそうだった。

「……わたしは草薙護堂から事務連絡以外の電話をもらって、私的なおしゃべりをしたことなんて一度もないぞ」

「……そういえば、私もです」

　祐理もハッとした表情になって、自己申告した。

「まあ、無口でもないが取りたてて多弁でもない人だから、用もないのに電話をかけてこないのは納得できる。ただ、その気になれば、そういう気も遣えるのだなーと知ると、そこのところをすこしだけつっこんでみたい気分になるな」

「もちろん、お体を悪くされた恵那さんのためにされたことです。とてもすばらしい気遣いだと思いますし、そこに文句を言いたいわけでもありません」

　リリアナの嘆なげき節ぶしを聞いて、祐理もやや悲しげに目を伏せている。

　なんだか変な雲行きになってきたよと、恵那は目を丸くした。

「ただ、恵那さんに〝だけ〟そういう気配りをされたことに、すこしだけ問題提起してみたいという気持ちに私もなってしまいました……」

「そうだな、ほんのすこしだけ」

「はい。ほんのすこしだけ、ですが」

　と、ふたりはうなずき合う。

　それから祐理がやおら恵那の方に向きなおり、微笑みかけてきた。

　冷たい冬の夜、冴さえ冴ざえと闇やみ夜よを照らす三日月にも似た、優ゆう婉えんな微笑だった。麗うるわしき月の女王が不意に意地悪な気分になったとしたら、こんなふうに笑みをこぼすのかもしれない。

「さっき恵那さんがおっしゃった方向で、取りはからいたいと思います」

「へ？　どういうこと？」

「今こ宵よい、護堂さんをお招きして、みんなで食事をしましょうという件です」

「それは願ってもないけど……ツキノワグマ、どうしよっか？　祐理たちも料理したことないんでしょう？」

「なに、そこはたいした問題じゃない」

　リリアナが鷹おう揚ような口調で言った。

「あなた自身が言ったじゃないか。鍋で煮こめば、たいていの肉は食べられるようになる。どういう形であれ火を通してしまえば、問題ないはずだ。……そういえば、エリカの家のメイドが煮こみ料理にーいつ家か言ごんあると前に聞いたような」

「アリアンナさんですね。では、あの方もお呼びしましょうか」

　すかさず祐理が提案し、リリアナもうなずく。

「それはいいな。うちのカレンも呼べば、携帯の番号を教えてくれるはずだ。清秋院恵那、草薙護堂への連絡はあなたがいれてくれ」

「う、うん。わかったよ」

　考えていたのとはすこし異なる展開だが、恵那の期待どおりに事が動きだした。

　草薙護堂が来れば、軍神ランスロットの事件で何があったのか訊くこともできる。恵那はいそいそと携帯電話を取り出し、バッテリーが切れていたことを嘆き、それから充電器はどこだとバッグを探りはじめた……。

「俺はもうすこし、羽根をのばしてもいいと思うんだ」

　草薙護堂はおごそかに語った。

　場所は秋あき葉は原ばら、香ホン港コン陸りく家けの経営するメイド喫茶『國こく士し無む双そう』の特別個室。

　年少の友人にして義理の〝甥おい〟陸鷹よう化かと、正せい史し編へん纂さん委員会のエージェント・甘あま粕かす冬とう馬まがいっしょだった。

「羽根をのばすと言いますと？　今だって結構のびのびやってるじゃありませんか」

　甘粕が飄ひよう々ひようと言った。いつもどおりのくたびれた背広姿だ。

「この間、ベイブリッジをいい感じに蹂じゆう躙りんしたのは、記

憶に新しいですし」

「う……まあ、そうかもしれませんけど。でも、ときどき思うんです。一カ月——いえ一週間だけでも、まわりに女子のいない世界に行けたら、身も心もすごく休まるだろうなって」

　甘粕は二十代後半。年長者相手なので、護堂は敬語で答えた。

「中学を卒業するまで、俺と仲のいい連中の男女比は九対一くらいで男が多数派だったんですよ。なのに、いつのまにか俺のまわりは女子ばかりになって……」

　ぜいたくな悩みかもしれないが、護堂はしばしば思うのだ。

　ああ、昔は気楽でよかったと——。

「わかりますよ。昔、僕もよく思ったもんです」

　相あい槌づちを打ったのは、女嫌いの陸鷹化だった。

　護堂の〝義あ姉ね〟にあたる魔教教主・羅ら翠すい蓮れんの直じき弟で子しである。繊細な顔立ちの美少年だが、とにかく『女』に対しては手厳しい偏へん屈くつ者ものだった。

「僕は四、五歳くらいのとき師し父ふの弟子になったんですがね。以後、六年ほど廬ろ山ざんの庵いおりで師父とふたりきりで修行を強要され——じゃない、修行に励みました」

　傲ごう岸がん不ふ遜そんな天才少年らしからぬ、哀あい愁しゅうを帯びた口調だった。

「もうね。僕の世界にいる唯ゆい一いつの他人、唯一の異性が羅翠

蓮なわけですよ。あの方が僕にあたえた虐ぎゃく待たいと理り不ふ尽じん——じゃない試練の数々を思い出すと、今でも胃が重くなります」

「あー……あの人が相手じゃなァ……」

「人喰いライオンと暮らす方が、まだ気楽そうですもんねェ……」

　護堂は同情し、甘粕も訳知り顔でつぶやいた。

　ちなみに甘粕冬馬の上役は、男装の麗人で口八丁手八丁の女たらし・沙耶宮馨かおる（♀）。ここにいる男はみんな、女難の相の持ち主かもしれない。

　そのとき、護堂の携帯電話が着信音を鳴らした。取り出してみる。

　清秋院恵那からの電話だった。

「もしもし？　ああ、ひさしぶりだなー。こっちに来てるのか。え、みんなで晩飯？　今日これから……ちょっと待て、清秋院。今、何て言ったよ？　クマ——そうか。聞きまちがいじゃなかったか。メインの食材はツキノワグマか……」

　携帯越しに護堂は恵那と話し、晩ばん餐さんの誘いを受けることになった。

　そばで聞いていた甘粕＆陸鷹化はささやき合う。

「中華料理だと、高級食材なんでしたっけ？」

「ああ、熊ゆう掌しような。でも珍味っちゃ珍味だけど、ほかにいろいろ旨うまいものがあるのにわざわざ喰いたいもんでもないぜ。……そういや、日本のどっかじゃ缶詰にして売ってるんだろ？」

「熊カレー缶ですな。熊肉のくさみがちょっと独特な、北海道限定

グルメですよ」

　一方、護堂は話し終えて、携帯をオフにするところだった。

「じゃあ一九時頃に合流するよ。ああ、またあとでな。……こういうことになったんで、俺はもう行くよ」

　携帯をしまいながら、護堂は告げた。

「なんか清秋院以外にも、万里谷とリリアナもいるらしい。——そうだ。甘粕さんもいっしょにどうですか？」

「残念ながら、これから一仕事ありまして」

　メイド喫茶で絶賛さぼり中にも見えるエージェントは、おだやかな微笑と共に答えた。

「じゃあ鷹化は？」

「やだな叔お父じ上うえ。そんな女ばかりの場所に、僕が行くわけないじゃないですか」

「それもそうか」

「いや、もちろんお供せよとのおおせであれば、そこが屍し山ざん血けつ河がの生き地獄だろうとごいっしょいたしますよ。僕の腕が必要でしたら、どうぞご命令ください」

「べつに、そこまでの用事じゃないって。変なこと言って、悪かったな」

　苦笑して護堂は席を立ち、メイド喫茶の特別室から出ていった。

　それを見送ってから、残ったふたりは目くばせを交わす。

「……やばそうな食事会になりそうな気配が、ぷんぷんしてるんですから」

　あきれたというより、感じ入ったという口調で甘粕はつぶやいた。

「適当な理由をでっちあげて逃げればいいのに、律りち儀ぎな人ですねェ」

「どうかなー。案外、そういう節目節目での律儀さとかマメさとか面倒見のよさが、叔父上の覇権を陰から支えているのかもしれないぜ」

　とは、陸鷹化の弁だった。

「そりゃ、自分から鬼の巣そう窟くつに飛びこまなくてもいいだろうにとは思うけどさ！」

　ちなみに言った当人には、これが予言となる自覚など皆無だった。

　この夜、草薙護堂はさまざまな形で追いつめられ、苦難を味わう羽目になるのだが、神ならぬ身の彼らには無論わかるはずもないのだった。

第３話　カンピオーネと勉強会

　草くさ薙なぎ護ご堂どうは神様を殺してしまった魔王とやらである。

　カンピオーネとも呼ばれ、多くの人から怖がられたり迷惑がられたりしている。

　しかし、護堂は大魔王さまである前に高校生であった。神様や魔王仲間とのケンカ沙ざ汰たに巻きこまれることの多い日々だが、やはり学生の本分にこそ力を入れたい。

　学生の本分。すなわち勉強である。

「ガスコインやランスロットの騒ぎもあったから、テスト勉強が進んでないんだよな」

　一一月の最終日、護堂は憂うれい顔でつぶやいた。

　すでに二学期も終盤である。城じよう楠なん学がく院いんの高等部では、一二月の第一週に期末試験が行われる予定だった。だが、最近の護堂はひどく多忙であった。

　まず学園祭。そのあとはアテナ再襲撃。神しん祖そグィネヴィアの暗躍。

　さらにアレクサンドル・ガスコインによる天あま之の逆さか鉾ほこの奪取。それを追って渡英したら、今度は東京湾で浮島の騒動。

そして、槍やりの軍神ランスロットとの死闘……。

　結果、自然と学業はおろそかになる。

　期末テストに向けての準備は、十分とは言えない状況であった。

「今からでも気合い入れて勉強しなきゃだな。巻きを入れていこう」

　根がまじめな護堂は、誓うように言った。

　すると、そばにいたエリカが決意をくじくように笑いかけてくる。

　ちょうど天気のいい日の昼休みで、護堂・エリカ・祐ゆ理り・リリアナという『いつもの面子メンツ』で中庭に集まり、ランチ中だったのだ。

「今さら努力しなくてもいいんじゃないかしら？　護堂の場合、学業成績が将来のキャリアに影響することもないでしょうし」

「あのな……俺は高校で留年を経験する気ないぞ」

　さらに言うなら、職業欄らんに『魔王』とか書きこむ予定も。

　だが、エリカは尚なおも軽やかに笑う。

「大丈夫よ。日本の学校を卒業するのがむずかしそうならヨーロッパに留学して、そのまま大学まで進めばいいんだから。わたしたちの結社《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》と提携している学校が向こうにはいくつかあるの。いつでも手配するわよ」

「外国に移住する気だって、今のところないっ」

「じゃあ、『教授』の魔術をかけてあげましょうか？　教科書の内容くらい、かんたんに丸暗記できるの知ってるでしょう？」

「神様との戦いじゃないんだから、そんなカンニングできるか！」

　悪魔的提案を一いつ蹴しゆうしてから、護堂は仲間たちに問いかけてみた。

「みんなは結構、成績よかったよな。今度のテストも大丈夫そう

か？」

「基礎教養や文系に属する教科は問題ないのですが……」

　憂ゆう鬱うつそうにリリアナが答えた。

「数学、物理といった理系の教科はどうも苦手です。暇ひまを見て、すこしずつ復習してはいましたが、はかどっているとはとても言えませんね……」

　なるほど。リリアナは完全に文系の人なのか。護堂はうなずいた。

　ある意味で、アナログの世界で生きる『魔女』らしい傾向だとも思える。

「リリアナもエリカも歴史とか妙にくわしいもんなあ」

　歴史どころか考古学、比較文化学などにもくわしい異様な十代女子なのだ。

　さらに言うと、国語の現代文・古文・漢文でも当たり前のように好成績をマークする。日本語のネイティブスピーカーである同級生たちの立つ瀬がないほどに。

「だがエリカ。その手の科目が得意じゃないのは、あなたもいっしょだろう？　ちゃんと準備はしているのか？」

「それは愚ぐ問もんよ、リリィ」

　リリアナに確認されて、エリカは悪戯いたずらっぽく微笑ほほえんだ。

「エリカ・ブランデッリはね。自分が面白いと思うことの研究になら、いくらでも時間をついやすけど……無機質な記号と数式の羅ら列れつに形けい而じ上じよう的な意味を見出みいだそうとするほど、暇を持てあましてはいないわ」

「あー……つまり、何もしてないんだな」

「ええ。テストがどんな点数だろうと、わたしという人間の何が変わるわけでもないし。為なすがままでいいんじゃないかしら」

　護堂のつぶやきに、あっさりとエリカはコメントする。

　このあたりは揺るがぬ自己を持つ者の強さ、大らかさと言おうか。むしろ感心させられるマイペースぶりであった。

「あ、そういえば。万ま里り谷やにはランスロットの調査で、かなり時間を使ってもらったよな。今さらだけど悪い。テスト勉強の方にしわよせがいってるんじゃないか？」

　思い出して、護堂は即座にあやまった。

　謎めいた軍神の素す性じようを探るため、祐理にはプリンセス・アリスと共に欧州の地で幾日もすごしてもらったのだ。

　だが、この謝罪を媛ひめ巫み女こはおっとりと受け流してくれた。

「気になさらないでください。試験にそなえて特別な勉強をすることは、いつもありませんので。大丈夫ですよ」

「え、そうなのか？」

「はい」

　今まで護堂たちのテスト話をひかえめに聞くだけだった祐理。

　たおやかな大和やまと撫なで子しこが何の気負いも強がりもなしに微笑むのを見て、護堂のなかである疑惑が浮上してきた。

「もしかしてさ。万里谷は成績が結構いいどころじゃなくて、すごくいい方なのか？」

「──！　わ、悪くはない方だと思いますっ」

　はぐらかされた。

　ふつうなら、成績の悪い人間が使いそうな答え方だ。だが祐理のまじめさ・優等生気質・ひかえめさを考慮すると、逆の可能性の方がありそうだった。

　同じことを考えたのだろう。エリカとリリアナも乗っかってきた。

「淑しゆく女じよにあるまじき野次馬根性だけど……わたしも興味あるわね」

「たしかに。平凡な成績だったら、逆に万里谷祐理はあっさり教えてくれそうだしな」

　紅あかと青の騎士たちが言うのを受けて、護堂は訊たずねてみた。

「中間テストは点数どれくらいだった？　いや、言いたくなかったら教えてくれなくて全然いいんだけど、もしよかったら」

　三人そろって媛巫女を見つめる。すると祐理は恥ずかしげに目を伏せつつ、小声で「……くらいでしょうか」とささやいてくれた。

　恥ずかしそうな口調に反して、点数の方は全教科満点に近い数字であった。

「学年全体でも、五位以内に入っていそうな点数だな……」

「祐理はまじめだから、毎回そのくらいの点を取ってそうよね……」

　リリアナとエリカが感心する横で、護堂も思わずつぶやいた。

「すごいな。反そり町まちと同じくらいの成績だったのか」

「あ……そうだったんですか」

「そうなんだ。あいつ、あれでものすごく成績がいいからさ」

「「え？」」

　祐理のあいづちに答えると、エリカとリリアナがきょとんとした。

「ちょっと待って、護堂。今の名前——わたしたちと同じクラスの？」

「いつも妹やメイド喫茶がどうとか騒いでいる、あの彼ですか？」

「もちろん。反町のやつ、学年トップを狙ねらえるくらいテストの点数はいいんだぞ。……意外に思うのはわからないでもないけど」

「あの子というか、あの子たちのあだなってたしか……」

「三バカ、と言われていたような……」

「まあ、行動と性格がバカっぽいのはまちがいないからな……」

　エリカとリリアナはこの世の不条理に直面したような面おも持もちであった。

　学校でここまで困こん惑わくする彼女たちを見るのは、初めてかもしれない。思わぬ事態に奇妙な感かん慨がいを覚えながら、護堂は付け加えた。

「ついでに言うと、名な波なみも俺より頭よかったと思うなあ。高たか木ぎはたしか、俺と同じくらいの成績だったか？」

　三バカと呼ばれるクラスメイトの名を列挙しながら、護堂はふと思いついた。

「次のテストの前は、ああいう頭のいいヤツに勉強を教わってみるのもいいのかもな。いいかげん俺も荒っぽいことと縁を切って、高校生らしいことに集中したいし」

「次のなんて言わずに、今回のテストでもやればいいじゃない」

　エリカに言われて、護堂は苦笑した。

「期末までもう何日もないんだぞ。いきなりそんなこと頼んだら迷惑だろ。向こうだって自分の勉強してるだろうし……」

　言ってから気づいた。そういえば『特別な試験勉強をしない』と明言した成績優秀者がすぐそばにいたような。

　提案したエリカはといえば、すでに彼女の方を見つめていた。

　視線の意味に気づいてリリアナも、そして護堂もそちらを見やる。三人からの注視を受けて、ひかえめなお嬢さまは恥ずかしげに身もだえした。

「というわけで祐理。あなたには道の先をいく先せん達だつとして、わたしたちを教え導いてほしいと思うのだけど、どう？」

「あ、あの、教え導くなんて、おこがましいと言いますか……」

「勉強会ということでいいじゃない？　正直、定期試験の準備なんかで時間を使う気はまったくないの。でも、たまにそういう目的で団結しておくのも、わたしたちにとって面白い刺激になると思うのよね」

　エリカらしい言いぐさを聞いて、護堂は苦笑した。

　だが、たしかに学校行事で力を合わせたことは今までなかったような——。そのことに祐理も思い至ったのかもしれない。

　くすりと微笑んでから、やわらかな声で言ってくれた。

「私などでお役に立てるかはわかりませんが……でも、みなさんといっしょに勉強するのはたしかに楽しそうですね」

　放課後。四人は緊急の勉強会を開くべく、いっしょに学校を出た。

「どこに行こうか。やっぱり俺の家か、エリカのマンションあたりがいいかな？」

「こういうとき、日本の学生はよく学校近くの飲食店に集まりますよね？」

　校門を出たところで護堂が言うと、リリアナに確認された。

「ああ。ファミレスとかファストフードの店なんかにな」

「どうせですから、わたしたちもその慣習にならってみましょう。郷ごうに入っては郷にしたがえ。ローマではローマのやりかたがいちばんいいはずです」

　勉強会という企画に遊び心を刺激されたらしい、リリアナの提案だった。

「そういえば、私も茶道部のみなさんとああいうお店にときどきごいっしょします」

「食事を味わうためなら遠慮したい無個性な場所だけど、様式美を踏とう襲しゆうするのは悪くないわね。リリィの案に乗りましょう」

　祐理がすこし目を輝かせると、エリカも鷹おう揚ようにうなずいた。

　集まりの主目的が『勉強』から『会』に変わってるなと苦笑しつつも、護堂は異論を唱えなかった。テスト直前の勉強会で実利を重んじるのは野や暮ぼだろう。

　大切なのは『みんなで集まって勉強した』という事実なのだ。

　それにしても——。

　エリカ・祐理・リリアナの三人はファストフード店の類たぐいと縁のうすい日常生活を送っているらしい。

　一連の発言から察せられた、彼女たちのプライベートだ。

　みんな、やっぱり『ふつう』とはすこしちがうんだなと、護堂はうなずいた。

　魔術やら霊力やらを幼い頃から学んできた、姫・お嬢さま・騎士の一団なのだ。今日は自分が普通人代表の一高校生として、彼女たちをフォローしなくては——。

　ひそかな護堂の決意であった。

　それはさておき、四人で学校周辺のファミレス、ファストフード店を見てまわる。

　だが、結果はかんばしいものではなかった。

　どこの店も城楠学院の生徒で混雑していて、護堂たち四人が潜もぐりこむ余地はなかったのである。考えてみればテスト直前。『友達みんなで集まって勉強会』を企画・実行するグループはたくさんいるはずだった。

「仕方ないな。やっぱり俺の家に行くか」

　学校から草薙家まで、徒歩一五分程度の距離。

　合理的な代案のつもりだったが、決然とエリカがかぶりを振った。

「いいえ。こうなったら初しよ志し貫かん徹てつしてみましょう。どこか適当な街に電車で移動すれば、空すいてる店も見つかるんじゃないかしら？」

　護堂が『本末転倒』の四文字を思い浮かべた瞬間だった。

　そして四〇分後、護堂はしみじみつぶやいた。

「こういう日もあるんだなあ……」

　四人は城楠学院のある根ね津づから上野にやってきたのだが。

　しかし、駅近辺のファストフード店とファミレスは、どこもいい感じに混雑していた。

　ある店は妙齢のおじいさん、おばあさんでいっぱいだった。みんな旅支度をしていた。どうやらバスツアーか何かを終えて、休憩中だったらしい。

　ある店は逆に二〇～三〇歳くらいの若者たちがにぎやかに騒いでいた。

　彼らの会話を小耳にはさんだところ、みんな小劇団の仲間らしい。公演後の打ち上げで居酒屋へ繰りだす前に、前ぜん哨しよう戦せんをはじめていたのだ。

　また、べつの店では。

　一〇人ほどの若い男女が大量のコピー用紙を店中のテーブルに広げ、ホッチキスで綴とじて製本している真っ最中だった。遠目にちらりと見たら、用紙にはマンガとおぼしきイラストとコマ割りが描きこまれていた。

　いわゆる同人誌――コピー本の製本作業のようだった。

　店内で何をしようと結構フリーダムに許される、繁華街のファストフード店らしい光景ではあった。そういえば、上野は同人誌の聖

地だという秋あき葉は原ばらの隣だ。

「探せば俺たち四人くらい入りこめる店はどこかにありそうだけど、そのために時間を使うのはちょっとバカバカしいよな」

　あきらめて、俺の家で勉強会をはじめよう。

　護堂がそう続けようとしたら、エリカが先に発言した。

「じゃあ、いっそホテルの部屋でも取ってみましょうか」

　原稿執筆に行きづまった、一昔前の小説家かマンガ家のような発想。

　護堂は異議を唱えようとしたが、その必要はなかった。

「え、エリカさん。さすがに学生の勉強会でそこまでするのは……」

「費用対効果が悪すぎる。明らかな浪費というやつだぞ」

　祐理がひかえめに意見し、リリアナも憮ぶ然ぜんとした面持ちで苦言を呈ています。

　そうか。護堂は気づいた。

　祐理とリリアナのふたりはスーパーなどで買い物して、自みずから料理を作ったりする。その関係で、お姫さま育ちのエリカより金銭感覚が一般人寄りなのだろう。となると案外、実家住まいで自炊経験ゼロの一般的女子高生より、その辺はしっかりしているかもしれない。

　うなずく護堂をよそに、エリカはにっこりと笑った。

「でも考えてみて。この支出で、わたしたちは時間の浪費を回避できるだけじゃないのよ。みんなで集まって勉強に励むという、今までになかった試みで団結をはかることができる。そこまで考慮したら、高い買い物ではないと思うけど？」

　いや、明らかに分ぶん不ふ相そう応おうな金の使い方だろう。

　即座につっこもうとして、護堂は驚いた。なんとエリカの弁べん

舌ぜつによって、

「たしかにそうかもしれませんが……」

　と祐理がうつむき、考えこんでしまったのだ。しかもリリアナまで、

「まあ、その主張に一いち分ぶの理があるのは認める……」

　と、渋じゆう面めんでつぶやく始末。そうか。またも護堂は気づいた。

　金銭感覚が一般人寄りでも、やはり同じではないのだ。今のエリカ節ぶしによって、心が揺らいでしまうくらいには。それと、もうひとつ。

　彼女たちはできるかぎり『勉強会』を非日常のイベントにしたいらしい。

　そのことにも気づいた。いつもふつうっぽいこととは縁のうすい女子たちが、ひさしぶりの平和をたわいのない学校行事で楽しもうとしている。それが妙に微笑ましくなり、護堂もこのノリにつきあってみたくなった。

　とはいえ、さすがにホテルまで使うのはやりすぎなわけで。

「ちょっと待っててくれ。近くに知り合いのやってる店があるから、場所を貸してもらえないか頼んでみる。こんなことで無駄に金を使うわけにもいかないからな……」

　護堂は携帯電話を取りだした。

　これはこれで少々問題のある代案なのだが、背に腹はかえられない。

　非常事態というほどではないが緊急事態を乗り切るため、護堂は知り合いの力を借りることにした。これもみんなに楽しんでもらうためと思いつつ——。

　数時間後。勉強会はつつがなく終了した。

　この日、たまたま休業日だった知人の『店』を間借りして、祐理を中心に試験勉強。わからないところを訊きいたり、逆に訊かれたり。ノートを写させてもらったり、ときどき雑談をしてなんでもない話題で笑ったり。

　まあ、この数時間でテストの点数がアップするかは不明だが、エリカも祐理もリリアナも、護堂自身も満足できるひとときを過ごすことができた。

「じゃあ、俺は今日のお礼代わりに掃除をしてくからさ。みんな、先に帰ってくれよ」

　仲間たちに告げながら、護堂はロッカーから掃除用具を取り出した。

　実はこの店、護堂のバイト先なので、どこに何があるかは熟知している。

　店長兼オーナーから合い鍵かぎもあずかっているため、休業日の今日も店に入ることができたのだ（もちろん事前に電話で許可を取ったが）。

「護堂さん。お掃除でしたら、私たちにも手伝わせてほしいのですが……」

「その前にいくつか確認させてください。よろしいでしょうか？」

　いきなり祐理とリリアナが顔を見合わせてから、訊ねてきた。

「この店はあなたのアルバイト先である。そして、店の主あるじから合い鍵を持たされるほど信頼されている。そういうことでよろしいのですね？」

　リリアナの問いかけに、護堂はうなずいた。

「ああ。ヤナギさんっていうんだけどさ。ここの店長さん、今いそがしいんだ」

　ヤナギさんの友人がワインと洋食の店を半月後にオープンするのだという。

　昔いっしょにバーテンダーの修業をした古い仲間らしい。人生の

かかった勝負を助けるため、店作りとメニューの準備を手伝うことにしたのだとか。

　なので今、ヤナギさんは友人の店がオープンする予定地に足しげく通っている。

　泊まりこみになる日もあり、自分の店がおろそかになるときもしばしばだった。それを気にしたヤナギさんは、唯ただひとりのバイト男子に合い鍵を託たくしたのだ。

『僕が店に入るの遅れそうなとき、開店準備とかお願いできないかな？』

『それはいいんですけど、バイトの学生に鍵まで渡すのはいかがなものでしょう？　俺が悪いことしないともかぎらないですし』

『ふふっ。護堂くんがそんなことするはずないだろう？』

　まさか、各地の名所旧跡にしてきた自分の悪あく行ぎようを告白するわけにもいかない。

　イケメンのヤナギさんに微笑まれて、護堂は大いに恐縮したものだ。

『それにさ。大学に通いながらバイト先の店長やる子とか、たまにいるじゃない？　僕もそういう経験あるし。護堂くんもそのノリでひとつ頼むよ』

『あのー……俺は一応、高校生なんですが』

『大丈夫。うちの履歴書だと、〝そういうこと〟になってるから』

　さらりと文書偽ぎ造ぞうを告白しつつ、ヤナギさんは言った。

『なんなら開店前に来て遊んでてもいいし、閉店後に泊まっていってもいいよ。そのあたりは好きにしていいから、しばらくパートタイムの店長代理もお願いするよ』

　以上が上野のダイニングバー『three backs』店主とのやりとりだった。

　余談だが、常連さんしか来ていない日などヤナギさんは営業の途

中で抜け出して友人の店に向かい、護堂が本当に店長代理をつとめたこともある。

　すごくいい人だけど、ときどき無茶やるよなーと護堂が回想していると。

「たしかにわたしたちは、日本の一般的高校生が言う『ふつう』の基準をよくわかってないのかもしれませんが」

　リリアナが憂鬱そうにため息をついた。

　その隣で祐理も心配そうに店内を見まわしてから、言葉を継ぐ。

「それでも、こういうお店でのアルバイトが『ふつう』でないのは承知しています」

　祐理の視線は、カウンターの向こうにならぶ酒さか壜びんの数々に向けられていた。ヤナギさんが十数年かけて集めたコレクションで、貴重な銘めい酒しゆもすくなくない。

「言いにくいのですが、勉強会の場所にわざわざここを選ぶのも……」

「ふつうとは言えないはずですね……」

　祐理が指摘すれば、リリアナもうなずく。護堂はあわてた。

「い、いや、それはさ。みんなが誰かの家とかじゃなくて、外で勉強したいようだったからだよ。たしかにちょっとマズイかもとは思ったけど、この際いいかなーって」

「そこを〝ちょっと〟ですませるところが、護堂の護堂たるゆえんよね」

　今の言いわけに、エリカが思し慮りよ深げに口をはさんだ。

「そもそも、こういう場所を選択肢しとして持ってることがおかしいわけだし。護堂って日常の八割方はふつうに暮らしているくせに、残り二割で必ず異様な資質をかいま見せてくれるわよね。さすが神殺しの魔王だわ」

　この心外な言いように、祐理とリリアナの両名も深くうなずく。

かくして、草薙護堂の『普通人代表・一高校生』という看板に疑問符ふがつく形で、勉強会は終了したのである。

明日からはもう一二月という日の、初冬の一幕であった。

第４話　王様のゲーム

　草くさ薙なぎ一族には『正月に集まって宴会をする』という毎年の習慣がある。

　本家とその親類縁者が一堂に会し、みんなで大酒を飲むのだ。

　草薙の血筋には不思議と大酒飲みが多く、めったに下げ戸こは生まれない。

　先祖代々飲みつづけてきた大量の酒がロシア人並みのアルコール分解酵こう素そを一族にもたらした……とは、親戚の誰かが口走った妄もう言げんである。

　この集まり、護堂にはなかなか悩ましいイベントであった。

　宴会だけならべつにいい。たまにしか会えない親戚も多いし、旧交をあたためるいい機会だと思う。しかし。

　この宴うたげには二次会がある。こちらは実に遺い憾かんな内容だった。

　花札・丁半バクチ・バックギャモン・ポーカー・麻雀マージヤンなど、和洋中なんでもありのゲーム三ざん昧まいとなるギャンブル大会。

　しかも、きちんと金まで賭ける。それも結構、洒落しやれにならない額を。

　この集まり、未成年は参加厳禁が建前だが、護ご堂どうは六歳の頃からまざっていた。

五年前に死んだ親戚のじいちゃん——その昔、関東最強にして最後の博ばく徒とだったという『伝説』所持者の老人に、護堂は可愛かわいがられていたのである。このじいちゃん、会うたびにいろいろ〝ゲーム〟を教えてくれた。

それを知った親戚が、護堂を面白半分で正月の遊びに連れこんだのだ。

……そして、大勝ちしてしまった。

あとは転がる石のように。ライク・ア・ローリング・ストーン。

雪せつ辱じょくを期す大人たちは『今年こそ倒してやる』と息巻き、いつもの会に必ず参加するよう正月が近づくたび護堂に強制するのだ。そこで下へ手たに勝つのがまたいけない。今年こそは、今年こそはと狂きよう宴えんが繰りかえされて、早十年。

「高校生にもなったことだし、そろそろ足を洗わなきゃダメだよな」

護堂は自みずからへの戒いましめをつぶやいた。

師も走る一二月の後半頃だった。正月はもうすぐ。今年こそ忌いまわしいお遊戯会と縁を切らなくては……。

まあ、出ても目立たないよう振る舞えばいいのかもしれない。

だがダメなのだ。勝負しているうちに『負けてたまるか』と闘争心に火がついてしまう。鉄てつ火か場ばとはよく言ったものだなーと、しみじみ思う。

そろそろ対策を考えなければ——。

頭を悩ませているうちに、護堂は一二月二五日を迎えた。

ささやかなパーティーなど催もよおした、クリスマスイブの翌日である。この日も草薙家にはエリカ・祐ゆ理り・リリアナ・恵え那なの四人——「いつもの面子メンツ」が集まっていた。

草薙家で開かれた昨夜のパーティーは遅くにお開きとなった。

そこで翌日の朝、家の片づけをするためにあらためて集まってく

れたのである。

　全員で片づけと掃除をすませたあとは、居間で一休み。

　雑談などしつつ年末年始の予定を話したりしていた。ここで護堂は媛ひめ巫み女こたちに歳末の催しがあると知り、ある理由から自身も立ち会うことを決めるのだが――。

　これは、そのあとに起きた挿そう話わである。

「ごめんなさい。ちょっと込み入った用件みたい。外で電話してくるわ」

　不意に着信音を鳴らしたエリカの携帯電話。

　液晶でかけてきた相手の名前を確認して、金髪の少女は腰を上げた。

「あいつの方も年の瀬でいそがしいみたいだなあ」

　居間から出ていくエリカの背中を見送って、護堂はつぶやいた。

　祐理と恵那の媛巫女ふたりも年末年始は〝繁はん忙ぼう期き〟だという。やはり、この時期はみんなあわただしいのかもしれない。

「ヨーロッパですと、年末年始よりもクリスマス――ちょうど今の時期がいちばんにぎやかで、いそがしくなります。年が明けると、かえって静かなものですね」

　欧州出身のリリアナが言う。

　考えてみれば、太たい陰いん暦れきやヒンドゥー暦で新年を祝う国も多い。年末年始を巡る諸事情、地域によってだいぶ異なるようだ。護堂は面白く思った。

「そういえば、王様は新年会に出たくないんだっけ？」

「たしか、むずかしい二次会があるとおっしゃってましたよね？」

　恵那と祐理に問いかけられて、護堂はうなずいた。

「ぶっちゃけると、二次会ってのはあまり正確な表現じゃない。うちの親戚の男どもが全員集合して、洒落にならない金額を賭けて徹夜でバクチ三昧する集まりなんだ。それも小料理屋なんかをわざわざ貸し切りにして……」

「へえ。なんか面白そう」

「ば、ばくち……賭け事をされるんですか!?」

　恵那が目を輝かせるのに対して、良識派の祐理はびっくりしていた。

「あ、あの。そんな集まりにどうして未成年の護堂さんが参加されるのでしょう？　ちょっと理由がわからないのですが」

「あー……子供の頃にうっかり大勝ちしたら、次の年から強制参加に」

「まあ」

「俺もいいかげん、賭け事から足を洗いたいと思ってるんだけど」

「そ、そういうことを護堂さんのお歳としでおっしゃらないでください……」

　祐理が遺憾の意を表すのも当然だ。一方、リリアナはこんなことを言った。

「草薙護堂。よろしければ、わたしもごいっしょしましょうか？　侍じ従じゅう長ちようをつとめる身としては、そういう席であなたをフォローするのも役目のひとつでしょうし」

「やめといた方がいいかもなあ。リリアナにはたぶん……なじめない場所だから」

「なじめない？」

「わかりやすく言うとさ。サルバトーレ・ドニの野郎がいるだろ？　あいつと心の兄弟みたいなノリの連中が何十人もたむろして、バカみたいに目を血走らせながらギャンブルに狂っているんだ。ブレーキの壊れたダンプよろしく」

「「…………」」

　能天気すぎるイタリア人青年の名に、祐理とリリアナはそろって沈黙した。

　半分あきれて、半分感心しているという表情。理屈の通用しないバカ騒ぎであることを理解してくれたようだ。

　だが、三人目の女子・恵那がここでにやりと笑った。

「そういうところに子供の頃から出入りしてたってことはさ。王様、そっちも結構いける人だったんだ。なら、ちょっと恵那と勝負してみない？」

「清秋院と？」

「いろいろつきあいのあるおっちゃんとか神かん主ぬしさん、剣術の先生なんかに教わって、恵那もいける口なんだなー。試しにいいでしょう？」

「断る理由はないけど、おまえの知り合いもだいぶ無茶苦茶みたいだな……」

　顔見知りの少女にバクチを教える神職や剣道家。

　硬い肩書きのくせにヤクザな人物像を聞いて、思わず護堂はつぶやいた。

「うちに今、何があったかな？　探せば花札とかいろいろ出てきそうだけど」

「花札かあ。うん、あれなら祐理もやれるし、いいかも」

「「えっ？」」

　聞き捨てならないことを恵那が言ったので、護堂とリリアナはそろって聞きかえした。

「万ま里り谷やって実はバクチとかやる人……のわけないよな？」

「あ、はい。昔、恵那さんから楽しい遊びがあるからと教わって、ときどきおつきあいしていたのですが……もしかして」

「祐理は勘かんがいいから、実はかなり手て強ごわいんだ。いっしょにやると楽しいんだよね」

「や、やっぱり賭け事だったんですか、あれは!?」

「気にしなくていいよ～。お金は一円も賭けてなかったんだからさ」

「で、でもっ。そういえば、あのお札で私が勝つと、恵那さんはなぜかいろいろとご馳ち走そうしてくださいました!?」

「まあ、それくらいの緊張感はあった方が面白いからねー」

「何も知らない万里谷を変なことに巻きこむなよ……」

　知らずにしでかしていた自身の不品行を知って祐理が愕がく然ぜんとし、恵那はあっけらかんと笑い、護堂はたしなめる。

　これを傍はたで聞いていたリリアナがこほんとせき払いした。

「みんなでやるのでしたら、日本のゲームではわたしが若じゃっ干かん不利になるかもしれません。その点に配慮していただきたいのですが」

「じゃあトランプとか、サイコロを使うような単純なのがいいか」

「リリアナさんも参加するんだ？　なら、本式にやらないとダメだよねえ」

　考える護堂の前で、恵那がポケットを探った。取り出したのは数枚のコイン。おもちゃなどではなく一〇〇円や五〇〇円の硬貨である。

「お、お金を賭けるのですか、恵那さん!?」

「これくらいなら、かわいいものじゃない？」

「昼飯代程度か……。まあ、この金はあとでみんなの昼飯を買ってくるのに使うってことなら、べつにかまわないか」

　そろそろ昼時なので、護堂はつぶやいた。

　祐理とリリアナは乗り気でないかもしれないが、ふと興味がわい

たのだ。

　実は手強いというお嬢さま、賭け事にはうとそうな女騎士、そして早くも勝負師の気配を漂わせる自然児とのゲームはどういう展開になるのだろうと。

　単純で公平なゲームということで、選ばれた種目はチンチロリン。

　ただし『一ヒ・二フ・三ミ』や『四シ・五ゴ・六ロ』といった面倒な役のルールは全てなしにする。ドンブリも使わない。サイコロを三つ振って、その出目をくらべるだけのゲームにした。

　親を交代しながら、護堂・祐理・リリアナ・恵那は遊戯に耽ふける。

　そして、二〇分後。

　草薙家の居間にて行われた勝負の結果、全員分の賭け金が護堂の前に集められた。もっとも、ひとり一〇〇〇円ずつというささやかな金額であったが。

　勝負の流れは割と順当なものだった。

　やはり不慣れそうだったリリアナが最初に持ち金を全て失い、そこからは三人でまあまあ拮きつ抗こうした勝負。だが祐理も脱落し、護堂と最後まで競っていた恵那も力尽きる。

　こうして、護堂は唯ゆい一いつの勝者となったのである。

「うー……王様、もう一回勝負して！」

「じゃあ、これはみんなに返そうか」

　恵那に請こわれて、護堂は四千円分の一〇〇円玉や五〇〇円玉を均等に分配した。

　そして二回戦。また草薙護堂の勝利。

　三回戦、また護堂の勝ち。四回戦、またまた護堂。

「……何か勝つための秘ひ訣けつでもあるのですか？」

　四度目の勝負のあと、リリアナが不思議そうに訊きいてきた。

「運の要素が大きいこのゲームで、ここまで安定して勝ちつづけられる理由がちっとも想像できないのですが」



「まあ、あるって言えばあるかな」

　あっさり護堂が言うと、重ねてリリアナに訊かれた。

「差しつかえなければ、お教えください。それとも秘伝か何かとか？」

「そんなんじゃないよ。たださ。自分が負けるとか微み塵じんも考えないで、俺が勝って当たり前だって念じながらサイコロを振るんだ」

「それだけで、この勝ちっぷりですか!?」

　驚くリリアナに護堂はうなずいた。

　子供の頃、遠縁のじいちゃんから学んだ『勝つ秘訣』。大切なのは運、自信、場の読み、勝負度胸なのだと折にふれ語っていた老人が授けてくれた究極の秘訣だった。

　この老人、背中に倶く利り伽か羅ら竜りゅうの紋もん々もんを背負い、長ドス一本で二〇人のゴロツキと渡り合った武勇伝ありなど、かなり強烈なキャラクターだった。そのため教えのひとつひとつが幼少期のトラウマのごとく、護堂のなかでいまだに活いき活いきと息づいているのである。

　実は神様との戦いにおいても、意外と役立ってくれている。

「やっぱり、神様を殺しちゃうような人はふつうじゃないんだねー……」

「そういえばロンドンへ旅行したとき、プリンセス・アリスからうかがいました。アレクサンドル・ガスコインさまもギャンブルがものすごく得意でいらっしゃると……」

　恵那と祐理から口々に言われて、護堂はあせった。

「こ、こんな特技ともいえないようなことをカンピオーネと関係あるように言うのはやめてくれ。ガスコインのやつを引き合いに出すのも」

　まさか、自分とアレクにそんな共通項があったとは。

　内心の動揺を隠しつつ訴えたものの、さらにリリアナまでが言う。

「ですが、わたしも聞いたことがあります。以前、サルバトーレ卿きようがモナコで初めてルーレットをされたとき、ビギナーズラックにまかせて桁けたはずれの大金を稼かせがれたと……。すくなくとも人並み以上の強運と勝負度胸を持っているはずの魔王方の場合、こういう分野の才能がふつうの人間よりおありなのかもしれませんね……」

　まじめくさった論評に、護堂はあわてて反論した。

「ま、待ってくれよ。俺より賭け事に強い人間なんて珍しくもないんだぞ。ほら、たとえばエリカとか」

「——わたしがどうかしたの？　みんな、なんだか楽しそうじゃない？」

　タイミングよく、金髪のイタリア人少女が居間に帰ってきた。

　かなり長く席を外していたから、よほど込み入った用件だったのだろう。だが今、エリカはいつもどおりの華麗さと明るさで微笑ほほえみかけている。

　その笑顔を見て、護堂は思いついた。

「なあエリカ。ひさしぶりに賭けをしないか。俺とおまえ、どっちか負けた方がみんなの昼飯を買ってくるんだ」

「その遊び、なつかしいわね。いいわよ」

　快かい諾だくしたエリカは財布から金貨を一枚取り出した。

　帝政ローマ期の骨こつ董とう品ひんだという。こんなものを持ち歩いているところが彼女らしい。エリカは親指で金貨を宙に跳ねあげた。

　落ちてきたのを左手の甲で受けとめ、右手でさっと隠す。

「護堂に選ばせてあげるわ。裏と表、どちら？」

「裏だな」

即答すると、エリカは右手をあげた。

あらわになった金貨には、何代目かは知らないがローマ皇帝とおぼしき人物の顔が刻まれていた。これは表側のしるしだった。

「……俺の負けか。エリカにはなかなか勝てないんだよなあ」

エリカが転入してきた直後、ふたりだけで昼食を食べていた頃。

よくこうして買い出し役を決めていた。祐理が加わるようになった時期から、やらなくなっていったのだ。最初は護堂の方が勝ちつづけていた気もする。だが、いつのまにか負けがかさむようになっていた。

「ポーカーみたいなカードを使うのでもめったに勝てないし。……こんな感じで俺よりギャンブル強い人間だっているんだから、あまり変なこと考えないでくれよ。な？」

今の一幕を眺めていたリリアナ・祐理・恵那に声をかける。

なぜか三人がぎこちない表情でうなずくのを見てから、護堂は今までチップ代わりにしていた硬貨を取りまとめ、腰を上げた。

エリカからも昼食代を受け取り、そのまま家の外へ出ていくのだった。

かくして、草薙家の居間に残った女子四名。

護堂が席を外してから一分後、リリアナはおもむろに言った。

「エリカ。今のあれだが……やったな？」

「ええ。そうでもしないと、この手のゲームではなかなか勝てないのよね、護堂には」

しれっとエリカが認めたため、祐理はふぅとため息をついた。

「やっぱり魔術でズルをされていたのですね……」

「いかさまやってたんだ！　でも、よく王様にバレないねー」

「そこは上う手まくやってるもの。たまに負けたりして。それに護堂本人が冗談みたいに賭け事で勝ちつづける人だから、わたしが同じことをしてもあまり疑わないの。『そういうこともあるんだろう』くらいの感覚で」

　感心する恵那に答えてから、エリカはテーブルの上のサイコロを見やった。

「護堂とギャンブルしてたみたいだけど、すごかったでしょう？　あの才能に気づいたときは、わたしもあきれたわ。やっぱりカンピオーネになるような人はどこかしらがふつうじゃないんだわって！」

「だが、それに魔術のいかさまで対抗というのも問題があるぞ……」

　生き真ま面じ目めな騎士らしくリリアナが仏ぶつ頂ちよう面づらをする。

　しかし、エリカは包容力に富む貴婦人の澄まし顔で答えた。

「そこはわたしもちょっとだけ不本意だけど。でも、いいのよ。ほら、護堂って自分を『ふつう』だと思いこみたい人でしょう？　わたしの方がギャンブルは〝強い〟と知って、実は結構うれしがってるから」

「そっか。ああいう人だから、博ばく打ち打つのに抵抗感があるんだねー」

「護堂さん、考え方〝だけ〟はすごく常識的ですものね……」

「あの人にすこし夢を見させてあげるのも、愛人の気配りだと思わない？　これで困る人もいないわけだし！」

　うなずく恵那と祐理に、我わが意を得たりとウインクするエリカであった。

第５話　草薙家のアルバイト

1

「今回のお兄ちゃんには正直『やられた』って感じ……」

　草くさ薙なぎ静しず花かが不ふ機き嫌げんそうに眉まゆをひそめている。

　可愛かわいらしい女の子なのだが、こんな顔をすると不思議なほど迫力がある。肝きもの据すわった女じょ傑けつめいた雰ふん囲い気きがにじみ出るせいだろう。

「ギャンブルから足を洗うとか口ではまじめなこと言っておきながら、こっそり女の子の集団をひきつれて南の海に旅行してたなんてね……」

「言っておくけどな、静花」

　草薙家の居間で反論するのはもちろん静花の兄、護ご堂どうであった。

　冬休みも残すところ、あと一日。この正月、草薙家の兄と妹はそれぞれ異なる土地を長期旅行してきたらしい。

「べつに俺は〝こっそり〟旅行してないぞ。家を空あけることはおまえに言っておいたし、母さんにも『しばらく泊まりがけで出かけてくる』って伝えたし」

「り、旅行先といっしょに行く面子メンツ、隠してたくせに！」

「いいじゃないか、そこまで妹に報告しなくても。おたがい、今さらお守もりが必要な歳としでもないだろ？」

「ふんだ。お兄ちゃんにはときどき必要そうだけどねっ」

　ぷんぷんと怒り気味の静花に対し、護堂はおだやかだった。

　シスコンの気けなどかけらもない男なので、本気でそう思っているのだ。兄妹きょうだいの双方と幼なじみである徳とく永なが明あ日す香かは、その辺の事情をよく心得ていた。

「いつのまにか、おじいちゃんに負けない遊び人になってるし」

「だから、俺とじいちゃんをワンセットで語るのはやめろって」

　兄妹の祖父・草薙一いち朗ろうは地元・根ね津づ三丁目において最高にモテる人物である。

　この老人の若かりし頃と、護堂はよく似ているらしい。

　とはいえ、それは顔立ちの話だ。性格はだいぶちがう。軽やかな洒しゃ脱だつさが売りの一朗氏とちがい、孫は泥どろくさい木ぼく訥とつさがいつまでも抜けない。まあ、そのくせ祖父に劣らぬ〝たらし〟ぶりを見せるところが末恐ろしいのだが……。

「ところでさ、静花ちゃん」

　明日香はおもむろに口をはさんだ。

「年末年始をずっとカリブの海って、あいかわらず羽振りがいいのね、弦げん蔵ぞうおじさん」

　草薙兄妹の父・弦蔵。

　息子と同じで、名前の画かく数すうがやたらと多い。たしか姓の方も『草薙』に負けず劣らず、三〇近い画数だったはずだ。草薙兄妹の母・真ま世よは弦蔵の家に嫁とついだあと、護堂が物心ついた頃に離婚。実家にもどり、ふたたび草薙姓を名乗るようになった。

　兄妹と明日香とのつきあいも、その頃にはじまった。

　そして、姓のちがう父について、静花は胡う乱ろんなことをあっさりと言った。

「ああ、なんか去年ね、上う手まく一山当てた～みたいなこと言ってた」

「親父おやじのやつ、あいかわらずか。うちは父親が山師で、母親は女王様だからなあ……」

　妹の報告に、護堂がしみじみとつぶやく。

　ふたりの言いぐさに、明日香は思わずつっこんだ。

「護堂。そこは起業家とか実業家とか経営者って言うべきじゃないの？」

「どうかな？　あの親父、ときどき『なんとかプロデューサー』みたいな肩書きで、いきなり新しい名刺刷するときあるし。いろいろ胡う散さんくさいんだ」

「お母さんは……まあ女王様だよね、やっぱり」

「あの人脈の豊富さとあやしさは、ちょっとふつうじゃないもんな」

「草薙家の家庭事情は、あいかわらずどっかがズレてんのね……」

　明日香は草薙家の居間に上がりこみ、こうして兄妹と茶飲み話をする仲。

　おかげで、この家族と一般家庭の間に横たわる『ズレ』の大きさを熟知していた。

「さすが護堂と静花ちゃんの親おや御ごさんだわ」

「ちょっと待て、明日香」

「うん。今の言葉、お兄ちゃんはともかく、あたしはのぞくべきだと思う」

「……言っとくけど、俺より静花の方がたぶん大物になるぞ」

「な、何言ってんの！　あたしは変人ぞろいの我わが家で唯ゆい一

いつの普通人なんだからっ。お兄ちゃんたちといっしょにしないで！」

「んー……ご近所さんの意見としては、どっちもどっちかな」

　明日香はぼそっとつぶやいた。

　容姿と性格に似たところは特にない草薙兄妹。しかし、ふたりの言動には『自己申告が当てにならない』という共通項がしっかりとあるのだ。

　今の意見に、静花は遣い憾かんそうに反論する。

「まったく、もう……。言っとくけど、あたし、ちゃんと常識ある方だから。お兄ちゃんとはそこが大ちがいなんだからね、明日香ちゃん」

「待て静花、俺だって人並み以上に常識はある方だぞ」

「ふんだ。女の子四人も五人も口説いて、いつもまわりに侍はべらせているような人から言われても、説得力は全然ありませんよーっだ」

　妹が『あかんべえ』を兄に向けたときだった。

　卓ちや袱ぶ台だいに置いてあった静花の携帯電話が着信のメロディを鳴らした。

「メール来たみたい。なんだろ？　……あー。やっぱりダメだったか」

「どうかしたのか？」

　護堂が訊たずねると、携帯を眺めて嘆たん息そくしていた妹はため息をついた。

「あたしの友達の唯ゆい、覚えてる？　背が低くて、あたしとクラスが同じだった」

「……なんとなくは」

「あの子と春休み、卒業旅行へ行く予定だったんだけど、ダメに

なったの」

　静花は今、城じよう楠なん学がく院いん中等部の三年生。

　二カ月も経たてば、卒業＆高等部へ進学というイベントを迎えるのだ。

「実はあの子のお父さん、この間リストラされちゃって」

「そりゃ気の毒だな……」

「やっぱり、旅費のことで親御さんに迷惑かけられないとか？」

　護堂がつぶやく横で、明日香は心配になって訊ねてみた。

　話題の女の子には、何回か会ったことがある。静花のうしろについて根津三丁目の商店街、さらにいうと護堂のまわりをうろうろしていた気がする。やはり、城楠学院の中等部所属だったはずだ。

　あの娘もたぶん、目の前にいる〝ろくでなし〟のことを――。

　明日香はそこも気の毒に思った。

「まあ、今はお父さんの再就職がいちばんの問題だものね……」

「あ、そっちは大丈夫。うちのお母さんを紹介したから」

「真世おばさんに会わせたの⁉」

「うん。どんな仕事でもやる覚悟があるみたいだからって頼んだら、すぐに再就職先を見つけてくれたよ。こういうときだけは素直にすごいって思える人だよね」

「だけど静花。ちゃんと堅かた気ぎの仕事なんだろうな？」

「そこは大丈夫……だと思う。強めに念を押しておいたから。まあ、それに」

　ここで静花は肩をすくめ、草薙護堂の妹らしい発言をした。

「犯罪でもやるんじゃなければ、多少グレーゾーンの仕事でも働ける方がいいでしょ」

「まあ、それもそうだな」

「あのね。そこで清せい濁だく併あわせのむ高校生と中学生って、絶対ふつうじゃないから」

「でも明日香ちゃん、仕事があるって大事なことだよ」

　常識的な意見をしれっと受け流し、静花は言った。

「とにかく、お父さんの仕事先も決まったから、唯の進学とかは心配ないんだけど。あの子、家に気を遣つかって、卒業旅行は中止にしたいって」

「中学生だしなあ。旅費を稼かせぐためにバイトもできないもんなあ」

　今度は常識的なことを言って、護堂がうなずいた。

　静花もいっしょにうんうんとうなずく。

「そうそう。中三じゃ雇ってくれるところもないもんね」

「えーと……」

　明日香はつぶやいた。幼なじみの兄妹には、実は『自分のことを棚に上げる名人』という共通項もあったりする。

　その事実に気づいてない護堂と静花へ、明日香はおもむろに言った。

「常識あふれる草薙さんちのご兄妹に質問だけど……ふたりとも昔から羽振りがいいよね？　護堂は正月ごとにあやしいギャンブル大会で大金稼いでるし、静花ちゃんは静花ちゃんでいつもお小こ遣づかいに余裕があるし」

「お、俺はべつに賭け事だけで稼いでるわけじゃないっ」

　毎年恒例の草薙一族が集つどう、正月ギャンブル大会。

　幾年もチャンピオンとして君臨し続ける高校一年生は焦あせり気味に否定した。

「ちゃんとバイトだってしてる」

「うん、知ってる。あんたは根が働き者だし、あぶく銭ぜにだけで懐ふところがあったかいのは心苦しいから、そういうところはきちんとしてたもんね」

　草薙護堂の人となりをよく知る幼なじみとして、明日香はうなずいた。

　一方、静花も『心外』と言わんばかりに訴えてくる。

「あ、あたしだって、べつにお小遣いをたくさんもらってるわけじゃないよっ。ていうか、うちのお母さん、『小遣いが欲しければ自分で稼げ』って人だし」

「そうそう。たまに気まぐれでぽいっとくれるときがあるくらいだぞ」

「これでも、子供の頃から苦労してきたんだから。明日香ちゃんも知ってるでしょ？」

「うん、知ってる。その辺のノウハウ、友達にも教えてあげたら？」

「「…………」」

　この提言を受けて、護堂と静花はしばし沈思黙考した。

　それから、兄妹でぼそぼそと相談をはじめる。

「卒業までは二カ月あることだし、一稼ぎする時間は十分ある、かな……」

「その子、進学の方は問題ないのか？」

「うん。あたしと同じで、中等部から高等部に進むことはとっくに決まってるから」

「まあ、高校生になればバイトもできるわけだし、中三の最後にすこしくらい無茶するのもアリ——ではあるのかな……」

「中学生でも雇ってくれるところに頼んでみる？」

「うちの親戚筋を当たっていけば、どこかは大丈夫だろうけど。で

も、時給はたぶん安くされるぞ。旅行資金を稼ぎたいんだろ？」

「となると、自分たちでやった方が効率はいいか……」

　そして、兄の意見を聞きつつ、妹はおもむろに訊ねるのだった。

「じゃあさ。お兄ちゃんも出資する気、ない？」

2

　一月なかばの三連休、中日。

　昼すぎ頃、草くさ薙なぎ護ご堂どうは埼さい玉たま県某ぼう市の市民広場にいた。文ぶん京きよう区の根ね津づ三丁目からは、電車で一時間弱もあれば到着できる場所だ。

　川沿いの広場は駅からも近く、野球の試合を三つ同時に進行できそうなほど広い。

　今日、ここはＢ級グルメの屋台が集つどうイベントの会場だった。

　そして、護堂には同行者がいた。安っぽい食べ物ばかりを集めるイベントと聞いて、

「……日本の郷土食がどれだけ多彩か、実地検分するのもいいかもしれないわね」

　と、えらそうに発言したエリカ・ブランデッリである。

　数多くの屋台がならび、多くの人でにぎわうイベント会場。雑ざつ踏とうのなかでもひときわ目立つ金髪少女を連れて、護堂は目当ての屋台近くまでやってきた。

　問題の屋台をしばらく眺めてから、エリカはおもむろに言った。

「あなたの家って本当にユニークよね、護堂」

「え、そうか？　おまえのところに比べれば、うちは全然ふつうの

庶しよ民みんだけどな。なんてことない一般家庭だと思うぞ」

　突然のエリカの発言に護堂は目をぱちくりさせた。

　まさか、ブランデッリ家の令嬢にこんなことを言われるとは。

　先祖には魔王カンピオーネすらいる魔術の名門であり、イタリア屈くつ指しの魔術結社《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の幹部を代々輩はい出しゆつしてきた。おまけにかつてはミラノ公国の貴族で、しかも富豪でもあるという家門。それがエリカの出自なのだ。

「でも、ふつうの家に生まれた日本の中学生は、あんなところで商売の切り盛りをしていないと思うわよ？　静花さん、見たところ大活躍のようだけど」

「いや、それはさ。どこの家だって働かなきゃ食っていけないんだし」

　エリカの視線の先を目で追いかけつつ、護堂は言った。

　近隣住民がふらふら食べに来たり、祭りの雰ふん囲い気きを楽しみに来る程度のイベントだから、来場者は四ケタ台というところか。一日で数万人を集めるご当地グルメイベントなどとは比べるべくもない規模だ。

　それでも、会場のあちこちにある屋台はどこも盛せい況きょうだった。

　エリカ・護堂の視線の先にある、静しず花かの屋台も——。

　あちらでは今、冬だというのに長なが袖そでのＴシャツ＆エプロンという薄着で草薙家の長女が鉄板と向き合っている。大量の焼きうどんを調理中なのだ。そうしながらも、周囲への指示を抜かりなく、きびきびと出していく。

　問題の屋台では、三人のスタッフが懸けん命めいに労働中だった。

　妹の友達だという小こ柄がらな女の子。なんとなくだが見覚えがある。昔、草薙家に遊びに来たことがあるのだろう、たぶん。

二人目は明あ日す香か。時給八〇〇円で付き合いよく助っ人を引き受けてくれた。

そして、最後は二は〇た歳ち前後の青年。髪を染めている——というより、セルフブリーチに失敗したとおぼしきオレンジ色の髪で、やたらと目立つ。

「いちばん年長だろうに静花さんが遠慮なくこき使っている彼、どういう人なの？」

「うちの遠縁の親戚がやってる会社から、静花が借りてきたんだ。こういう屋台には、成人の衛生責任者が必要だからさ」

「会社って、どういう関係の？」

「ええと、イベント中心に飲食ブースをプロデュースする会社……だったな、今は」

「そう。わたしには彼、ヤクザ組織の下したっ端ぱか何かに見えるけど」

「…………」

ちなみに、この会社。十数年前にきちんと法人化する前まではいわゆるテキ屋であり、前身は地回りの小さなヤクザ団体であった。

今も社員・アルバイトには〝ヤンチャな若い衆〟が多かったりする。

さらに言うと、護堂に賭け事を教えた遠縁のじいちゃんが残した会社である。

草薙兄妹も子供の頃から出入りしていて、ここの仕事を手伝い、よく『お駄賃』をもらっていた。そのおかげで今も顔が利きく。

静花にいたっては生せい来らいの姐あね御ご肌はだゆえか、古株の社員・現社長からも一いち目もく置かれ、『現場』では〝若い衆〟を統率する権限まであたえられていた。いや、いつのまにか勝手にその権限を我わがものとしていた。

「何はともあれ、繁はん盛じようしているようでよかったよ」

　護堂はつぶやいた。

　昼食時も一段落した頃合いだが、会場にはまだ人が多い。静花たちの屋台にも数人がならんでいる。妹が『地域イベントで一稼ぎ』するために選んだ料理はコストパフォーマンスを重視して、焼きうどんであった。

　牛バラ肉入りで、甘い味噌ダレの味付けが決め手らしい。

　実際、ここまでただよってくる味噌が焼ける匂においはなんとも香ばしく、ふくよかで、たしかに食欲をそそられる。

「でも護堂。こういうイベントにお店を出すのって、かんたんにできるものなの？」

　まわりをきょろきょろ見まわしながら、エリカが言った。おそらく自分好みの〝きわもの〟を探しているのだろう。

「いろいろ参加資格とか、面倒な手続きがありそうに思えるわ」

「鋭いな。そこはまあ、出店できるのは市内在住者に限るとか、いろいろあるんだけどさ。今回は運がよかったんだよ」

「運？」

「ああ。参加予定だった団体がひとつ、急に参加を取りやめたり。この市の商工振興会にうちの母親の知り合いが何人もいたり、市議会議員が母親の飲み友達だったり」

「…………」

「おかげで、おふくろにワイン一ひと壜びん渡したら、一時間で話をまとめてくれた」

「……で、あの屋台を出店するにあたって、資金は護堂が提供したのよね？」

「俺だけじゃなくて、親おや父じもだよ。不良中年だけど、娘には甘いから。あとは静花本人と、あそこにいる友達の貯金も使っている。まじめにお年玉とか貯金してた子でよかったよ。あとで出資額に応じて、儲もうけを分配するんだ」

「で、これだけの仕込みを企画の立ち上げから一週間くらいで済ませたのね……」

　事情をひととおり知って、エリカはややあきれ気味に言った。

「とりあえず、これだけはまちがいなく言えるわ。護堂の家族と親戚って、わたしたちブランデッリ家の基準で見ても、明らかにふつうじゃないわよ」

「おいおい……」

　まさか、騎士だの魔術だの神様だのが日常化している家の人間に言われるとは。

　いや、母・父・その他一族のもろもろがあるため、明日香あたりから『ふつうじゃない』と評されるのは仕方ないかなとも思える。

　しかし、やはりエリカなどには言われたくない事柄であった。

　そんな護堂の気持ちを知ってか知らずか、イタリア人少女の述じゅつ懐かいは続く。

「まあ、十分な儲けを効率的に得たいのなら、人に雇われるのじゃなくて、自分で事業をはじめるべきっていう点にはおおむね同意するけど。でも、それって日本の一般的な学生の考え方じゃないように思えるのよね、わたしには」

　ここでエリカは肩をすくめた。

「クラスの女の子たちが投資や起き業ぎようの話をしているの、聞いたことないもの。せいぜいどこそこの店でパートタイムの勤務をしているくらいが関の山でしょう？」

「え、エリカに学生の『ふつう』を語られるとはな……」

　常に我が道を往ゆき、自由奔ほん放ぽうな少女が語る常識論。

　その取り合わせの意外さに護堂は驚き、エリカ自身も眉まゆをひそめた。

「柄じゃないと思うけど、仕方ないじゃない。護堂が悪いのよ？　あなたってば、いつだってわたしの前で常識と一般論に反する言動

を見せつけるのですもの」

「…………」

　エリカの憮ぶ然ぜんとした表情に、思わず反論を呑のみ込む護堂であった。



第６話　ある日の男子（？）会

　日本のカンピオーネが年末年始を南洋で過ごしてから、早くも半月近く。

　一月もなかばを迎えた頃、沙さ耶やの宮みや馨かおるはメイド喫茶『國こく士し無む双そう』を訪ねていた。そして、腰を落ちつけるなり同席者ふたりを誘ったのだ。

「よかったらさ。来月のバレンタインデー、ぼくとつきあわない？」

「「…………」」

　いきなりの誘いに陸りく鷹よう化かと甘あま粕かす冬とう馬まは沈黙で応こたえた。

　店内奥のＶＩＰルームである。ダーツやビリヤード台にカードゲーム用のテーブルまで運びこんだ特別室。秋あき葉は原ばらのメイド喫茶には不似合いな豪華さだった。

　ややあって、甘粕が口を開く。

「期待と確信を込めて訊ききますけど、それ、私たちにチョコを渡すのが目的ではありませんよね？　万一そうだったら、万ばん難なん排はいしてご辞退させていただきますが」

「ああ。沙耶宮の兄さんともあろう人がなに乱心してんだって話だよな」

「ふたりとも、ぼくの性別をきれいに無視してくれるねえ」

　鷹化まで眉まゆをひそめるので、馨は中性的な美貌に苦笑を浮かべた。

　その繊細な顔立ちは男にも女にも見えない。昔の少女漫画に登場する中性的な美少年の容姿がいちばん近い。しかし、馨はれっきとした『♀』であり、媛ひめ巫み女こですらある。

　ちなみに、今日は男物のジャケットにスラックスという装よそおいだ。

「お察しのとおり、君たちに是ぜ非ひチョコを受け取ってほしいんだ。ぼくの気持ちというか、たくさんの女の子からの気持ちをね」

「いきなりあやしげなことを口走りましたね……」

　甘粕がぼそりとつぶやくと、馨はにやりと笑い、告知を続けた。

「君たちも知ってのとおり、ぼくも卒業と大学進学をひかえた高校三年生だ。そして、全校生徒から慕したわれている生徒会長でもある」

「兄さん、ちゃんと高校行ってたのかよ」

「意外にも行ってたんですよ。しかも某ぼう名門女子校に。三年の高校生活を特注の学ランですごして、すっかり女生徒と女性教員のアイドルです」

　鷹化が言えば、甘粕はあきれ気味に説明する。

　ここまで来ると話は早い。馨はにっこり笑って、要点を語った。

「うん。で、今年を最後にいなくなる沙耶宮馨へチョコを贈るという女生徒・お姉さまの数は、前年比の三倍が予測されていてね。すでにフライングでいくつも贈り物が届いている。大量のチョコを迎え入れる態勢を例年以上に万全にしたいのさ」

「つまり、私らにもそれを手伝えと？」

「ご名答だよ、甘粕さん。陸くん、二月一四日だけど、この店を使わせてよ。もらった義理チョコの何割かを持ってくるから、ケーキ

に加工するなりして、みんなでいただこう」

「そりゃまあ、バレンタインにやるフェアとかの邪魔にならなきゃ、べつにいいけどさ」

「持ってこなかった分はどうするんですか？」

「たくさん子供のいるところへ寄付したり、本ほん命めい枠わくのものはぼくが個人的にいただいたり、いろいろだね。その辺の根回しも進めているところだよ」

「あいかわらず有能さを仕事だけに使わない方ですねえ……」

　上司の抜かりない手て際ぎわに、甘粕はため息をついた。

　馨はイエスマンならざる部下へウインクし、さらに言った。

「尚なお、この集会の参加資格は『男子であること』。女子禁制だ。正せい史し編へん纂さん委員会や、知り合いのおひとりさま連中にも声をかけてみるよ」

「じゃあ、叔お父じ上うえも誘うのか？」

「草くさ薙なぎさんですか。あの人、誘ったら気軽にやってきそうですね」

「男だけの場所の方がいまだに気楽って人だからねー。護堂さんがこっちに来たら、各方面から苦情が出そうだな」

　日本在住のカンピオーネ・草薙護ご堂どう。その名を口にして、馨は苦笑した。

「そのときは別途、対策を考えよう。来ていただくのも、それはそれで面白そうだけど」

「天下の大魔王さまをダシに遊ばないでくださいよ。去年の春まで、誰も登場を予測できなかった古こ今こん未み曾ぞ有うの国産神殺しですよ」

　甘粕は脱力気味に警告した。

「カンピオーネの足跡なんて、一年前まで日本じゃ賢けん人じん議

ぎ会かいのレポートくらいでしか見ることもなかったんですから」

「ああ、毎月イギリスから送ってくるんだっけか？」

　香ホン港コンの武ぶ侠きようである陸鷹化はその辺に疎うといらしい。首をかしげていた。

「うん。あそこに会員登録している業界の関係者は、希望すればカンピオーネ関連の報告書や研究資料を定期的に送ってもらえるんだ」

「最近は便利なことに、ネットでも読めるようになりましたねえ」

　馨が言うと、甘粕もタブレット端末を取り出した。

「ほら。こんな感じにいろいろ載のっています」

「……なんだ。たいしたことは書いてないじゃないか」

　会員のみが閲えつ覧らんできる、英文のサイト。渡されたタブレットで内容を流し読みして、陸鷹化は肩をすくめた。甘粕と馨が苦笑する。

「そりゃ、最凶カンピオーネのお弟子さんが見れば鼻で笑うレベルでしょうけど」

「新世代の四人については、まあまあくわしく書いてあるよ」

　アレクサンドル・ガスコイン。ジョン・プルートー・スミス。

　サルバトーレ・ドニ。そして草薙護堂。

　七人のカンピオーネのうち、新世代とされる四人である。ロサンゼルスに住む年齢不詳の人物以外は、みな十代から二十代の若者であった。

　特に内容が充実しているのは、黒王子アレクの記事だった。

　彼が所有する五つの権けん能のう——神しん速そく・復ふく讐しゆう・迷めい宮きゆう・重力球・不可視の従僕について。その特異な性格について。彼が重ねてきた偉業と悪あく行ぎようについて。

　執筆者の名義は多くがプリンセス・アリス。黒王子の宿敵である

白き姫だった。

　一方、ジョン・プルートー・スミスについては、変身体の目撃例などもまとめてある。

　魔神テスカトリポカの〝黒曜石のシャーマン〟としての相を表す巨人形態。さらに、黒くろ豹ひように化け身しんする〝オセロット〟。〝太陽〟の具現である殲せん滅めつの焔ほのお。〝滅びの風〟を司つかさどる魔鳥。生いけ贄にえとひきかえに出現するという〝煙を吐く者〟……。

「サルバトーレ卿きようと叔父上のことは、割とあっさりめだな。もうちょっとあれこれ書けそうな気もするけど」

「あー。それ、たぶんわざとじゃないですかね」

「読んだ人間が『カンピオーネにも弱点がある』とか受け取りそうな情報はなるべく書かない方針らしいよ。護堂さんの権能に使用条件があるとか、サルバトーレ卿が能天気すぎるお人ひと柄がらだとかは、意識的に記述を避けたのかもね」

「なんだって、そんな真ま似ねするんだか……」

「カンピオーネに喧けん嘩か売ろうみたいな出来心をうっかり起こさせないため、でしょうか。そこにつけこもうとしても、絶対に上う手まくいくはずありませんし」

「ああ、なるほど」

　甘粕の推測を聞き、鷹化は人の悪い笑みを浮かべた。

「たしかにそんな心得ちがいをするバカ、世の中には結構いるのかもな」

「ちなみに陸くん、護堂さんの寝首をかいてみようとか思ったりするのかい？　あの人のことを君くらい知っていれば、つけいる隙すきは十分ありそうだけど」

「バカ言わないでくれよ。その隙に攻め込んだら最さい期ごじゃないか」

　馨がくすっと小悪魔的に微笑ほほえんでも、武ぶ林りんの麒き麟

りん児じは淡泊だった。

「隙があろうと弱点狙ねらわれようと寝首をかかれようと、冗談みたいな強引さで窮きゅう地ちをしのいでくる人たちだぜ。鶏にわとりの首を刎はねるのに、牛ぎゅう刀とうどころかミサイルまで使いかねないし。東京都を道連れに自殺する覚悟がなきゃできないチャレンジだな」

「ま、そんなオチですよねー」

　まとめるように言ってから、甘粕もタブレットの文章を眺めた。

「にしても、年長組は侯こう爵しやくさま以外たいしたことを書いてませんな」

「侯爵の記事にしたって、例の『実はあやまりだった』フェンリル殺害説が載っていたりするようだけど。祐ゆ理りはいつだったかバロール殺害説にも異論を唱えていただろう？」

「祐理さんがおっしゃった内容から想像するに、古代ローマの英雄にして隻せき眼がんの軍神、ホラティウス・コクレスがくさい気もしますがね」

　ヴォバン侯爵、羅ら濠ごう教主、アイーシャ夫人の三人がカンピオーネ旧世代組。

　グリニッジの賢人議会が十分な力をたくわえる前から活動しており、特に女性ふたりは徐々に人前へ出なくなっていったため、情報もすくないのである。

　微苦笑しながら馨は言った。

「賢人議会は結局、カンピオーネの〝脅きよう威い度〟を啓けい蒙もうしたいのであって、〝実情〟を伝えたいわけじゃないんだろうな」

「その方が賢いし、いいじゃないか。うちの師し父ふがネットに自分の情報が書かれてるとか知ったら、たぶん地球上に存在する全てのＰＣを破壊せよとか指令するぜ。で、インターネット回線が旧時代の遺物になるまで、自みずから豪ごう腕わんを振るいつづけるのさ」

「それ、まったく冗談には聞こえませんな」

「冗談じゃないんだから当たり前だろ」

　魔王カンピオーネを肴さかなに世間話。

　やはり、この三人の顔ぶれゆえか、話題は自然と業界方面にかたむいていった。

「あらためて見ると、アイーシャ夫人のレポートは教主様に輪をかけてすくないね」

「絶賛ひきこもり中って以外はほとんど情報がない御ご仁じんですしねー」

「ああ、あの方か……」

「おや。もしかして陸さん、謎の女魔王さまのこと、ご存じなんですか？」

「知ってるっちゃ知ってるけどさ。世の中、知らない方がいいこともあるもんだぜ。こっちも話して楽しいことじゃないし」

「なるほど。またしてもそういう系の人なんだ」

「規定路線どおりといえばそれまでですけど、この世界は本当に世せ知ち辛がらいですねえ……」

　正史編纂委員たちのつぶやきをよそに、陸鷹化が操作するタッチパネル液晶は『羅濠教主』の項目を表示するようになっていた。

「年齢・性別・出生・容姿の全てが『NO DATA』か。うん、このくらい無難にすました方が身の安全を保てるってもんだ。……っておいおい、こんなこと書いて正気かよ……」

「何かまずいのかい、陸くん？」

「まずいどころか虐ぎやく殺さつものだ。ほら、師父の権能に名前をつけてるだろ、勝手に」

　陸鷹化が指さした一文。

　それは羅濠教主が振るう大だい力りき金こん剛ごう神しん功こう

について記した項目だった。賢人議会の集めたデータを箇条書きにし、概がい要ようをまとめている。

　最後に『この能力を The power と命名したい』と結んであった。

「カンピオーネの方々が持つ権能については、議会の方で暫ざん定てい的な呼び名をつけるのが慣習となっていますが……」

「魔王の方々はその辺に無む頓とん着ちやくだからね」

「そりゃほかの魔王方は適当だけどな。師父はちゃんとご自分で命名されてるんだ」

「あのなんとか大だい法ほうとか、ほにゃらら神功、ご自分でつけてたんですか！」

「べつに推すい敲こうを重ねて名づけたわけじゃなさそうだけど。それなりに愛着もあるだろうから、これ書いたヤツの頸くびが飛びかねないぞ」

「教主配下の人たちは、どうしてそれを報告しないんだろうね？」

「決まってるだろ。そんなニュースを知らせたら、師父のお怒りを最初に受け止めなきゃいけないんだぜ。そんなお役目、僕なら絶対にごめんだ。でも、いつかは誰かが言っちまうんだろうな……」

「とんでもない時限爆弾ですな……」

「これがいつ教主のお耳に入るか、問題はそこだね……」

　思わぬ凶きよう報ほうを受け止めて、甘粕と馨はそろってつぶやいた。

「それはそうと陸くん。ヴォバン侯爵あたりに比べると、教主さまの権能はだいぶ数がすくないように思えるんだけど。それって何か理由があるのかい？」

「そりゃ、ただの気のせいだよ」

　馨に訊きかれて、鷹化はつまらなそうに答えた。

「この間、日本で使っていった権能がすくないから、そう見えただ

けだろ。師父だって侯爵に負けず劣らずのヤバイ力をあれこれ持ってるんだ」

「ヤバイんですか？」

「たとえば自分のいる都の運気を高めて大発展させたり、世界中をお花畑に変えたり」

「お花畑？」

「ひとつ目は経済や政治への影響が半はん端ぱなくヤバそうですけど、ふたつ目ってそんなに危ないですかね？」

「今の説明だと、枯かれ木に花を咲かせる権能みたいだけど」

「枯れ木だけじゃないぜ。石とかコンクリートの上にだって花を咲かせて、街のいたるところをびっしり埋め尽くすんだ。しかも、ただのきれいな花だけじゃない。毒の花や食人植物だって生み出す始末だ」

「うわあ。交通が麻ま痺ひするどころか、死人も出る腐ふ海かいの誕生ですか」

「特に意識しなくても、師父が何かするたび、どこからともなく花が出てきたりさ」

「その危険すぎるお花畑、どれくらいの広さまで作れるんだい？」

「時間かけて本気でやったら、日本列島まるごとだっていけんじゃないの？　大体さ、魔王の方々はまわりの連中が気にするほど、権能の多いすくないには頓着してないぜ。それで勝ち負けが決まるわけでもないんだし」

　訳知り顔で言う陸鷹化へ、馨は「へえ」と目を向けた。

「でも、いろいろな力を持っている方が、どんな敵も迎え撃つことができてよさそうな気がするよ。隙がなくなるというかさ」

「能力的に相性の悪い敵に苦戦するのは、バトル物の定番ですしねえ」

　馨は疑問をぶつけるというより、知的ゲームを楽しむ粋すい人じ

んの顔で言った。

　一方、甘粕はいつもの無責任なノリの軽さで口をはさんでいた。

　そして陸鷹化はといえば、

「そりゃ、あの人たちはそばにある物は何でも利用する類たぐいの人種だからさ。持ってる力はいくらでもいいように使うし、機会があれば増やしてくだろうけど」

　やや暗い瞳ひとみで、神殺しの魔王について語る。

「でも、相性の良し悪あしとか敵が自分より強いことを気にするような人間らしさ、あの人たちにあるはずないだろ。そもそも、たいていの神様はカンピオーネの方々より強いんだから」

　脱力気味に語りながら、鷹化は腰を上げた。

「うちの師父は人界じゃ天下無双だけど、師父以上の武芸をふつうに使いこなす軍神はあちこちにいるし、術だって神様の神じん通つう力りきの前じゃ小娘みたいなもんだ。……みみっちく強さ弱さを気にする人に、神殺しがつとまるわけないんだよ。機会があったら叔父上にも訊いてみな」

　香港陸家の御おん曹ぞう司しはそのまま店を出ていった。

　何かと忙しい彼は、今日もこれから用事があるようだった。



「護堂さんは敵の強さとか弱さ、気にしたりします？」

「もちろんしますよ。どうせ戦うなら、弱い相手がいいです」

　陸鷹化が去ってから約三〇分後。

　入れ替わるように来店した草薙護堂へ、馨は試しに訊たずねてみた。魔教教主の直じき弟で子しが喝かつ破ぱしたことと真ま逆ぎやくの返答を口にしてから、七人目のカンピオーネは愚ぐ痴ちる。

「ただ、不思議と俺より強い敵とばっかり遭あうんですよねえ」

「ねえ草薙さん。だったら、そういう敵とは戦わないって選択肢しもありますよ？」

　口をはさんだのは甘粕だった。

「宮みや本もと武蔵むさしの逸いつ話わじゃないですけど、自分より弱い相手とだけ戦う、みたいな」

「そりゃたしかにそうですね。ただ、まあ、敵が俺より強くても、勝てないと決まってるわけじゃありませんし、そこはあまり重要じゃない気もします」

「「…………」」

「あれ？　どうかしましたか？」

　目くばせし合う馨と甘粕を見て、護堂が首をかしげた。

「ああ、いえ。なるほど、こういうものかと思っただけなんです」

「ふつうの人には最重要事項なんですけどねー。ここでその答えが出るあたり、さすが大魔王さまの真しん骨こつ頂ちようです」

　上司は苦笑し、部下はとぼけ顔で肩をすくめている。

　一方、そうされる理由がわからず、護堂はきょとんとするばかりであった。

第７話　四方山昔語り

　一月下旬のある日、草くさ薙なぎ護ご堂どうは千ち代よ田だ区三番町に向かった。

　沙さ耶やの宮みや家け別邸を訪ねるためである。正せい史し編へん纂さん委員会の重要施設でもある沙耶宮家所有の洋館だが、この日、主人は不在だった。

　代わりに、館やかたの書斎には護堂の知り合いがふたりいた。

「もう帰るのか、清せい秋しゆう院いん？」

「うん。あんまり地元を留守にするのもあれだしね。たまには学校の方にも顔を出さなきゃいけないし」

「たまにじゃなくて、毎日通うべき場所のはずなんですけどねえ」

　清秋院恵え那なが朗ほがらかに答え、甘あま粕かす冬とう馬まは肩をすくめている。

　ふだんは埼さい玉たま県秩ちち父ぶの清秋院本家を中心に暮らす媛ひめ巫み女こ筆ひつ頭とう。昨日、訳あって奥おく多た摩まにやってきた彼女は東京で一泊。これから帰郷する予定なのだ。正史編纂委員会のエージェントである甘粕は、帰り道の運転手役だった。

　帰郷の前に一言あいさつでもしておこうとやってきた護堂だが。

　今のやりとりにふと引っかかりを覚えた。

「今さらな疑問かもしれないけど、ひとついいか？　清秋院ってそ

もそもどこの高校に通っているんだ？」

　いつも詳細不明の制服に身をつつむ清秋院恵那。

　この制服、彼女が通う高校のものだという。しかし、心身を清めるため深しん山ざん幽ゆう谷こくにしょっちゅう分け入るという恵那は、定期的に人里を離れることがすくなくない。当然、学校にも毎日通うことなどできない。

『暇ひまがあるときにふらっと登校する』という、高校生にあるまじき就学態度だった。

　問題の学校に対して清秋院家が絶大な影響力を持つがゆえに、こんな無茶がまかりとおるのだと護堂は聞いていた。

　恵那の実家は日本呪術の名家にして、先祖には戦国武将までいるという武門。

　明朗快活な媛巫女は、実のところ深しん窓そうのご令嬢で〝究極の大和やまと撫なで子しこ〟なのである。

「群ぐん馬まの山のなかにある小さな学校だよ。秩父……埼玉との県境の近くにあってさ。いちばん近い町まで、車を思いっ切り飛ばしても一時間くらいかかるの」

「生徒のみんな、そんなところによく通えるなあ」

　にかっと笑う恵那へ、護堂はさらに疑問をぶつけた。

「電車なんか当然ないだろうから、通学用のバスでもあるのか？」

「ううん、全然。町から通学する人たちは基本、徒歩か自転車。それがいやな人たちは山のなかの寮に入るしかないんだ。恵那は車で送ってもらうことが多いけど」

「ま、たいていの生徒は寮を選ぶんですけどねえ……」

　なんとも渋しぶい表情で甘粕がつぶやいた。

「近くの『町』といっても、所しよ詮せんは山奥の田舎いなか町ですから。コンビニすらありません」

「おばあちゃんがやってる小さな雑貨屋しか、お店ないもんねー」

「遊びたい盛りの高校生たちを三年も山奥に閉じこめて、娯楽という娯楽から遠ざけたうえで学業というか修行に専念させるための仕掛けです。あの学校は本当にとんでもない、虎の穴みたいな場所なんですよ」

「あはは。そういえば、甘粕さんもうちのＯＢなんだっけ」

「えっ？」

　意外な新情報に護堂は驚いた。

「甘粕さんもその、すごい山奥の学校に通ってたんですか？」

「ええ。正史編纂委員会がスポンサーの私立学校なんです。清秋院・沙耶宮・連れん城じよう・九く法ほう塚づかの四家に仕つかえる家門や、そうでなくとも何らかの呪術や武芸の心得がある若年層を受け入れて、卒業後は委員会のエージェントや職員となるよう仕立てあげる学校です」

「つまり、鉄道高校とか防衛大学みたいな？」

「そんなノリです。ただ、学校の実態としてはむしろ……」

　けらけらと笑う恵那とは対照的に、甘粕はあいかわらず渋い表情のままだった。

「陸軍中野学校って、ご存じですか？」

「戦時中、スパイみたいな人たちを養成していた学校でしたっけ」

「少しよう林りん寺じは訊きくまでもないですかね」

「そりゃあもちろん」

「じゃ、裏うら高こう野やは？」

「何かのマンガに出てきたような覚えはありますが、くわしくは知りません」

「ま、その辺の三つを足して割ったような教育現場なんですよ」

　わかるような、わからないような甘粕の説明であった。

「基本的に関連組織の下したっ端ぱを養成する場所だから、媛巫女のみなさんや四家の方々が入学することなんて例、今までは皆無だったんですけどねえ」

「あはは。ほら、それはさ」

　自称下っ端エージェントの微妙に批判的なまなざしを受けても、恵那は泰たい然ぜん自じ若じやくとしたまま朗らかに言った。

「巫女仲間のみんなが通う学校って『名門！』みたいなところばかりで、出席日数の調整とかを頼むのむずかしそうだったから。あそこなら面倒なこともないし、うちのばあちゃんが口を利きいてくれたんだよねー」

「お嬢さまなんだから、おとなしくリリアン女学園にでも通っといてくださいよ」

　末端構成員の悲ひ哀あいを口にする甘粕だった。

　それを恵那はいつもの鷹おう揚ようさで聞き流し、「そうそう」と話題を変えた。

「通うといえばさ。甘粕さん、撃げき剣けん会かいの方に最近顔を出してないんでしょ？　あそこのおっちゃんたちに言われてるんだ。今度、力ずくで連れてこいって」

「い、いきなり過激なことを言い出しますね」

「撃剣会？」

「首都圏にいる正史編纂委員会の人とか、警察や自衛隊でも〝こっち側〟に近い人たちが武術の稽けい古こをするための研究会。部活動みたいなものかなあ。恵那も東京に来たときは、よく顔を出してるんだよ」

　聞き慣れない言葉に反応した護堂に、恵那が教えてくれた。

　こっち側。呪術やら神々やらにかかわることが多い人々という意味なのだろう。

「あの物騒な集まりを、スイーツ部みたいなノリで語らないでください」

　甘粕の方はため息をついてのぼやき節ぶしだった。

「あの会で使う道場には、これ見よがしに先端が真っ黒な竹刀しないとかを飾っていたりするんですよ。私のような文化系の軟弱男子にはとにかく敷居が高いんです」

「どうして真っ黒なんですか？」

「竹刀の先に硬い鮫さめ皮がわ製の〝切っ先〟が付いているんです。こいつで突きを喰らわせると、ぐさっと刺さります」

「……竹刀が？」

「ええ。竹刀なのに、人の体にぶっすりと。どす黒いのは血が乾いた痕あとでして」

「……防具とか付けないんですか？」

「付けてても全身を守り切れるわけじゃないですからねえ。特に危ないのは、あごの下の垂れを取っ組み合いしながら引きちぎって、とどめの突きを喉のどに喰らわす荒技です。それに、只ただの竹刀だって骨を砕いたり、防具の上から鼓膜を破ったりできますし」

「…………」

　断片的な説明だけで、凄せい惨さんな光景が想像できる。しかし、少女の身ながら会の常連だという恵那はあいかわらず明朗だった。

「あ、でも、剣道ってもともとそういうものなんだよ。竹刀でたたき合うばかりじゃなくて、足あし搦がらめとか蹴りとか体当たりとかを出したり、薙なぎ刀なたとかも持ってきたりさ」

「そんな剣道、すくなくとも俺は聞いたことないけどな……」

「戦前の話です。グレイなんとか柔じゅう術じゅつといっしょですよ。明めい治じ・大たい正しよう・昭しよう和わ初期の荒っぽい、流血とか体罰が笑い話で済んだ時代の産物ですな」

解説する甘粕は、またも渋い顔つきになっていた。

「敗戦後、ＧＨＱの指導で過激すぎる日本武道はだいぶマイルドになります。ただ、当時の正史編纂委員会がその辺の専門家を何十人も囲いこみまして。武芸の指し南なん役やくとして」

「その人たちが、清秋院の言った会を作ったんですか？」

「はい。中心になったのは、元警視庁所属の先生たちらしいですね。知ってますか？　明治維新後の廃はい刀とう令れいでも刀を捨てきれなかった剣術家は、腕さえよければ警官になることが多かったんです」

「剣で戦わせるためじゃないですよね？」

「全国各地の警官に武術の稽古をつけるためですから、似たようなものかもしれません。師し範はん役の剣術家を当時は『撃剣世せ話わ掛がかり』といいました。他に食い扶ぶ持ちもないもんだから、北ほく辰しん一いつ刀とう流りゆうとか直じき心しん影かげ流りゆうみたいな流派の垣根を越えて人材が集まりましてねえ……」

博識な甘粕らしいうんちく話に、護堂は目を丸くした。

「結果、過激すぎる戦前の武道精神と技術が撃剣会のなかで脈々と受け継がれることになってしまったんです。付き合わされる方の身にもなってほしいですよ、ほんと」

「なんていうか、ご愁しゆう傷しよう様さまです……」

「大丈夫だよ。そんなこと言うくせに甘粕さんは結構強いから」

「結構なんて大おお雑ざつ把ぱな言葉で片づけないでください。撃剣会に通う人間の六割以上が私より強いんですから。全然大丈夫じゃありませんって」

撃剣会とやらに甘粕が参加を渋る理由、護堂はなんとなく理解した。

そして思い出す。去年の暮れに行われた園遊会で見かけた、恵那の知り合いらしい武道家風の一団。彼らがきっと撃剣会のメンバーだったのだ。

「清秋院——はともかく、甘粕さんにもそんな苦労があったんですね……」

　しみじみと護堂はつぶやいた。

「山奥の学校ってやつも大変そうですし」

「ま、あっちは慣れれば、手を抜くこともそこそこできますが」

「そういえば、甘粕さんが馨かおるさんとはじめて会ったの、高校生のときなんだっけ？」

「どうでしたかねえ。あそこを卒業して、東京で大学生やってた頃のような気もします。まあ、いずれにせよ、あの人との出会いで人生設計がいろいろ変わってしまいましたが」

　恵那の相づちに答えてから、甘粕は肩をすくめた。

「私、学生時代の夢は月給泥棒になることだったんです」

「そんな計画を夢とか言わないでくださいよとか意見はありますけど、いろいろ納得できました。やっぱり、甘粕さんみたいに特殊な仕事に就つく人には、昔から『ふつうの人間』とはちがう経歴があるものなんですね」

　人に過去あり。感じ入って護堂がつぶやくと、なぜか甘粕は苦笑した。

「そういう草薙さんこそ、過去にいろいろあったようじゃないですか」

「何言ってんですか、俺はごくふつうの、どこにでもいる小・中学生でしたよ。清秋院やエリカたちみたいに『修行』とかもしていませんでしたし」

　幼少の頃から呪術・武術の英才教育を受けてきたという恵那たち。

　そうしたエキセントリックな幼児期を持たない普通人代表として、護堂は言った。



「あ、でもさ。前からちょっと気になってたんだ」

　いきなり恵那が口をはさんだ。

「王様って自分を『ふつう』とか言う割に、荒っぽいことに昔から慣れてた感じだよね。ほら、最初にウルスラグナと戦ったときだって、危ないところにどんどん自分から近づいて、最後には勝利の神様と一騎打ちしたわけだし」

「…………」

「もしかして、昔から結構ケンカとかしてた？　カンピオーネのことを抜きにしても、王様は甘く見ちゃいけない気がしてたんだよね、前々から」

「な、何を言うんだ清秋院。俺は昔から平和主義者だったんだぞ」

　護堂はもちろん、即座に否定した——いや。

　正確には言葉をにごした。触れられたくない部分だからだ。

　草薙護堂。高一にして身長一八〇センチ。昔から背は高い方だ。中学時代はそこそこ知られた野球選手で、勝負強い四番打者と呼ばれることもすくなくなかった。速球を見切る動体視力には今でも自信がある。決して筋肉隆りゅう々りゅうではないものの、背筋や手首など、然しかるべき部位は十分以上に鍛えられている……。

　それらの身体的特徴がある種のシチュエーションで有効に役立つことも、遺い憾かんながら経験則として承知していた。

　そう、たとえば。中学時代、野球関係の合宿で地方遠征したときなど。

　才能あふれる投手だが単細胞の旧友・三み浦うらがご当地の不良といざこざを起こしたとする。

　その場合、いきり立つ三浦を力ずくで宿舎へ連れ帰ることが護堂の役目となる。

　まず暴れる三浦に多少の実力行使を加えて、沈黙させねばならない。気が収まらない現地の連中から逃れるため、逃げ足と、わずか

ながらの逆襲も必要になるだろう。あとで問題になるといけないので、素す性じようがばれないよう細心の注意も払わなくては……。

　また、記憶の迷路をさまよってみると。

　同種のエピソードがいくつも発見できる事実に護堂は気づいた。

　こほんとせき払いする。

「まあ、あれだ。仮に主義主張を棚上げしなくちゃいけないときがあるとしてもだな。俺の方から自発的に平和主義と縁を切ることはなかった——ないはずだと思う」

「またまたあ。いざとなったら絶対に躊ちゆう躇ちよとかしないくせに～」

「ま、その辺の真しん偽ぎはともかく」

　恵那は例によって軽やかに笑い、甘粕は『いろいろ調べたから知ってますよ』と言わんばかりのにんまり顔だった。

「中学時代の草薙さん、知る人ぞ知る野球選手だったそうで。日本代表みたいなのにも選抜されて、台タイ湾ワン遠征とかしていたんですよね、たしか」

「日本じゃなくて、東京都とか関東地方の代表です」

　今度は後ろめたいことが皆無の想い出話なので、護堂はなめらかに言った。

「シニアで野球やってるチームから選抜メンバーを集めて、九州チームとか北海道チーム、東北チームなんかを作って、国際大会に参加するってやつです。日本代表みたいに大それたものじゃないんですよ、本当に」

　たいした手て柄がら話だと思っていないので、護堂は苦笑と共に言った。

　実は一五歳以下の硬球野球世界大会に挑戦するため、本当の日本代表を結成するという話もあった。だが、開催国の政情不安を理由に日本は参加を見送ったのである。

今となっては懐なつかしい記憶の数々だった。

「人よりもすこしは上う手まかったかもしれませんけど、野球やってたときの俺は本当にどこにでもいるような、ふつうの選手だったと思います。変に持ちあげないでくださいよ」

「えっ、野球やっていた頃の護堂？」

リリアナが水を向けると、徳とく永なが明あ日す香かは「うーん」と考えこんだ。

草薙護堂の地元でもある本ほん郷ごう通り沿いのカフェだった。屋外のテラス席にいる明日香を見つけて、リリアナも相席させてもらったのである。

明日香はちょうどコーヒーを飲みながら、雑誌を眺めているところだった。

アスリートのインタビュー記事を中心とする、スポーツ全般をあつかう雑誌だ。表紙がちょうど野球選手だったので、リリアナはふと訊たずねてみたのだ。

昔、この競技をやっていた頃の草薙護堂はいかなる選手だったのかと。

「あいつのことだから、やっぱりふつうの選手じゃなかったんだけどね」

「いかにもありそうな話だな」

「まあ、技術云うん々ぬんについてはあたしもよくわからないけど。明らかに『どこにでもいる野球少年☆』って印象じゃなかったわよ」

リリアナと向き合う形ですわりながら、明日香はつれづれに語る。

「あれ。野球マンガに出てくる敵役みたいだった」

「……というと？」

「実力は折り紙付きなくせに、さわやかさとかが決定的に足りない感じだったのよね。護堂のやつ中学生のくせに、妙に頭を使いながら野球してたから。相手チームの狙ねらいを読んで、裏をかいたり。裏をかくフリで牽けん制せいして、敵の投手や打線を振りまわしたり」

　チームの司令塔である捕手、そして四番打者だったという草薙護堂。

　彼のプレーぶりを明日香は訳知りな口ぶりで教えてくれた。やはりスポーツ誌を愛読するだけあって、一般的な女子高生よりも野球にくわしいようだ。

「ライバルだった三浦くんってピッチャーと対戦するときはね。護堂のやつ、一、二打席目はいつも凡退するくせに、三回目くらいの打席からボンボン打ちだすの。あれは一打席ごとじゃなくて、一試合まるごと使って、あの子を攻略する組み立てを考えてたんだと思う」

　体だけでなく、頭の方も駆使して対決に臨のぞむ。

　いかにも草薙護堂らしい逸いつ話わだった。明日香はさらに続ける。

「あいつ、試合の序盤とかランナーいないときはたいして目立たないくせに、ここぞって場面で大きいの打ったり、打点を荒あら稼かせぎして、派手にやってたのよ。クセのある子が多いピッチャーを操縦するのも妙に上う手まかったし」

「たしかに言われてみれば……」

　エリカ・ブランデッリはじめ、清秋院恵那や陸りく鷹よう化か。

　若きカンピオーネのまわりに侍はべる、天才性と奔ほん放ぽうな性格を併あわせ持つ面々。彼女たちをリードし、指示どおりに動かすことは、草薙護堂のひそかな特技だと言ってもよい。

　そこに思い当たって、リリアナは大きくうなずいた。

「そういう選手だったから、知る人ぞ知るって感じで東京代表や関東代表にもよく選ばれていたのよね。だってのに護堂本人は『俺みたいなのは珍しくないだろ』みたいに言って。いつものことだけ

ど、本当に自己申告が当てにならないやつだったわ」

　やや憤ふん然ぜんとつぶやいて、昔語りを終える徳永明日香だった。

第８話　草薙護堂と奥多摩の怪物

■■　登場キャラクター　■■

草くさ薙なぎ護ご堂どう

エリカ・ブランデッリ

万ま里り谷や祐ゆ理り

リリアナ・クラニチャール

清せい秋しゅう院いん恵え那な

甘あま粕かす冬とう馬ま

女子アナ

■■　オープニング　■■

□リリアナのモノローグ調ナレーション

リリアナ「太たい古この昔より、人類が語り継いできた神話の

神々」

リリアナ「ごく稀まれに、彼らは地上に降こう臨りんする。神話という物語の拘束を失った神は、気ままに地上をさすらい、行く先々に災いをもたらす」

リリアナ「そうした神々を、われわれ魔術師は『まつろわぬ神』と呼ぶ」

リリアナ「人は神に抗あらがえない。人類全ての力と叡えい智ちを集めたとしても、『まつろわぬ神』には遠くおよばない」

リリアナ「だが、神と戦うに足る力の所有者も、地上にはいる」

リリアナ「彼らは神殺し。人でありながら神を殺あやめ、神の聖なる権けん能のうを奪い取った魔王。われわれは彼ら七人を『カンピオーネ』と呼ぶ」

リリアナ「最も若き七人目のカンピオーネ、草薙護堂について、これから語りたいと思う」

リリアナ「覚えておいてほしい。カンピオーネは神々と戦う戦士だが、決して人類の守護者ではないことを。彼らはまさに魔王。あらゆる災さい厄やくとひとつまみの希望をまとめて収めた、パンドラの箱なのだと……」

■■　Aパート　■■

□草薙護堂、平和を語る

　護堂、エリカ、祐理、リリアナが集合し、くつろいでいる。

護堂「いきなりだけどさ。平和っていいものだよな」

エリカ「本当にいきなりね。まあ、世の中平和な方が望ましいとは、わたしも思うけど……」

護堂「何だよ、エリカ？」

エリカ「平和なんて言葉、草薙護堂にはふさわしくないわ。あなたはカンピオーネ。神を殺して、その権能を簒さん奪だつした魔王なんだし。むしろ戦乱とか騒乱の申し子、平和の敵じゃない」

護堂「人を悪魔みたいに言うな。俺はれっきとした平和主義者だ」

エリカ「日本語として不適切よ。自称・平和主義者でしょう？」

護堂「自称の方が余計だっ」

エリカ「（祐理に）ねえ祐理。あなたからも言ってあげて。護堂くらい平和な生活と程遠い人はなかなかいるものじゃないって」

祐理「そんなことはありませんよ、エリカさん」

エリカ「気を遣つかう必要ないわよ。護堂もそろそろ自分のことを理解してもいい頃だと思うし」

祐理「気なんて遣っていません。護堂さんはご自身でおっしゃったとおり、いたずらに事を荒立てようとしない、平和を好まれる方だと思います」

護堂「（うれしそうに）万里谷……」

祐理「ただいろいろ不注意だったり、志こころざしはご立派なのに行動の段階でそれを忘れてしまったりするだけで、最初から平和をおびやかすおつもりはないはずです」

護堂「（ショックを受けて）万里谷!?」

エリカ「どう？　細かなちがいはあるけど、エリカ・ブランデッリと万里谷祐理の意見はおおむね一致するようよ」

護堂「待ってくれ。ちゃんと考えてくれよ。最近さ、トラブル起きてないだろ？　俺、もう長いこと神様と戦ってないし。……どうし

たんだよ？　ふたりとも変な目で俺を見て」

エリカ「ごめんなさい。もうボロが出たと思って」

祐理「あの、お言葉を返すようですが。護堂さんが前に神と戦われてから、まだ二は〇つ日かしか経たっていません」

護堂「ああ。一ひと月つき近く何も起きてないんだ。最近、平和でいいよな」

エリカ「（ひそひそ）そういえば『百日天下』という言葉があったわよね……」

祐理「（ひそひそ）たった百日で終わるなんて、短い栄光ですよね……」

エリカ「（ひそひそ）それでも護堂の平和より五倍も長いのよ……」

護堂「こんなに長い間、誰とも戦わずにすんでるんだ。この調子なら、一カ月越えも大丈夫そうだぞ。リリアナもそう思わないか？」

　返事はない。

　ＳＥ：カリカリとペンを走らせる音

護堂「さっきから何やってんだ、リリアナ？」

リリアナ「（ハッとして）申し訳ありません。今月中に提出する報告書があったもので」

□リリアナの報告書

護堂「そんなもの、どこに提出するんだよ？」

リリアナ「わたしが所属する結社《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》に、です」

護堂「魔術師の秘密結社ってやつか。……どんな内容なんだ？」

リリアナ「草薙護堂——あなたに関するレポートです。神殺しの魔王、カンピオーネとはいかなる存在か、後世の魔術師に伝えるための研究資料となります」

護堂「俺たちのこと、後世でも研究するのかよ！」

エリカ「それはそうよ。カンピオーネといったら、『まつろわぬ神』とならぶ脅きよう威いだもの。崇あがめたてまつるにせよ、畏おそれて逃げ出すにせよ、情報を仕入れておいて損はないわ」

祐理「転ばぬ先の杖つえですね」

リリアナ「今回は第一弾なので、草薙護堂と、彼に仕つかえる者たちの基本情報をまとめています」

護堂「変なこと書いてないよな？　事実に反することとか」

リリアナ「公式文書ですから、そんなことは許されません。たとえば、わたしの情報はこうです。——リリアナ・クラニチャール、一六歳。草薙護堂に仕える第一の騎士であり、王の身辺を取り仕切る執しつ事じでもある……」

エリカ「リリィが第一の騎士、という時点で事実誤認じゃないかしら」

リリアナ「どう考えても、その称号に最もふさわしいのはわたしだろう？」

エリカ「まさか。そこはこう書くべきよ。——草薙護堂の右にはべる第一の騎士にして、彼の愛人……その名はエリカ・ブランデッリであると」

護堂「（あきれて）公式な記録に『愛人』とか書かせるなよ」

エリカ「わたしたちの関係をかんたんに説明できていいじゃない。……（つやっぽく、ささやくように）ねえ護堂、そのレポートにはふたりの蜜みつのように甘い生活のことも、くわしく書くべきだと

思わない？」

護堂「（あわてて）おおお思わないっ。耳に息を吹きかけるな！」

祐理「え、エリカさん、はしたない真ま似ねはおやめくださいっ。護堂さんも毅き然ぜんとしてくださいっ」

リリアナ「（祐理に）ちなみに、万里谷祐理の情報はこうなる。——媛ひめ巫み女こと呼ばれる、日本古来の特殊能力者。きわめてすぐれた霊れい視し力りよくを持ち、適切な助言で王を助ける」

祐理「私のことも書かれているのですか？」

リリアナ「当たり前だろう。あなたも草薙護堂を支える仲間のひとりなのだから」

祐理「そんな——（照れて）支えるだなんて……」

リリアナ「性格は温厚で慎つつしみ深い。家事全般に長たけ、華道をはじめ芸事もたしなむ。古きよき大和やまと撫なで子しこ、日本女性の鑑かがみといえるだろう」

祐理「私なんて、そこまで言っていただくような者では……」

リリアナ「しかし、口うるさい。説教癖ぐせあり。草薙護堂の不適切な言動によく苦言を呈ています。その効力は高く、王はしばしば万里谷祐理に平へい身しん低てい頭とうし、今後は十分気をつける旨むね、繰りかえし誓約する」

祐理「（ハッとして）リリアナさん、そんなことを公式文書に!?」

リリアナ「後世の研究者のためだからな」

祐理「（恥ずかしさで身もだえする、声にならない声）※□○×▲！」

護堂「いや……（フォローしようか考えて、結局あきらめ）まあ、万里谷には反論できないことで注意されてばかりだから、たしかによく頭を下げてるよな……」

エリカ「ふふっ。その分、わたしに甘えればいいじゃない」

護堂「だから、無意味に体をくっつけるな！」

リリアナ「まったくだ。エリカについては残念ながら、王をたぶらかそうとする雌め狐ぎつねと書かざるを得ないな。すこし慎んでほしいところだぞ」

エリカ「あらリリィ。研究資料に主観を入れるのは感心しないわよ。あなたの情報欄らんにこう書くべきね。――リリアナ・クラニチャールには、感情にまかせて暴走する悪あく癖へきあり。その失敗をフォローするのは、いつも幼なじみのエリカ・ブランデッリであるって」

リリアナ「勝手に友人ぶるな。わたしたちはただの腐れ縁だっ」

祐理「（落ち着かせるように）あの、恵那さんのことは書かれたのですか？」

リリアナ「あ、ああ。今はいないが、彼女も仲間だからな。――清秋院恵那。神刀・天叢雲劍あまのむらくものつるぎを使う媛巫女筆ひつ頭とう。心身を清めるため、よく山ごもりする……」

護堂「ところで、俺のことは何て書いたんだ？」

エリカ「そこがいちばん肝かん心じんよね」

リリアナ「はい、このように」

　ＳＥ：カサカサと、紙を動かす音

護堂「なになに……草薙護堂、最も若き七人目のカンピオーネ……その破壊力は最大級のハリケーンを凌りよう駕がする……」

エリカ「人の姿をした災さい厄やくの運び手……」

祐理「行く先々で破壊と混乱を巻き起こす、混こん沌とんの化け身しん……」

護堂「何じゃ、こりゃあっ⁉」

リリアナ「（ごまかすように）も、申し訳ありませんっ。わたしの個人的感情をできるだけ交えず、事実のみを書こうとしたら、このようになってしまいましてっ」

エリカ「言われてみれば、たしかに事実よね」

祐理「そういえば、そうですね……」

護堂「何を言う。これこそ事実誤認だ。事実に脚色をくわえたフィクションだ。こんなのは正確な記録じゃない！」

　ＳＥ：バンと机をたたく音

護堂「自分のことは、自分がいちばんよくわかっている。そのレポートは俺が書く！」

□みんなでレポート作成

護堂「……じゃあ、自己紹介からはじめるか。ええと、俺の名前は草薙護堂。どこにでもいる、ふつうの高校一年生」

　ＳＥ：ブーッというクイズ番組の不正解音

エリカ「いきなりまちがってるじゃない」

祐理「護堂さんのお立場で『ふつう』と言い切られるのはちょっと」

リリアナ「あなたの欠点は、ご自分の本質から目をそむけるところです」

護堂「なんでだよ？　ちょっと変な体になったけど、俺は基本的にふつうの人間だぞ？　性格だって真ま面じ目めな方だと思うし、変わった趣味もないし」

エリカ「ちょっとって……ふつうの人間は神の雷いかずちとか受けたら、骨まで燃え尽きて死ぬわよ」

祐理「護堂さんの場合、何事もなかったように復活されますものね」

リリアナ「その生命力だけで、すでに不死身の怪物です」

護堂「じゃあ、体のことは抜きにして、メンタルの話をしよう！」

エリカ「同じよ」

祐理「同じだと思います」

リリアナ「同じでしょう。あなたのメンタリティを『ふつう』と言うのは、青い空を『青くない』と言いはるようなものです」

護堂「そこまでか⁉」

エリカ「護堂の自己申告は当てにならないし、わたしが草薙護堂の恐るべき戦歴を語ってあげるわ」

護堂「恐るべきとか言うな」

エリカ「（ナレーション口調）彼が最初に殺めたのは、古代ペルシアの軍神ウルスラグナ。十の化身に姿を変えながら、あらゆる戦場で勝利した光の神。ウルスラグナから『十の化身』の権能を簒奪した彼は、神殺しの魔王として華々しくデビューする……」

護堂「華々しいも余計だ」

エリカ「それからわずか半年の間に、彼は何度も神々と戦う。古代フェニキアの天空神メルカルト、知恵と闘争の女神アテナ、英雄ペルセウス、斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くう、最源流の騎士ランスロット・デュ・ラック……。伝説的な死闘の代償は、常に大きすぎる破壊の爪つめ痕あと。草薙護堂の権能によってローマのコロッセオは粉砕され、ミラノはスフォルツェスコ城を失った。日本でもたくさんの名所旧跡が無惨に蹂じゆう躙りんされ——

どうしたの護堂？　顔色が悪いわよ？」

護堂「いや……自分のしたことを思い出して、胃が重くなってきた」

エリカ「（からかい）身から出たサビよね」

護堂「（短い悶もん絶ぜつの声）」

祐理「待ってください。たしかに護堂さんは人に後ろ指をさされるような真似をいくつもされていますが」

護堂「（また短い悶絶の声）」



祐理「でも、人のためになることも……私を助けてくださったこともあります」

護堂「（持ち直して）そうだろ!?」

祐理「私を助けるため同じカンピオーネであるヴォバン侯こう爵しゃくと戦い、妹の事件のときは、あの恐ろしい羅ら濠ごう教主にも立ち向かってくださいました」

リリアナ「たしかに。あの凶悪な魔王方とくらべれば、草薙護堂は善良な正義の使徒と言っても、差しつかえないな」

祐理「まあ、喉のど元もとをすぎたら熱さを忘れるとか、女性関係がだらしなさすぎるとか、困った人でもありますが……特に女性問題については、ときどき本当に一回くらい刺された方が護堂さんのためになるんじゃと、考えたりもしますが……」

護堂「（困って）ええっ!?」

祐理「エリカさんとの仲はもちろんですが、ちょっと目をはなしていたらリリアナさんと親密すぎる関係になってしまいましたし、うちの妹とまでおかしなことになりそうで困っていますし。それに……（声をひそめて）私とも、その……（ここからはごにょごにょ口のなかで）ああいうことになってしまって、本当に困った人だと思うのですが、それでも私としては、精一杯支えてあげたいと思ってはいますし……」

護堂「（おずおずと）万里谷。一応断っておくと、神様と戦うために成りゆき上仕方なくとか、事情はいろいろあるわけで。俺の口から言うのもなんだけど……」

祐理「（いきなり凜りんとして）お黙りください。そういうことを男の方からおっしゃるのは卑ひ怯きようですし、ご自分の顔に泥どろを塗る行為だと思います」

護堂「は、はい」

リリアナ「女性関係の話が出てしまったか……。実はそのあたりの資料を、今回のレポートに入れるかどうかで迷っていたんだが」

エリカ「入れるべきじゃないかしら？　草薙護堂の人間性を語るう

えで、避けて通れない部分だと思うわよ」

護堂「待て。入れる必要ないっていうか、そもそも俺には、問題になるような女性関係なんて——」

リリアナ「ないとは言えないはずですね？」

護堂「……ないとも言えないけど、あるとも断言できないというか……」

リリアナ「そのあやふやさだけで十分です。（ため息まじり）あなたがそういう方であることは、誰よりわたしが実体験してますし……」

護堂「実体験って、おい……」

リリアナ「お忘れですか、ナポリでのことを？　（声をひそめて）あのときあなたは、海辺の通りで人目もはばからずにわたしと唇くちびるを——」

護堂「（早口で）そこについてはたしかに俺の不徳の致すところというか、勢いにまかせて突っ走った結果というか、神様を倒すために必要っていう共通認識があったはずというか、とにかく俺が悪かったから、みんないる前で言うのはやめようぜっ」

エリカ「今さら隠さなくてもいいでしょう？　ここにいる全員と、そういうことをしてるわけだし……。最初に会ったときは、ここまでデタラメな男の子だとは夢にも思わなかったわ」

祐理「護堂さん、ふだんは本当に常識人らしくされてますものね……」

護堂「お、俺はいつだって常識のある、穏和な人間だと思うぞ」

エリカ「思っているだけよ」

リリアナ「だけでしょう」

護堂「そんなことはないっ。みんな思いこみや憶測で俺のことを語りすぎだ。本当の俺を、きちんと見てくれよ」

エリカ「見てもいいけど……わたしたちの評価は変わらないと思う

わよ？」

□リリアナのモノローグ調ナレーション

リリアナ「このような会話があった翌日。草薙護堂は自みずからの言葉があやまっていたことを、彼自身の行動によって証明する。だが、わたしたちの誰もが驚きはしなかった。なぜなら、草薙護堂はカンピオーネ。荒ぶる神殺しその人なのだから……」

□恵那からの呼び出し

　護堂、祐理、リリアナが道を歩いている。

　ＳＥ：交通量の多い、車道の騒音

護堂「エリカのやつ、今日はどこに行ったんだ？」

リリアナ「出かける用事があると言って、先に帰りました」

祐理「まあ、お忙しいのですね」

　ＳＥ：携帯電話の着信音

護堂「俺の電話だ。……珍しい。清秋院からだな」

リリアナ「清秋院恵那か。今、東京にはいないんだろう？」

祐理「はい。二日ほど前、群ぐん馬まの方に行かれたと聞いています」

護堂「とにかく出てみよう」

　ＳＥ：ピッというスイッチオンの音

護堂「もしもし」

恵那の電話「王様ヒマ？　よかったら、手を貸してくんないかな？」

護堂「俺の手でよければ、いくらでも貸してやるけど……荒っぽいことならダメだぞ。もう一ひと月つき近く平和に暮らしてるんだ。俺はこのまま平和に長生きして、畳たたみの上で往おう生じようしたい」

恵那の電話「またまた～。そんなの、王様らしくないよ」

護堂「みんな、何で俺と揉もめごとをセットで語るんだ……」

恵那の電話「だって王様、口ではイヤがるけど、暴れたり戦ったりするの好きでしょ。ほら、『ツンデレ』ってやつ？」

護堂「どこでそんな言葉覚えたんだよ……」

恵那の電話「それよりさ。王様の予想どおり、実は荒っぽい頼み事なんだけど……お願い、ちょっとだけ手伝って！　その『平和な暮らし』を守るために。このままだと、東京が大変なことになりそうなんだ」

護堂「（即座に）本当か？　くわしく話してみろ」

■■　Ｂパート　■■

□奥多摩の山中

恵那、護堂、祐理、リリアナは山道を歩いている。

ＳＥ：鳥の鳴き声・枝を踏む音など、山のなかを進む感じの音

護堂「ずいぶん山奥まで来たな」

恵那「このくらい、まだまだだよ。結構、人里に近いしね。……ただ、祐理にはちょっときつかったかな？」

祐理「（息を切らして）だ、大丈夫です。ま、まだがんばれますから……」

リリアナ「きつかったら肩を貸すぞ。あまり無理をするな」

祐理「（息を切らして）あ、ありがとうございます……」

護堂「この辺ですこし休憩しよう」

祐理「（ふう、と深く息を吐く）すいません……」

ＳＥ：小鳥のさえずり

恵那「昨日まで栃とち木ぎと群馬の県境あたりの山に入って、ムカデのバケモノを追いかけてたんだ」

護堂「ムカデって、あちこち這はいまわるアレか？」

恵那「うん。でも、ふつうの大きさじゃないよ。はっきり体を見たわけじゃないけど、頭の先からしっぽまで、たぶん二〇メートル以上ある」

リリアナ「あからさまにまともな生き物じゃないな」

恵那「しかも、こいつ神獣くさいんだ」

祐理「神に仕つかえる眷けん属ぞく……それもムカデの姿をした……」

護堂「でも神獣ってことは、ちゃんとした神様より弱いはずだよな？」

恵那「恵那やリリアナさんでもぎりぎり倒せるし、王様だったら余裕で蹴け散ちらせるよ。けど、このムカデ、山のなかに穴を掘りまくって、ほとんど地下にもぐってるんだ。つかまえられなくて」

リリアナ「獲え物ものが地下にいるんじゃ、無理もない」

恵那「長くて深い穴をあちこちに掘るから、ムカデが出た山は地盤がゆるんで、ひどいんだ。すぐ土砂崩れが起きたりしてね。こいつが昨日、東京方面へ移動をはじめてさ。今はこの山にいる」

護堂「東京っていっても、このあたりは山ばかりだもんな」

恵那「山奥で穴を掘るのだって大迷惑なのに、このまま進んで街中を穴だらけにされたら、もっと厄介だからね。その前に倒さなきゃと思って」

護堂「わかったよ。そういうことなら、俺も手伝う」

恵那「さすが王様、そうこなくっちゃ！」

護堂「でも、何でムカデが神獣——神様のしもべなんだ？　そんなご立派な生き物にも思えないけどな」

恵那「それがねー。神の使いとしては、意外と由ゆい緒しよ正しいやつなんだな」

　ここでリリアナに霊視が降くだる。

　ＳＥ：鈴の鳴るような和風の音

リリアナ「（おごそかに）日本では古来、ムカデは鉱山の象徴……地中に細く掘られた坑道は、ムカデの足に喩たとえられた。転じてムカデは鉱脈にかかわる者たちの神となる——」

恵那「リリアナさん、知ってたんだ？」

リリアナ「いや。急に霊視が降りてきて、ムカデの神のイメージを得ることができた。この山にひそむ神獣の霊気が、わたしの霊感を刺激したんだろう」

恵那「なるほどね。今リリアナさんが言ったとおりだよ。ムカデは鉄や銅といった金属の神様の使いでさ。あの毘び沙しや門もん天てんも眷けん属ぞくにしてるんだ」

護堂「（しみじみ）ネットで検けん索さくするみたいに情報を引き出せるんだから、便利な力だよな」

リリアナ「いつも使えるわけではありませんから、限界もありますが……それより万里谷祐理。霊視の力はあなたの方が遥はるかに強い。もっと役立つ情報を得られたんじゃないか？」

祐理「（おごそかに）…………はい。あちらです」

護堂「あちらって……沢になってるみたいだな」

祐理「あちらに進めば、必ずや神獣と遭遇できるでしょう」

恵那「でかした祐理。ムカデの居場所を霊視できたんだね」

護堂「よし。じゃあ、行ってみるか」

□戦闘準備？

ＳＥ：みんなで歩いていく足音

恵那「ところでさ……。これから戦いになるわけだよね？」

護堂「ああ。不本意ながら、そうなりそうだな」

恵那「だったら、王様には武器が必要なんじゃない？」

リリアナ「たしかに。清秋院恵那の言うとおりですね」

護堂「そんな物騒なもの、要いらないよ。これだから、いつも剣とか日本刀を振りまわす連中は……。日本には銃刀法って法律があるのをいいかげん理解してくれ」

恵那「いや、そっちじゃなくて」

リリアナ「ええ、そちらではない武器のことです」

護堂「何だよ？　（ハッと気づいて、あわて気味に）いや。いやいやいや、どんな形でも俺には武器なんて必要ない。万里谷もそう思うだろ？」

祐理「え!?　（困って）どうなのでしょう……」

リリアナ「では、言わせていただきます。あなたの武器——具体的には『剣の言こと霊だま』を用意すべき理由について」

恵那「王様の使う力って、ペルシアの神様から奪った『十の化け身しん』でしょう？」

リリアナ「軍神ウルスラグナは勝利の神にして太陽の申し子、王権と民衆の守護者。十の化身を持ち、次々と姿を変えながら戦った……」

恵那「十の化身はまず、吹きすさぶ強風。そして雄お牛うし。太陽を運ぶ白馬。獰どう猛もうな駱らく駝だ。恐ろしい猪いのしし。一五歳の少年。空を飛ぶ鳳おおとり。雄羊に山や羊ぎ……」

リリアナ「最後は黄金の剣を持つ戦士」

恵那「ウルスラグナがそうだったように、王様も戦士に化身すれば、剣を使えるようになる。でも、それは手で振りまわす剣じゃなくて」

リリアナ「神を切り裂くため、言霊によって操る黄金の剣」

恵那「『十の化身』を使うには厳しい使用条件を満たさなくちゃいけない。そして、戦士になって剣を操るための条件は——」

リリアナ「標的とする神について、詳細な知識を得ること」

護堂「（ごまかすように）そ、そうだったか？」

リリアナ「忘れたふりをしても無駄です。神の知識を得るため、あなたとわたしはナポリで……何度もキスを交わしたじゃありませんか？」

護堂「（観念して）そうでした……」

リリアナ「（微妙につやっぽくなっていく）ふつうの学生だった草薙護堂は神の知識を持たない。でも、わたしたちが魔術で知識を伝えれば、使用条件をクリアできる。だから今まで何度もそうしてきました……」

護堂「でも、やっぱり倫理的にマズイというか！」

リリアナ「（つやっぽく、でも恥じらいつつ）仕方ありません。キスは魔術をかけるための手順ですから。……今までいつもそうでしたが……わたしの方は今回も問題ありません」

護堂「問題ないって何が!?」

リリアナ「もちろん、あなたに知識をお教えすることがです。幸い、必要なイメージはさきほど霊視で得られましたし……」

護堂「問題はむしろ俺の方にあるよ!?」

恵那「ちょっと待ってよ。その役、恵那でも問題ないはずだよ」

護堂「問題だらけだろ!?」

恵那「なんてったって、敵は日本の神様だしね。外国人のリリアナさんより、日本の巫み女こである恵那の方がくわしいんじゃないかな」

リリアナ「わたしはもう十分な知識を授かっている。そこは理由にならないだろう」

恵那「そんなのまだわからないよ。実際にやってみて、やっぱりダメでしたってなるかもしれないじゃん。ここは大事を取って、恵那でいくのがいちばんだよ」

護堂「一番も二番もないっ。なあ万里谷！」

祐理「（うわのそらだったところに話を振られて、あわてる）な、

なんでしょう!?」

護堂「万里谷も言ってやってくれ。もうすぐ戦いがはじまるのに、こんなことで揉めてる場合じゃないぞって」

祐理「は、はい。おふたりともいいかげんになさってください！　護堂さんのおっしゃったとおり、危険な戦いの前だというのにこんなことで……（だんだん声がすぼまっていく）」

護堂「（不思議がる）ど、どうした？」

祐理「あ、いえ。危険な戦いの前だからこそ、このことで口論になるのではと思いまして……」

護堂「一理あるけど、今はいいじゃんか！」

　ＳＥ：怪獣の咆ほう哮こう

護堂「神獣の声か？　（小声で）助かった。（大声で）先に行くぞ！」

　ＳＥ：ダッと駆け出す足音

恵那「あ、待ってよ王様！　剣の準備しなきゃ！」

リリアナ「不用心にも程があります！　仕方ない、みんな追いかけよう！」

祐理「護堂さん！」

　ＳＥ：たたたっと駆け出す足音

護堂「うわあああああっ」

　ＳＥ：土砂崩れの音

祐理「きゃあああああっ」

リリアナ「くっ」

恵那「みんな気をつけて！」

□都心の大通り

　エリカが街を歩いている。

　ＳＥ：都会の雑踏の音

　ＳＥ：携帯電話の着メロ＆ピッというスイッチオンの音

エリカ「甘粕さんから電話をくれるなんて、珍しいわね」

甘粕の電話「ちょっと不測の事態が発生してまして。藁わらにすがって溺おぼれるより、エリカさんのお力を拝借しようと思ったんですよ」

エリカ「それは正せい史し編へん纂さん委員会のエージェント・甘粕冬馬としての要よう請せいよね？」

甘粕の電話「エリカさんに個人的な相談事を持ちかける度胸はありませんよ。……私たちの仕事はご存じのとおり、神様や魔術がらみの事件が日本で起きたとき、被害を抑おさえこんだり、情報を隠いん蔽ぺいすることですが」

エリカ「つまり、また大事件が起きた。それも草薙護堂がらみで」

甘粕の電話「話が早くて助かります」

エリカ「護堂と別れてから四分の一日も経ってないけど……。あの人ったら、ちょっと目をはなすと、すぐにとんでもないことをしでかすわよね」

甘粕の電話「実はうちの恵那さんがからんでます。あの人今、東京方面に南下してる謎のムカデ型怪生物を倒す任務の真っ最中でして」

エリカ「その先、当ててみましょうか？　恵那さんのことだから、それを口実に護堂を呼び出して、いっしょに一暴れしようとたくらんだ、とか」

甘粕の電話「正解です。草薙さんといっしょに、奥おく多た摩までムカデ狩りをはじめてます」

エリカ「もしかしてこの電話、デートのお誘い？」

甘粕の電話「そんな恐れおおい。祭りにひとりで行くのはさびしいから、ごいっしょにどうですかというご機き嫌げんうかがいですよ」

エリカ「会場まで送ってくださるなら、もちろんオーケーよ」

甘粕の電話「そりゃ助かります。実はもう近くに来てまして」

ＳＥ：車の駆動音＆クラクションの音

ＳＥ：エリカが携帯をスイッチオフするピッという音

ＳＥ：車のドアが開いて閉まる音＆車が走り出す音

エリカ「（助手席から運転席へ）さすが甘粕さん、手回しいいわね。ジャパニーズニンジャマンの鑑かがみだわ」

甘粕「（やや鬱うつ）その呼び方やめてもらえませんかね……。過労死するビジネスマンみたいじゃないですか……」

エリカ「そう？　ところで、テレビかラジオをつけてみない？」

甘粕「なぜですか？」

エリカ「だって護堂なのよ。空白の時間が半日あったら、ニューヨークを崩壊させていてもおかしくない人よ。彼の最新情報がニュース報道されたとしても、驚くに値あたいしないわ」

甘粕「たしかにそうですな」

　甘粕はナビのワンセグテレビをオン。

　ＳＥ：スイッチオンのピッという音

女子アナ「最新ニュースをお伝えします。一時間ほど前、東京都多摩区の鬼おに墓はか村むらで大規模な土砂崩れが発生し、あわせて原因不明の爆発も目撃されました――」

エリカ「名探偵なら『謎は全て解けた』と言うところね。誰が犯人か、捜査するまでもなく特定できるわ」

甘粕「奇遇ですね。私もです。ひとまずニュースの現場をめざしますか。……あちらに着く頃には戦いが終わっているといいんですけどねェ。仕事が減りますし」

エリカ「じゃあ甘粕さん、わたしの不運を祈るといいわよ」

甘粕「と、おっしゃいますと？」

エリカ「エリカ・ブランデッリはね、こういうとき不思議と見せ場に間に合う星の下もとに生まれているからよ！」

　ＳＥ：車の駆動音

□地下

護堂「（痛）あいてててて……ここはどこだ？　ずいぶん暗いな」

　ＳＥ：ごそごそ荷物を探る音

護堂「念のため、ライト持ってきてよかったよ……」

　ＳＥ：ぱちり

護堂「ここは地下か。しかも道になってる？　洞窟……いや、昔の坑道か何かか？　（ハッとして）万里谷！」

祐理「（まだ朦もう朧ろうとしている）ん……（覚醒）護堂さん！」

護堂「無事だったか？」

祐理「は、はい。どうにか」

護堂「さっきはひどかったな。バカでかいムカデが土から出てきた途端、地面が大崩れして。俺たち、あのとき地下に落ちたみたいだ」

祐理「恵那さんとリリアナさんはどちらに？」

護堂「見あたらない。べつのところに落ちたんだと思う。……ここ、何なんだろうな？」

祐理「まわりの土から、強い霊気を感じます。たぶん、ムカデの神獣が地下に掘った穴なのでしょう」

護堂「本当か？　この調子で街中に穴を掘られまくったら、地下に埋まってる電線や水道管、只ただじゃすまないぞ。地盤沈下とか液状化も起きそうだし……。やっぱり、この辺でやつを止めないとダ

メだな」

祐理「では、やはり」

護堂「ああ。ここであのムカデを倒すか、無力化する。力を貸してくれ」

祐理「は、はい。……でしたら仕方ありません。あの、では、その、いたしましょうか」

護堂「（きょとん）何を？」

祐理「ですから、その……護堂さんは戦われるのですよね？」

護堂「ああ」

祐理「そして、ここにはわたししかおりません。（恥じらいながら）でしたら当然……あの役目はわたしがすべきだと思います。護堂さんとキ（むにゃむにゃ）をして、神の知識をお教えする役を！」

護堂「ええっ!?」

祐理「実はさきほども……恵那さんとリリアナさんの口論、たしかに慎つつしみに欠けますし、はしたないと思いましたけど、でも、誰かがやらなければいけないことかもとひそかに考えていました！」

護堂「ええーっ!?」

祐理「（凜として）私の方は問題ありません。王であられるあなたに力を貸せと請こわれた以上、その務め、必ず果たしてみせます」

護堂「いやいや！　カンピオーネが王様だから従おうとか考えなくていいからっ。どうせ俺の同類連中、性格のおかしい問題人物ばかりだし！」

祐理「では、言い方を変えます。これは私・万里谷祐理が個人として、草薙護堂という方のお役に立ちたいためです」

護堂「（生なま唾つばを呑みこむ）万里谷……」

　ＳＥ：怪獣の咆哮

リリアナの声「（戦いのかけ声）はああああああっ！」

恵那の声「（戦いのかけ声）やああああああっ！」

護堂「（小声で）また助かったっ。（大声で）リリアナと清秋院が向こうで戦ってる。行こう！」

　ＳＥ：タタっと駆け出す足音

祐理「（呼び止めるように）護堂さん！」

□奥多摩をドライブ中のエリカ＆甘粕

　ＳＥ：車の駆動音

甘粕「すっかり夜になりましたねェ」

エリカ「なんだかお腹なかがすいてきたわ」

甘粕「食事処どころでも探しますか。この辺、峠道だからか釜かま飯めしがおいしいんですよ」

エリカ「山道では定番の食べ物なの？」

甘粕「日本の旅の様式美です。次、釜飯屋を見つけたら、寄ってみましょう」

エリカ「（面白そうに）でも、あと二〇分で事件現場なんでしょう？」

甘粕「ええ、残念ながら」

エリカ「ここは日本的勤労精神を発揮する場面じゃないのかしら？」

甘粕「草薙さんのことだから、今頃とっくに『やらかした』あとですよ。どうせ間に合わないんです。腹ごしらえしてから現場に乗りこみましょうよ」

　ＳＥ：怪獣の咆哮

エリカ「今の聞いた？」

甘粕「非常に残念ながら、ばっちり聞こえました」

　ＳＥ：車の急ブレーキ＆方向転換音

エリカ「運命はエリカ・ブランデッリを間に合わせてくれたようね。きっと甘粕さんよりわたしの方が、日頃の行いがよかったんだわ」

甘粕「エリカさんにそう言われると、すごく理り不ふ尽じんに思えますねェ」

□奥多摩山中

　護堂たちはいつのまにか迷宮まがいの地下洞穴網を脱出している。

　地上で巨大ムカデと戦う護堂、祐理、リリアナ、恵那。

　ＳＥ：怪獣の吠ほえ声

　ＳＥ：ゴロゴロと轟とどろく遠雷の音や、ピカッと稲妻の落ちる音

リリアナ「（戦いのかけ声）はあああああっ！」

恵那「（戦いのかけ声）やあああああっ！」

　ＳＥ：剣で打ち合うようなチャンバラ効果音

　ＳＥ：怪獣の吠え声＆重機で土を掘るような音

リリアナ「くそっ。また地下に逃げられた！」

恵那「地上に出てきたところを狙ねらっても、いつもこれで逃げられるんだ。せっかく王様に来てもらったのに、仕し留とめられない！」

護堂「俺の力で狙おうにも、地下のどこにいるのか、わかんないもんな。仕方ない、また地下道にもぐるか……」

祐理「危険です。あんなところで戦われて穴が崩れたら、生き埋めになってしまいます。こんなに地面が崩れやすいんですよ？」

護堂「そりゃそうだけど……」

　そこにエリカと甘粕が駆けつけてくる。

甘粕「やあ、みなさん。お元気そうで何よりです」

エリカ「あの程度の敵相手に、珍しく手こずってるのね、護堂！」

護堂「エリカ来たのか！」

エリカ「ええ。それでどういう状況なの？」

　ＳＥ：土砂崩れの音

護堂「またかよ!?」

□地下、護堂とエリカふたりきり

　ＳＥ：鉱山で落盤事故が起きた的な音。だんだん静かになっていく

護堂「状況は……まあ、こんな感じだ」

エリカ「了解。地中にひそむ怪物が相手だから、攻めあぐねていたのね。……いきなり地下送りにされるとは意外だったわ」

護堂「この地下の穴、さっきの大ムカデが掘ったんだ」

エリカ「まるで地下迷宮みたいに長くて入り組んだ穴ね……。ほかのみんなはべつのところに落ちたのかしら？」

護堂「それか、落ちたのが俺たちだけかだな」

エリカ「とにかく、今ここには護堂とわたししかいない」

護堂「（警戒）まあな……」

エリカ「じゃあ、剣の準備はわたしの役目ね。（可愛かわいくも色っぽい感じで笑う）ふふっ。ひさしぶりに熱い口づけを楽しみましょう？」

護堂「話が飛びすぎだろ!?」

エリカ「まだるっこしい話し合いを省略しただけよ。護堂だって無駄はきらいでしょう？」

護堂「無駄だからって、なんでも省くな！」

エリカ「なら、もうすこし手順を踏んでみましょうか。護堂はあの神獣を倒したいのよね？」

護堂「あんなのを街に行かせたら、とんでもないことになるからな」

エリカ「（つやっぽくなっていく）でも、敵は地中を逃げ場にする曲くせ者もの……さすがのカンピオーネでも、かんたんには仕留められないわ……」

護堂「あ、ああ。さっきからそれで困ってる」

エリカ「（そそのかすように）ここで神獣を逃したら、東京にどんな惨事が降りかかるかしら……？　阻そ止しできるのはあなただけなのよ、護堂？」

護堂「（揺らいでいる）いや、でも。だからって、ここでキスするのは……」

エリカ「（悪魔の誘ゆう惑わく）人々の平和を、街を守るためよ？　護堂、あなたの尊とうとい志を助けてあげたいの。どうか、わたしにキスさせて。あの神獣の知識を伝えるために」

護堂「（迷い）エリカ……」

エリカ「（耳元でささやき）武器が多くて困ることはないはずよ」

護堂「そう、か……。（決意しかけている）勝つためだもんな……」

エリカ「ええ。あなたの勝利のために、わたしの唇を捧ささげてあ

げる。だから、必ずあの怪物を蹴散らして、カンピオーネの力を証明して。お願い……」

護堂「ああ。絶対にやつを倒——（いきなり冷静に）ちょっと待て。考えてみたら、あのムカデ、日本の神様だぞ」

エリカ「（微笑ほほえみ）そうらしいわね」

護堂「どんな神様かリリアナはさっき霊視してたけど、エリカはあれできないよな？　おまえ、あのムカデのこと、くわしく知らないんじゃないか!?」

エリカ「まあ鋭い。さすがはわたしの愛する人だわ」

護堂「俺をだますつもりだったな!?」

エリカ「（にっこり）状況を利用するつもりだったと、言ってほしいわね」

　ＳＥ：怪獣の吠え声

護堂「ムカデも近くにいるみたいだな……。面倒な状況なのに変なことしやがって」

エリカ「そう？　わたしはちっとも面倒だと思わないけど」

護堂「作戦でもあるのか？」

エリカ「ええ、こうすればいいだけよ。聞いて——」

　ＳＥ：エリカの説明を途中からかき消すように、怪獣の吠え声

護堂「（意表を突かれて）その手があったか」

□すっかり夜の地上

　祐理、リリアナ、恵那、甘粕が地下に落ちたふたりを案じている。

恵那「王様とエリカさんが地下に落ちてから、もう二〇分経つよ」

リリアナ「わたしたちも穴に降りて捜索しよう」

甘粕「二重遭難の危険があります。やめた方がいいですって」

祐理「おふたりとも、無事だとよいのですが……」

　エリカがひとりだけひょっこりもどってくる。

エリカ「みんな、ここにいたのね。よかったわ、すぐに見つけられて」

リリアナ「エリカ！　あなたひとりか？　草薙護堂はいっしょじゃないのか!?」

エリカ「落ちたときはいっしょだったけど、途中で別行動にしたの。ねえ甘粕さん、さっき言ってたあれだけど」

甘粕「峠の釜飯ですか？」

エリカ「ええ。おなかもすいたし、みんなで食べにいきましょう？」

祐理「エリカさん！　護堂さんはまだ地下にいらっしゃるんですよ！」

エリカ「だからよ。だからできるだけ早く、この山を離れなきゃいけないの」

恵那「……地面の下から、変な音が聞こえるよ……これ、もしかして王様の仕し業わざ？」

エリカ「でしょうね。さすが護堂。ブレーキをはずしてあげたら、あっというまに戦いを最終局面に持ちこんだんだわ」

　ＳＥ：怪獣の咆哮、たてつづけの爆発音、金属音などなど派手に戦っている感じの音が、遠くからひびいてくるように

祐理「ブレーキをはずした……？」

エリカ「あの人に言ってあげたのよ」

　地下でのエリカと護堂の会話をプレイバック。声にエフェクト加わる。

エリカ「要は護堂がね、あとのことを気にせず、好きに暴れればいいのよ」

護堂「こんなところで派手にやったら、生き埋めになるぞ!?」

エリカ「なっても死にはしないわ、あなたのことだから。もちろんわたしたちは無理だから、地上で待機。あとで生き埋めになった護堂を探して、掘り出してあげる。だから、思う存分やってきなさい」

護堂「埋まるのは俺だからって無茶言うよ……。でも、その手があったか」

　現在にもどる。

リリアナ「そんな無茶な。いくらカンピオーネでも迷宮まがいの地下道で生き埋めになれば、命の保証は……（ないとは言えず）ありそうだな……」

恵那「あるよ。あるある。王様だもん、絶対死なないって」

エリカ「あとは魔術で護堂の居場所を確認すれば、無事に掘り出せるはずよ」

祐理「そう言われると、成功率はすごく高そうな気がしますが……いいんでしょうか？」

甘粕「ふつうの人が相手なら、絶対ダメでしょうけど」

　ＳＥ：怪獣の咆哮

甘粕「神様も殺しちゃう大魔王さまですし、いいんじゃないですかね」

□地下、護堂VS巨大ムカデ

　ＳＥ：ひときわ激しい怪獣の咆哮

護堂「いいかげん地下を駆けずりまわるのに飽あきてるんだ。この辺でおしまいにさせてもらうぞ……。我わがもとに来きたれ、勝利のために。不死の太陽よ、輝ける駿しゅん馬めを遣つかわし給たまえ。駿足にして霊妙なる馬よ、汝なんじの主あるじたる光輪を疾とく運べ！」

　ＳＥ：クワッという感じの発射音っぽい音

□峠道を猛スピードで走る甘粕の車

　ＳＥ：激しい車の駆動音

甘粕「ひとまずムカデの山は出ましたが、向こうはどうなりました？」

リリアナ「悪い報しらせだ。夜八時なのに空が明るい」

恵那「うん。東の空に太陽が昇ってきてるよ」

エリカ「もちろん太陽じゃなくて、ウルスラグナの化身のひとつ、白馬だけど……ほんと日の出みたいで美しいわよね。見てるだけなら」

祐理「（天に祈るように）民衆を苦しめる大罪人のみに使える、炎の化身が……また地上に降りかかるのですね……」

恵那「あのムカデ、あちこちで悪さしてたから。ちょうどよかったんだろうねー」

甘粕「でも、地上に太陽のフレアを落とすみたいな荒技、火力強すぎじゃないですかね？鶏にわとりをさばくのにブルドーザー使うくらいの過か剰じよう武装ですよ」

　ＳＥ：ぴかーっと光線が空を走る感じの音

甘粕「東の空から西へと天あま翔かける白馬が、輝ける太陽を運ぶ。この伝でん承しよう、西はイギリスから東はこの日本まで、世界各地に伝わっています。太陽の馬のモチーフを広めたのがインド・ヨーロッパ語族の民族移動であることは、知る人ぞ知る話です。……あ、このあたりのうんちくを聞きたくない方は、早送りで

対応していただければ幸いといいますか……」

恵那「甘粕さん、何言ってんの？」

甘粕「ちょっとした現実逃避ですよ。でもね、今だけはいやな現実から目を背そむけたっていいじゃないですか。この後始末、私たちの仕事なんですから……」

エリカ「事件現場の閉へい鎖さ、真実の隠蔽、偽にせ情報の捏ねつ造ぞう・発表……正史編纂委員会はやること多いものね。そこは同情しているわ」

　ＳＥ：超盛大な爆発音

恵那「うわー！　派手に吹きとんだよ！」

祐理「山の三分の一……いえ、半分は爆発で消滅したようです……（護堂の身を案じて）護堂さん、どうかご無事で」

エリカ「大丈夫よ。たぶん……いいえ、まちがいなく無事だから」

祐理「わ、私も心の底ではきっとそうかもと感じているんですが、さすがに口に出してはいけないと思いますっ」

恵那「いいんだよ、祐理。そういう人なんだから」

祐理「でも！」

恵那「いいのいいの。（にんまり）やっぱり、こうでなくっちゃ王様じゃないよね！」

リリアナ「ずいぶんうれしそうだな……」

恵那「だってさ。こういうのドキドキしない？　ここまで恵那のこと退屈させてくれない人、王様くらいだと思うな。さすが恵那の旦だん那な様！」

エリカ「常識のある穏和な人間、だったかしら。ほんと護堂って、言うこととやることが正反対よね」

□リリアナのモノローグ調ナレーション

リリアナ「以後の出来事は、それほど重要ではないだろう」

リリアナ「大ムカデはもちろん白馬の炎で灰となった。あれがひそんでいた山も半分ほど吹きとび、大きく地形を変えた。だが、カンピオーネが本気で戦ったあとの被害としては、むしろ軽微なのかもしれない」

リリアナ「生き埋めになった草薙護堂も、われわれの力で救出することができた。彼は当然のように無傷で、わたしたちと再会するなり『死ぬかと思った』と発言した。たぶん思っただけで、死の危険を感じたことは一瞬たりともなかったはずだ」

リリアナ「とにかく、この事件から、みんなに学んでほしい」

リリアナ「カンピオーネは神々の宿敵。われわれ人類を代表して、『まつろわぬ神』と決戦する戦士。だが、彼らは決して人類の守護者ではない」

リリアナ「彼らは荒ぶる魔王。あらゆる災厄とひとつまみの希望をまとめて収めた、パンドラの箱。草薙護堂は、そのことを非常にわかりやすく教えてくれる存在である」

第９話　神殺し、霧の都に集う

1

　渺びょう々びょうたる荒野を風が吹きすさぶ。

　全てが乾いていた。大気にも大地にも潤うるおいはない。

　乾ききった強風によって、黄色い砂が絶えず宙に巻きあげられていく。見わたすかぎり、荒れ野と岩山のみが延々と続く土地であった。

　ただし、それは並の人間であればの話。

　息でも吸うように千せん里り眼がんを操る羅ら翠すい蓮れんならば、百里ほど先にある貧しい人里の情景を今すぐ眺めることも可能だった。

　尚なお、清しん国こくの南方は春も間近だというのに、吹きゆく風がひどく冷たい。

しかし、当たり前だろう。

清国に数あま多たある山々——そのほとんどの頂いただきよりも、今いる西蔵チベットの地は高みに位置しているのだから。

「このような荒れ野で、ひとり入にゅう滅めつの時を待つとは」

羅翠蓮は旧知の人物に声をかけた。

「鉄てつ輪りん王おう、いかにもあなたらしい趣向です」

「人は所しょ詮せん、体ひとつで生まれてくるもの」

しゃがれ声で答えたのは老人だった。

「ならば、最さい期ごの時も我わが身ひとつがあれば十分……。どのみち、長き輪りん廻ねの旅に出向く途上にござれば」

老人は岩に腰かけ、黄色い袈け裟さをたった一枚だけまとう。

ボロ布同然の衣ころもだが、高僧の証あかしである。

それだけが限界まで痩やせ細った体をつつむ衣類であった。

草ぞう履りさえもはいていない。荒涼とした大地と同じほど肌はかさつき、髑しゃれ髏こうべさながらに顔の肉も落ちてしまった。

ほとんど骨と皮だけという老人の寿じゅ命みようは尽きかけており、座して死を待つだけだ。

彼はここ西蔵チベットの地が生んだ有う徳とくの名僧であり、なにより武芸の達人だった。

入神の域に達した彼をしのぐ者は人界にほとんどいない。もちろ

ん、〝武ぶ林りんの至し尊そん〟羅翠蓮は唯ゆいーいつに近い例外であったが。

「教主殿。思えば、御おん身みとの間にはいくつもの順じゅん縁えんと逆ぎやく縁えんがござった」

「たしかに。わたくしは中華武林を代表する正派の門もん主しゅとして、あなたは西域武林に君くん臨りんする大だい盟めい主しゅとして——」

過去の騒乱をいくつか思い出して、羅翠蓮はつぶやく。

「幾度か拳こぶしを交え、ときに手を結ぶこともありました」

「はははは。拙せつ僧そうごときの武芸では、とても御身にはかなわなかったが」

羅翠蓮はいまでこそ五ご嶽がく聖せい教きようの教主であり、中華武林の頂点でもある。

しかし、かつてはあくまで一門派をすべる総そう帥すいにすぎな

かった。

　彼女の《飛ひ鳳ほう門もん》は女によ人にんにのみ入門を許す正派武術の名門だが、武林の主流派だったとは決して言えない。

　だが、羅翠蓮には何人もおよばぬ武ぶ功こうと威い徳とくがあった。

　なにより神々から奪い取った数々の『権けん能のう』——いかなる修行でも身につかない神しん功こうという切り札があった。武林の英雄豪ごう傑けつたちはいつしか羅翠蓮こそを至尊の達人と仰あおぎ見るようになり、唯一無二の『王』として忠誠を捧ささげたのである。

　それが今から十余年前。

　思えば、鉄輪王と最後に会ったのもその頃だ。羅翠蓮はうなずいた。

「ええ。その奇縁があればこそ参ったのです。息絶える前に一目会いたいというあなたからの便りに応こたえるため、蓬ほう萊らい島とうの庵いおりを離れて」

淡々と告げる羅翠蓮だが、決して旅支度ではない。

ゆったりとした漢かん服ぷくという、いつもどおりの格好だ。清国の南海に浮かぶ孤島から西蔵チベットへの長旅も、方ほう術じゅつまできわめた彼女にとっては〝ちょっと隣の町まで〟出かけるのと大差ない外出なのである。

「では奇縁ついでに……もうひとつお願いをよろしいか？」

「このわたくしに？」

「御身でなければ、まずなしえないことなれば」

「うかがいましょう。西さい域いき武林の鉄輪王に二言なし。わたくしもよく知っております」

老僧の言葉を聞いて、羅翠蓮は即座に言った。

これが聖教の配下などであれば僭せん越えつ甚はなはだしいと叱しかりつけ、かすかな吐と息いきを魔風に変えて、空の彼方かなたへ吹き飛ばすところだ。

すると鉄輪王は合がつ掌しようし、真しん摯しな礼を口にした。

「かたじけない。実は西洋の者ども……イギリス人が関かかわっておる」

「あの者たち、中華の版はん図とのみならず、西蔵の地にまで入り

こんでいるのですか」

　羅翠蓮はかすかに眉まゆをひそめた。

　清朝の名君、第六代皇帝・乾けん隆りゅう帝ていの治世。その終わり頃に彼女は生まれた。

　それから優に六、七十年は過ぎている。

　羅翠蓮の容姿は花盛りであった乙女の頃と、まったく変わらない。だが、清国の情勢は大いに乱れ、坂を転げ落ちるように荒廃してしまった。

　西洋、特に英イ吉ギ利リ国スがその元凶である。

　かの国から密輸される阿ア片ヘンを排除しようとして、清国は貿易を取りやめた。

　が、これをよしとしないイギリスとの間にいくさが起こり、敗北。交易の再開。結果、清国のいたるところで阿片中毒者があふれかえるようになった。

　あれから十年以上が経たち、清国は衰すい退たいする一方だ。

　もはや広い国土を治める力はなく、南方ではついに太たい平へい天てん国ごくなる輩やからが乱を起こした。

　今、清国は――否いな、中華の地は麻あさのごとき乱世なのである。

　しかし、だからといって、羅翠蓮は俗人のごとく『英国に報復の刃やいばを』などとは短絡的に考えない。そのような意欲は毛ほどもない。

「わたくしは武林と聖教の頂点に立つ者。国の衰亡などという俗事にかかわるつもりはございません」

　絶大すぎる権能を持つがゆえに、そっと冷淡につぶやく。

「あなたがもし〝そういうこと〟を望むのであれば、せっかくの末まつ期ごの願いが無駄に終わってしまいます。承知の上ですか？」

「無論。天下の羅ら教主にそのような非礼はせぬ」

　鉄輪王は骨と皮だけの顔に微苦笑を浮かべて、おもむろに言った。

「拙僧が御身に託たくしたいのは――盗まれた神しん宝ぽうの後始末だ」

「神宝」

　俗世をきらう羅翠蓮が隠いん棲せいの地として選んだのは、南海の孤島。

　かの地を離れて、今は遥はるかなるチベット高原の荒野にいる。そして、次なる異境に彼女をいざなう物語のはじまりであった。

2

「デヤン。妙なうわさを耳にしたんだが」

「ほう。事情通の君がわざわざ私に報告したがるほどのうわさか」

　若きジェラール子し爵しやくに言われて、彼はつぶやいた。

　彼もまた『侯こう爵しやく』の称号を持つ男だった。

　ただし、貴族の血筋というだけで、自動的に相続した地位ではない。今から百年以上も前、自みずからの力と意志と才覚のみで——無理矢理に強奪した〝戦果〟である。

　とはいえ、そのような果か敢かんさをうわべに出すほど素直でもない。

　冷静沈着かつ理性的な人間と見られることを彼は好んだし、事実、ほとんど常にそういう印象を他人に抱かせてきた。

　デヤンスタール・ヴォバン。それが彼の名前である。

　一方、良血にふさわしい温厚さを持つ二三歳のジェラール子爵は言う。

「なにしろ君についての話だからね」

　若き子爵はふざけた調子でウインクしてみせた。

「ここロンドンに滞在するバルカンからの客人、僕の友人でもあるデヤンスタール・ヴォバン氏が——バッキンガムの宮殿を無遠慮に訪ねるのみならず、われらが女王ヴィクトリア陛へい下かの寝室にまで堂々と押し入ったという……」

「ああ、あれか」

「ヴォバン氏は持ち前のユーモア精神を発揮して、興きよう趣しゆに富むおしゃべりを披ひ露ろうしてくれたらしいが……残念ながら、女王陛下が気に入られることはなかったとかで」

「彼女はもっと長く平常心を保てるよう、努力すべきだな」

やや冗談めかして、ヴォバンはコメントした。

いかなる老人もおよばぬほど長く生きた彼だが、外見はおそろしく若い。

他人からはいつも二十代後半だと思われる。そして、秀ひいでた額ひたいに撫なでつけた銀髪、憂ゆう鬱うつそうな顔つきという風ふう貌ぼうには孤高の影が常につきまとう。

ジェラール子爵もそうだが、ヴォバンも上流紳士のいでたちだ。

すなわち黒いフロックコート、白シャツと蝶ネクタイ、シルクハット、ステッキなど。

しかし、ヴォバンの言葉はむしろ非紳士的であった。

「まあ、私も配慮が足らなかったとは言えるがね。女王の御ご前ぜんで予告もなしにいきなり狼おおかみから人の姿へもどるのは――少々ぶしつけだったかもしれない」

「少々ねえ」

「私自身と彼女の退屈しのぎになれば……その出来心が裏目に出てしまった」

「やあ、傲ごう慢まんと暴ぼう虐ぎゃくの申し子よ。それでこそ君だよ、デヤン」

温厚な御おん曹ぞう司しのくせに、若きジェラールは物騒な口を利きいた。

「われら魔道の徒が崇あがめる魔術師の王ロード・オブ・メイガス、最強の魔王どの。英国の貴族としてはいろいろ言いたいこともあるが、魔の探求者としては実に心強い」

二三歳の子爵は実のところ魔術師でもある。

若さゆえか性格ゆえかは不明だが、あまり物もの怖おじしない。『魔王』の呼び名も高いヴォバンに対しても、独特のなれなれしさで接してくる。

そこを気に入って、ここ二年ほど重用している男だった。

やはり、恐怖で震えるばかりの配下にかこまれるだけでは物足りない。また術者としては小物だが、性格のおかげか情報を集めてくるのが妙に上う手まい若者なのだ。

ちなみに——。

ふたりがいるのはロンドン郊外のクリスタル・パレスである。

一八五一年、英国の首都ロンドンで開催された万国博覧会。その会場として設営した『ガラス造りの即席プレハブ宮殿』を郊外の丘に移築させて、娯楽施設テーマパークに変えたという場所だった。決して安い入場料ではないが、一般にも開放されている。

広壮な建造物の天てん井じようと外壁はおおむねガラス張りだった。

きらきらして見み栄ばえがいいだけではない。ロンドンにしては珍しく晴天の今日。二月下旬の日差しが燦さん々さんとクリスタル・パレスの屋内に降りそそいでいる。

透明なガラスの建物という特徴のおかげである。

一種の巨大温室であり、そして博物館でもあった。世界各国の文物や芸術品、植物などを施設内では展示している。

まだパレス開園から数年しか経たっていない。

今日も珍しいもの好きの見物客で、それなりににぎわっていた。

「それでデヤン。今日はなぜ、僕を呼び出したのかな？」

「私以外についてのうわさ話を聞こうと思ってね。三日前、私に——このヴォバンに決闘状を送ってきた者がいる。ブレナン卿きようとかいう男だ」

「君との決闘を望む男だって？　なんて愚おろかなやつだ！」

バカにするようにつぶやいてから、ジェラール子爵はすこし考えこんだ。

その真剣な顔つきを見て、ヴォバンが吠ほえるように笑う。

「ほう。すると、その男はただの身の程知らずではないということか？　それはありがたい話だな。くわしく教えてくれ給たまえ」

「ありがたい、だって？」

「ああ。ヴォバンの権威にたてつく男——できれば、私に比ひ肩けんする力の持ち主であってほしいと切に思うのだよ。そうでなくては」

　ヴォバンはにやりと唇くちびるの端をゆがめた。

「つぶし甲が斐いがない」

「さて。ご希望に応こたえられるかは不明だな」

　獰どう猛もうな狼の微笑を前にして、ジェラール子爵は苦笑いした。

「三カ月前、チベットの奥地で発見され、イギリスに持ち帰られた魔術の道具をブレナン卿が入手した——そのように聞いている」

「道具頼みということか」

「ただ、そいつがすこし曲くせ者ものでね。なんでも持ち主にヴァジュラ・バイラヴァという東洋の軍神にまつわる力を授ける……聖なる武具らしい」

「ほう」

「その武具、トリシューラみたいな名前でも呼ばれていた気がするな。持ち主は神の雷いかずちを意のままに操れるようになるとも聞いた」

　解説してから、事情通の若者は肩をすくめる。

「が、真しん偽ぎはさだかならず。過度の期待は持つべきじゃないと忠告をしてもいいかな、我わが親愛なる侯爵閣かつ下かに」

「かまわんよ。覚えておく気はまったくないが」

　まあ、これも退屈しのぎのひとつ。

　ヴォバンはぶしつけな挑戦に応じてみる気分になっていた。

　時は一九世紀のなかば頃――。大英帝国は国家として最盛期を迎えつつある。彼がその首都ロンドンに居を移してから、すでに二年。

　気まぐれに転居した〝霧きりの都〟での暮らしは、ほどほどに刺激的ではあった。

　だが、それもいいかげんにうすれつつある。デヤンスタール・ヴォバンは常に新たな愉たのしみを求める男なのだ。

　そして、同日の同時刻。

　彼がロンドン郊外のハムステッド・ヒースに所有する邸宅で、ひとりの少女がやる気の焔ほのおをめらめらと燃やしていたのだが。

　魔王であっても千せん里り眼がんの神通力は持たないヴォバン侯爵。

　当然、そのことを知るよしもなかった。

「今日から新しいお屋敷で、新しいお仕事のはじまりだわ」

　緑の芝生がまぶしい大邸宅の庭園。

　そこに少女はひとりたたずみ、ぐっと拳こぶしをにぎりしめる。

　身につける衣装はメイドの制服だった。黒と白のエプロンドレスに袖そでを通し、頭にはカチューシャを付けている。

「しっかりがんばって、お給金を奮ふん発ぱつしてもらわなくっちゃ」

　尚なお、彼女は白色人種ではない。

　大英帝国の植民地のひとつインドで生まれ、のちに英国本土へ移住した。

　ゆえに肌は褐かつ色しよく――。ロンドンでは目立つ風ふう貌ぼうである。そんな彼女は幼少の頃からメイドの職に従事してきた。が、主人が病びよう没ぼつしたのを機にふたたび国外へ出た。

そのまま旅を続けること、数カ月。

ようやく帰国した彼女は心機一転して、新しい勤め先を見つけたのである。

国外生まれの怪あやしげなメイドよりも英国人女性を雇いたがる上流階級は多く、働き口を見つけるのになかなか苦労した。

しかし、この屋敷の主人はそんな些さ事じにこだわらない大人物だという。

その方のためにもしっかり働こう。

心に誓う彼女の名はアイーシャ。のちに『永遠の美少女』ともささやかれる魔ま性しようの貴婦人そのひとであった。

3

ロンドンの夜よ闇やみは深く、重い。

たしかに、たくさんのガス灯が街路のあちこちに立っている。

産業革命の起点、工業の中心地たる大帝国の首都ならではの光景だろう。

しかし、細長い柱の頂点に取りつけられたガラスケースの内部で燃える焔ほのおは小さく、ささやかなものだ。光量もたかが知れている。

さらに、ロンドンには異様なほどの煙霧スモツグが立ちこめている。

イギリスを世界最大の帝国たらしめた機械産業の発達——その原動力となった蒸気機関は大量の石炭を燃やすことで稼か働どうする。

さらに、一般の家庭でも暖炉に薪まきをくべ、火をおこす。

家々や工場、機関車の煙突は一日も休まずにもくもくと黒煙を噴

きあげる。

　結果、ロンドン市内にわだかまった煙に冬場の濃のう霧むが加わって、名高い『霧きりの都』が誕生するのである。

　スモッグまじりの夜を煌こう々こうと照らすには、数万のガス灯といえども力不足だった。

　ヴォバンはこの闇の深さとうす汚さが好きだった。

「ふっ」

　ただ夜の街にいるだけで、自然と口元がほころぶ。

　かつて太陽神アポロンを葬ほうむり、〝闇と大地の獣けもの〟である狼おおかみの権けん能のうを簒さん奪だつしたヴォバンにとって、夜の暗黒は重厚なほど心地よい。

　しかも、今夜はとりわけ冷えこんでいる。

　そぞろ歩きをする者もほどんどいない。人と馬車がおびただしいほどにあふれかえる大都市ならではの喧けん噪そう——日中の情景がウソのように静かだった。

　その静せい寂じやくさえも愉たのしむヴォバンの前に、ひとりの紳士が歩みよってきた。

「侯こう爵しやく閣かつ下か……わざわざのお越し、痛みいりますな」

「ふむ。君がブレナン卿きようか」

　ふたりが待ち合わせた場所は『ロンドン橋』だった。

　テムズ川に架かかる石造りの橋だ。堅けん牢ろうなだけでなく、巨大でもある。

　その長さは実に三一〇ヤード（約二八二メートル）。幅だけでも一七ヤード（約一五メートル）という建築物であった。

　ちなみに、有名なマザーグースの童謡『ロンドン橋落ちた』。

　ああいう歌が生まれるほど、ロンドン橋は崩落しやすい木造の橋

だった。それもあって、二十数年前に建てなおし、現在の石橋となったのである。

　幸い、それ以降はまだ一度も落ちていない。

「君が手紙で送ってきた決闘の口こう上じよう、なんだったかな？」

　くくっと、ヴォバンは小さく嘲ちよう笑しようした。

「すまないな。目を通しはしたんだが、あまり私の感かん銘めいを誘う内容ではなかったのでね。すっかり頭から抜け落ちてしまった」

「ならば再度申し上げましょう、魔術師の王ロード・オブ・メイガスよ」

　ブレナン卿は初老だった。五十代というところだろう。

　そして巨体だ。背せ丈たけは六フィート（約一八〇センチ）と、ヴォバンと大差ない。が、でっぷり太っているため、横幅は三倍以上ある。

　身につけたフロックコートやシャツはパンパンにふくれあがっていた。

「侯爵閣下。もし魔王の称号に最も近い者が地上にいるとすれば、それはまちがいなくあなたでしょう。だが、訂正すべきご発言があまりに多すぎる」

「ふむ、たとえば？」

「神を殺あやめたなどという妄もう言げん、今も殺めるに値あたいする『まつろわぬ神』を探し求めているという大言、己おのれを掣せい肘ちゆうしうる人間など地上にいないなどという世よ迷まい言ごと」

「全て本当のことなのだがね」

「はははは。バカを言ってはいけません」

　太たい鼓こ腹ばらをぶるぶる波打たせて、ブレナン卿は失笑し

た。

「わたしはね、この目で見たことがあるのですよ」

「何をだ？」

「地上に降こう臨りんした神――まつろわぬ神の姿と、その権能を」

「…………」

「あれは実にすさまじく、強壮で、人間ごときの手に負えるものではない。だというのに、あなたはあんな途方もないものに勝利したと豪語する」

　話にならないとばかりに、肥満過多の魔術師はかぶりを振る。

「神殺しの偉業を為しうる者がいるとすれば、それは同格の神々のみ。侯爵閣下はたしかに強大無比な魔術師であられるが、やはり人間の身には限界というものがある。なればこそ決闘を挑むのです」

　魔術の基礎も学んだことがない元浮浪児を『魔術師』だと誤解している。

　ブレナン卿という男、なんとも見る目がない。しかし、嘲あざけりの感情をひとまず抑おさえ、ヴォバンは紳士的に言う。

「なるほど。君が私に勝てば、このヴォバンも哀あわれな人の子であると――」

「はい。証明できたことになりましょう」

　今、ロンドン橋の上にはヴォバンとブレナン卿しかいない。

　昼間は行きかう通行人と馬車で、しょっちゅう大渋滞が起きている。

　だが、骨まで凍こごえる霧の夜に出歩く物好きはいないようだ。あるいは、ブレナン卿が人払いの術でも使ったか。

　ヴォバンはだだっ広いロンドン橋を見まわしつつ、鼻で笑った。

　たまにいるのだ。生なま半はん可かな知恵と知識を頭のなかでこ

ねくりまわして、ヴォバンたち〝神殺し〟の存在を否定したがる輩やからが。そのような者をいたぶって悦えつに入いるような趣味、持ち合わせてはいないのだが——今回は特別だ。

　決闘相手が小物にすぎるという不満は、たしかにある。

　が、一夜の遊びと思えば十分に許容範囲内。ヴォバンは催促した。

「ではブレナン卿。君が苦心して入手したという切り札、そろそろ見せてもらおうか」

「おや。お耳に入っておりましたか」

「この話がなければ、招待を無視していたところだ。君は運のいい男だな……いや。むしろ悪いと言うべきかもしれんが」

「いえいえ。閣下との対決の機会がそれで得られたのであれば」

　身の程知らずの挑戦者はにんまりと笑う。

「やはり幸運なのでしょう！」

　ブレナン卿の右手にいきなり鉄製の武器が現れた。

　召喚の魔術で呼びよせたのだ。欧おう州しゆうの地では非常に珍しい品だった。しかし、世界を股またにかけて旅してきたヴォバンには——わかる。

　短い鋼鉄製の棒である。長さは一フィート（約三〇センチ）ほど。

　棒の両端は三つ叉またに分かれ、しかも鋭く尖とがらせてある。まるでフォークのようだ。東洋の法ほう力りき僧そうが好んで使う武器『金こん剛ごう杵しよ（vajra）』であった。

　先端が三つ叉のものは、特に三さん鈷こ杵しよ

“

”

three-pronged vajra と呼ばれるらしい。

一応、武器ではある。が、むしろ宗教儀礼で使われる法具の性質が強い。

「なるほど。それが神の武具とやらか」

ヴォバンはうなずいた。

チベット高原の由ゆい緒しよある僧院よりイギリス人探検家が〝持ち帰った〟という品。それを破格の値でブレナン卿が買い取ったという。

一流ではあっても、人間の魔術師にすぎないブレナン卿。

彼にヴォバンへの挑戦を決意させるほどの力を宿しているのであれば、あるいは――。

「覚醒せよ、金剛三鈷杵！ Om Vajra tishtha Hum!」

ブレナン卿がいきなり言こと霊だまを唱えた。

すると三鈷杵より――激しい稲妻がヴォバンめがけてほとばしった。

「ほう」

ヴォバンは淡々とつぶやいた。

労働者階級の庶しよ民みんが集まって暮らすような安アパートメントなら、この雷撃が生み出す衝撃だけできれいに吹き飛ばされていただろう。そして、残った建材にはめらめらと火がついて、そのまま家屋全焼という惨事になるのだ。

しかし、神殺しの肉体は〝神力・魔術への強きよう靭じんすぎる

抵抗力〟を持つ。

　それを破るほどの威力、今の稲妻にはなかった。狼おおかみ王おうの肉体にぶち当たるなり、電光も熱も衝撃も全てがかき消えてしまう。

　にもかかわらず、ヴォバンは目を細めた。たしかに力不足は甚はなはだしい。

　しかし、金剛三鈷杵とやらが秘めた潜在能力——その片へん鱗りんをかすかに感じ取っていた。

「ははははは！　それで終わりのはずがないだろう！」

　猛たけ々だけしい獣けものの貌かおでヴォバンは哄こう笑しようする。

「もっとだ。もっと力を振りしぼれ。おまえの存在と魂たましいの全てを懸かけて、このヴォバンに渾こん身しんの一撃をたたき込んでみるがいい！」

「閣下に言われるまでもない。そのつもりですとも！」

　叫びかえすブレナン卿。あからさまにあせっていた。

　だが、それでも人間の魔術師としては賞賛すべき量の呪じゆ力りよくを金剛三鈷杵に注ぎこむあたり、やはり彼は達人級の使い手なのだろう。

　金剛三鈷杵から雷撃がふたたびほとばしり、ヴォバンを襲う。

　しかも一度だけではない。すぐに二発目がやってきた。さらに三発目、四発目とたてつづけに電光が放たれる。しかし。

　神殺しの肉体はその全てをあっさり、無造作に消滅させてしまう。

　魔術師はついに呆ぼう然ぜんと息を呑のみ、肥満のせいでたるんだ顔が蒼そう白はくになる。

　思い出しているのかもしれない。かつて『まつろわぬ神』と遭遇し、絶望的すぎる力の差を見せつけられて、打ちのめされた日のこ

とを。

「それでは足りないのだよ、ブレナン卿」

　このままではいけないと思い直し、ヴォバンは指し南なんすることにした。

　闘志を抑えて、冷静な声で語りかける。

「君ごときが呪力をいかに振りしぼろうと、この私に通用するほどの雷は作り出せない。たとえ神具——神に由ゆ来らいする稀き代たいの宝物があったとしてもだ」

「く……っ！」

　決闘相手からのアドバイスが闘志にふたたび火をつけたのか。

　ブレナン卿は忌いま々いましげに歯は噛がみして、五発目の電光を放つ。それを手の一振りでかき消してから、教壇に立つ師のごとくヴォバンは言う。

「その限界を超える方法がある。命を削けずり給たまえ」

「!?」

「死すべき人間の肉体が蓄たくわえられる呪力など、神々が流す涙の一滴にもかなわないが……それでも残りの寿じゆ命みようをほとんど失うほどに魂を燃焼させれば、すこしはマシになる」

「何をバカげたことを！」

「しかし君、考えてもみるがいい。このままヴォバンを打倒できなければ、どのみち君を待つものは死——いや、むごたらしい死だけだぞ」

　ヴォバンの忠告はどこまでも理知的で、しかも冷然としていた。

　挑発をする気も勝ち誇るつもりもない。この決闘をただ存分に愉しみたい。それ以外の何も考えないまま、恬てん淡たんと告げる。

「せめて、すこしでも誇りある死に方を選ぶべきだと思うのだが。どうだ？」

「おのれ！」

　ついにブレナン卿が新たな動きを見せた。

　右手の金剛三鈷杵を己おのれの頭上に高々と放り投げたのである。チベット高原より来きたりし神具はそのまま天高くにまで舞いあがり――

　空中の一点でぴたりと静止。びりびり放電をはじめる。

　それはロンドン橋の上空に突とつ如じょ現れた、小さな恒星のようでもあった。

「……汝なんじ、死に至るまで忠実たれ。されば汝に命の冠かんむりをあたえん！」

　怒りと屈くつ辱じょくの念がこもった言霊。

　それは命を捧げるための聖せい句くだった。ブレナン卿の肉体から白い生命のオーラが立ちのぼり、上空の金剛三鈷杵に吸いこまれていく。

　でっぷり太った卿の肉体が見る間に瘦やせて――肉がしぼんでいった。

　それと反比例して、金剛三鈷杵の放電量はぐんぐん増大。ガス灯を百億本ほど集めたとしても到底かなわない光量で、ロンドンの闇は白く染めあげられた。

　ブレナン卿はプライドを捨て、忠告にしたがったのだ。

　大きすぎる力の差をすこしでも埋めるために。万にひとつの可能性に賭けるために。

　極大の電光をひきつれて、金剛三鈷杵がヴォバンの頭上に降ってくる。

「……昔話をしよう。たしか七年ほど前のことだ」

　天に右手をかざして、ヴォバンはささやいた。

　上空より迫りくる金剛三鈷杵と電光。雷らい霆ていというより隕

いん石せきめいた軌き跡せきでロンドン橋、そして神殺しの上に『ヒュンッ』と落ちてくる。

　その金剛三鈷杵を——ヴォバンは無造作につかみとってみせた。

　口元にふたたび、獰どう猛もうな獣の微笑を浮かべながら。

「あの頃、アジアを放浪していた私は三み柱はしらの神と出会った。それぞれ風と雨と雷を司つかさどるという三身一体の神々だった。あの連中が戯たわむれに降らせた稲妻の……そうだな、一割ほどの威力には達しているぞ、ブレナン卿！」

　本当は一割どころか、その半分も怪あやしいところだったが。

　あえてリップサービスをして、ほくそ笑む。金剛三鈷杵が宿していた電光は一瞬にして消滅していた。ヴォバンの右手に吸いこまれたのだ。

　スモッグまじりの夜闇を照らした極大の光はもうない。

　全身全霊を懸けた一撃が無駄に終わり、ブレナン卿は愕がく然ぜんとしている。

　一方、武具をもてあそびながら、ヴォバンはおだやかに言う。

「あの三神にどうにか勝利して、私は彼らの権能を奪い取った。やはり運が悪かったな。実は私も……稲妻のあつかいには少々慣れているのだよ」

　風と雲を呼び、豪雨を招き、雷霆を降らす。

　古代朝鮮の神々——風ふう伯はく・雨う師し・雷らい公こうより簒奪した『嵐』の権能である。

　いつのまにか、空に黒雲が立ちこめていた。ぽつぽつと雨粒が降りはじめ、あっというまに豪雨となってしまう。風も出てきた。

　さらに『ゴゥゥン！』『ゴゥゥン！』と重低音を響かせて、落雷がはじまる。

　嵐の夜の到来だった。

　風も雨も雷も、全てすぐには終わりそうもない。

　大都会の穢けがれた霧と闇を洗いながす、聖なる騒乱が幕を開けたのだ。

「この権能、ロンドンで使ったのは今夜がはじめてだ。しばらくご無ぶ沙さ汰ただったが、錆さびついてはいないようだな」

「ひいいいいいいっ⁉」

　ヴォバンの淡々としたつぶやきをよそに、絶叫がひびく。

　寿命と贅ぜい肉にくを失ったあげく、ブレナン卿は恐怖に身をすくませていた。

　ロンドン橋の上に次々と稲妻が落ちてくるからだろう。どれもさっきブレナン卿が放とうとした極大級の雷より——強烈だった。

　橋の建材である大理石は衝撃で打ちのめされ、抉えぐられ、揺さぶられる。

　堅牢かつ巨大な石造りの橋。だが、ひっきりなしに落ちてくる雷撃に蹂じゆう躙りんされて、まるでぐらぐら大風に揺れる吊り橋のようであった。

　その気になれば、テムズ川を大雨で氾はん濫らんさせることもできる。

　鉄砲水でロンドン橋を押し流す暴挙さえも容易だろう。

　だが、ヴォバンにその気はなかった。

　二、三時間ほど適当に風雨を呼んで、稲妻を落としていればいい——とだけ、ヴォバンは上空の雷雲に向けて念じた。

　自分はさっさとロンドン橋から立ち去っていく。

　足早に去る神殺しとは逆に、ブレナン卿は橋の上でへたりこんでいた。

　生命力のほとんどをさっき金剛三鈷杵に注ぎこんだため、歩く余力さえないのだ。いずれ落雷に呑みこまれ、吹き飛ばされてしまう

だろう。

　こんな小物を自みずからの手で始末するような趣味、ヴォバン侯爵にはない。

　ブレナン卿が生きるか死ぬか——。

　そんなことは彼自身の運にゆだねればいいのである。幸運の恩おん寵ちようがあれば、生きのびることもあるだろうと。

　無論、彼がそのあとでどんな末路を迎えようと、知ったことではなかった。

4

　後年、容姿の老いと共にデヤンスタール・ヴォバンの偏へん屈くつさ・狷けん介かいさはすこしずつ量を重ねていく。しかし、一九世紀の頃はまだ若じやつ干かん名めいの友人たちとつきあい、時に魔王の重厚さを棚たな上あげするような悪いた戯ずら心ごころもしばしば発揮していた。

　やはり、彼もまだ若かったのである。

　とはいえ、のちのヴォバンと変わらない面も多々あった。

　そのひとつが住居の構え方だ。気まぐれに住すみ処かを変えることを好む彼は、ロンドン市内だけでも五つの仮住まいを確保していた。

　なかでも、いちばん上等な巣穴が今いる大邸宅だろう。

　所在地はハムステッド・ヒース。ロンドン中心部から北に離れた郊外、ハムステッド地区の広大な原野ヒースである。

　大工業都市のすぐ近くだというのに、緑と野や趣しゆにあふれる土地だった。

　広い手つかずの野原のなかに、森や湖なども点在している。この

一帯を見わたせる小高い丘に、ヴォバンの仮住まいは建っていた。

　広いだけでなく、やや過か剰じようなほどに洒落しやれた屋敷だ。

　外壁を涼やかな白色で塗りあげているので、遠目にも目立つ。スコットランド人の有名建築家が設計したらしい。

　べつにヴォバンの持ち家というわけではない。

　さる伯はく爵しやく家けが代々所有している物件だった。二年前、たまたま知り合った現当主に『住み処の用意』を依頼したところ、うやうやしく差し出されたのである。

　そして、ブレナン卿との決闘から数日後の昼すぎ。

　ヴォバンは屋敷の主あるじとして、図書室の椅い子すに腰かけていた。

　アルファベットすら満足に判読できなかった孤児は百五十年近くも生きる間に、数あま多たの言語を耳で聞きおぼえた。いまや読み書きにも一切不自由しない。だが、書棚に収まった書物への愛着は特に持たないヴォバンだった。

　しかし、図書室にただよう独特の静けさはきらいではない。

　たまに旅行記や数学書をひもといたりもする。逆にふれようとも思わないのが、誰かの妄もう想そうを書き散らしたにすぎない小説や魔術関係の文ぶん献けんである。

　まあ、前者についてはいずれ気まぐれに興味を抱くかもしれない。

　が、後者はヴォバンにとって、価値のないものだった。

「ジェラールはたしか、なんとかいう東洋の軍神にゆかりの品だと言っていた」

　図書室の机に、あの夜の神具――金こん剛ごう三さん鈷こ杵しよを置いてある。

　さらに、壁かべ際ぎわには三人の魔術師が〝王の相談役〟として

待機していた。

「誰か、私に説明できるか？」

『……ヴァジュラ・バイラヴァ。仏法の守護神。阿ア修ス羅ラの殺さく戮りく者しやにして鋼はがねの軍神。水牛の頭と三つ目、九きゅう面めん三さん十じゅう四よん臂ぴを持つ。名の意味は〝恐るべき金剛の神〟。漢字で大だい威い徳とく明みよう王おうとも書きあらわされる……』

「なるほどな」

三魔術師のひとりが答えるのを聞いて、ヴォバンはつぶやいた。

「結局、あの男ごときにはすぎた道具だったということか」

ブレナン卿きようもそこそこの実力者ではあった。

だが、ヴォバンの相談役たる三名とは比較にならない。いずれもグランドマスター級の魔術師として名を馳はせていた死者なのだ。

三人とも顔色が蒼そう白はくで、瞳どう孔こうも開いている。表情もうつろだ。

まさに死相であった。ただし、衣服はバラバラだ。

ひとりはヴォバンと同じ紳士の装よそおい。もうひとりは薄汚れた灰色のローブ。最後の三人目はボロボロにちぎれた修道服だった。

自みずから殺あやめた者の魂たましいを呪じゆ縛ばくして、己おのれに仕つかえる死霊・幽鬼として使し役えきする——。

権けん能のう『死せる従僕の檻おり』の力であった。この三人以外にも、死せる魔術師を幾人かブレーンとして確保してある。

だから、魔術の知識や関連書籍は必要ない。直じかに訊たずねればいい。

また三魔術師には、それぞれ〝生前の特技〟を活いかした研究なども行わせていた。

若くして死んだ元伯爵の妖精博士には、アストラル界の門を自在に開く方法の研究をさせている。かの領域に隠れ住む神々や神獣を訪ね歩くためだ。

霊れい視し力りよくにすぐれた占星術の元権威には、全ヨーロッパの命運に何か異常の兆きざしがあれば報告せよと命じて、常に天体の動きを監視させている。

また、グノーシス派の秘教知識に精通した元修道院長には『まつろわぬ神の招しよう聘へい』という最高難度の秘儀に取り組ませていた。

死せる従僕どものなかでも、三魔術師は特に有能といえる存在なのだ。

ともあれ、ヴォバンが彼らと共に図書室にこもっていたとき。

「昼のお食事をお持ちしました、御主人さま～」

ドアがこんこんとノックされた。

外から可か憐れんな声での呼びかけ。しかし、ヴォバンは無視した。

使用人には『鍵かぎがかかっていなければ勝手に入れ』と周知徹底させている。くだらない問答で時間を浪費するより、よほど理にかなっている。

いつものとおり勝手にドアが開き、メイドが入ってきた。

ティーセット一式とサンドイッチの皿を車輪付きのワゴンに載のせて、押している。

日常の食事のため、無駄に広い食堂までわざわざ出向く趣味はない。そのときの居場所に適当なものを運ばせ、さっさと食べ終える。それで十分だった。

気が向けば、ヴォバンはいくらでも健けん啖たん家かになれる。

しかし、美食家になる意欲は皆無だった。あれほど無意味な嗜し好こうはないとまで思う。



「あら？」

　若いメイドが目をみはった。視線の先には死せる三魔術師がいる。

　屋敷のなかで何を見ても動じるな。詮せん索さくするな。口外するな。職務を全まつとうせよ。これも執しつ事じに命じて、全使用人に徹底させている。

　尚なお、厳守できる者だけ雇こ用ようせよ、とも命じてある。

　それさえできれば素す性じようはどうでもいい。ただし守れない者は即刻解かい雇こ。余計なことを知ってしまった者は〝始末〟せよとも……。

「あらあら、まあまあ」

　褐かつ色しよくの肌のメイドは意味のないつぶやきを洩もらしていた。

　好奇心を丸出しにして、壁際の三魔術師をしげしげと凝ぎよう視しまでする。

　が、余よ所そ見みしながらもサンドイッチの皿を図書室の机に移し、ポットの紅茶をとぽとぽカップに注いでいた。

　なかなか器用な仕事ぶりである——いや。

　紅茶がティーカップと受け皿からあふれ出し、机の上にこぼれ出した。

　当然だろう。褐色のメイド少女はいつまでもポットをかたむけたままなのだから。

　ヴォバンは眉まゆをひそめて、例の三鈷杵をさっと取りあげた。

　べつに紅茶ごときが害をおよぼすはずもない。しかし、インド人らしきドジなメイドの粗そ相そうで無駄に濡ぬらすのは腹立たしかった。

　一方、ここでようやくメイドがハッと気づいた。ポットをあわて

て机に置く。

「も、申し訳ありませんっ。ちょっと失敗しちゃいました！」

「…………」

「ときどき、こういうことをやっちゃうんです。でも、ご安心くださいね～。これでもわたくし、メイドの仕事は大ベテランですから♪」

「…………」

「実はですね。こちらに雇われる前、こちらの執事さんと街でたまたま知り合いになったんです。で、お話をしているうちに御主人さまの話題になったんですよー」

「…………」

「自分の主人は気むずかしいから、せっかく雇った使用人をすぐクビにしなくちゃいけなくて困っている。今、深刻な人手不足なんだ～って頭をかかえてて」

「…………」

「そこでわたくしは言ったんです。『そういうことなら是ぜ非ひこのアイーシャを使ってください！』って。なんといっても即戦力ですしね！」

　自慢そうに胸を張って、メイド少女は朗ほがらかに言う。

　大ベテランだと名乗る割に若い。一六、七歳というところだろう。

　ちなみに向こうが勝手に話している間、ヴォバンはずっと仏ぶつ頂ちよう面づらだった。しかし、少女が気にかける様子はない。

　よほど剛ごう胆たんなのか、動じない性格なのか、鈍にぶいのか。全部という線もありうる。

　込みあげてきた苛いら立だちをヴォバンは意思の力で抑おさえ込んだ。

「あ、申し遅れました。わたくし、アイーシャと申します。よろしくお願いします～」

「…………」

　おまえも馘ク首ビだ。とっとと出ていけ。

　ずばり言い切ろうとして、ヴォバンはその言葉をぐっと呑のみこんだ。

　神すら殺あやめ、魔王とまで畏い怖ふされる。それがデヤンスタール・ヴォバンである。

　そんな男が一使用人の粗相に目くじらを立て、自ら解雇を言いわたすのは——さすがにちょっと滑こつ稽けいではないか。そんなことは執事や家か令れいの職分だ。

　また、そもそも。

　この女はなぜ、こうもなれなれしい口を利きける？

　雇用の際、執事は主の素性を隠しつつもその恐ろしさをさんざん語ったはずだ。

　言葉を交わしてはならない、目を合わせてもいけないといった注意事項も。なにより、この屋敷に張りつめる重苦しい空気が使用人を最大限に萎い縮しゆくさせるはず。

　しかし、彼女はお気楽に言う。

「どうかなさいましたか、御主人さま？」

「いや……」

　めったにないことだが、発すべき言葉を見失っていた。

　あのジェラール子し爵しやくも物もの怖おじしないとはいえ、心の奥底にはヴォバンへの恐怖心をひしひしとつのらせている。目を見ればわかる。自分を恐れる者の気配と匂におい、狼おおかみの嗅きゆう覚かくが嗅かぎそこねることは決してない。

　おそらく、頭の内側がよほどおめでたい女なのだろう。

　ヴォバンは黙然とかぶりを振った。

　まあ、いい。あとで執事に指示して、この少女を解雇させればいい。

　空気を読むという能力が先天的に欠けている鈍どん感かんメイドを身近に置いておくなど、言語道断な話だった。そう思い、肩をすくめたとき。

「ところで、そちらのお三方ですけど……どんな神様の力で甦よみがえったんですか？」

「！」

　出し抜けに少女に言われて、思わず瞠どう目もくした。

　が、もちろん驚きよう愕がくを表になど出さず、「ほう」と低くつぶやいた。

「これが神の力で為なされたことと、君にわかるのか？」

　メイドごときと言葉を交わしたのは、数十年ぶりかもしれない。

　対して、これが奇跡に近い会話などと知るよしもない褐色の少女はなんとも頭のゆるそうな笑顔で朗らかに言う。

「当たり前ですよー。人間が使った魔法か、神様の力で起こした奇跡かなんて、すぐに気づくことじゃないですかあ」

「同感だが、その『当たり前』に苦労する連中も珍しくない」

　神と神殺しは有史以前からの宿敵同士らしい。

　しかし、戦闘中ではない〝平常運転時の神殺し〟を一見しただけでは、彼らが内に秘めている権能と異常性を見抜くことはむずかしい。かなり腕の立つ魔術師であっても、不可能なはずだった。

　逆に、まつろわぬ神々の超常性はほとんど一目で見て取れる。

　だからだろう。ブレナン卿のようにヴォバンたち〝魔術師の王ロード・オブ・メイガス〟を見くびる者がたまにいる。目の前にいる魔王の力が神々に比ひ肩けんしうるものとはわからず、身の程知

らずの挑戦を仕掛けてきたりもする。

　一方、メイド少女は能天気に笑う。

「そうだったんですねー。やっぱり、この方々は御主人さまが呼ばれたんですか？」

　緊張感のない笑顔を前にして、ヴォバンは考える。

　ある水準以上の強度で権能を使えば、さすがに多くの魔術師がその凄せい絶ぜつさを悟る。数日前のブレナン卿がいい例だ。しかし、この図書室で静かに待機している亡者たちを一いち瞥べつしただけでヴォバンが神殺しだと見抜くとは――

　みごとな眼力だった。ぼそりとヴォバンはつぶやいた。

「どう見ても頭のなかが過か剰じようにぬるい粗そ忽こつな女だが、只ただ者ものではない……か」

「あ、あのう。失礼すぎる物思いが言葉になって、口から出てきちゃってますよっ。もっと紳士的なことをおっしゃってくださいな」

「騒ぐな。私は今、君との雇用関係について考えている」

「はあ……」

　この女、とてもそうは見えないが、魔道の素養があるらしい。

　何か思惑があって、この屋敷へ来たのだろうか。あのブレナン卿のように決闘でも挑いどむつもりで。あるいは、ヴォバン侯爵の秘密でも探り出そうとして。

　メイドの素性をあとで執事に報告させよう。

　そのうえでしばらく飼っておけばいい。ヴォバンはうなずいた。

　揉もめ事ごとを避けたいのなら、すぐに追い出すべきだろう。そう理性は告げている。さらに言えば、危機を察知する神殺しの勘かんも訴えていた。

　この女はどこかまずい。

いずれ洒落にならない揉め事の火種になりそうな――そんな気配をかすかに感じる。

だが、ヴォバンはそれらの危険信号をあっさり無視した。

危険そうだといって、その原因をすぐに排除する。

それではあまりに当たり前すぎる。最凶の魔王にして稀き代たいのひねくれ者であるヴォバンには、とても選べる道ではない。危ない遊びほど面白いのだ。

厄やつ介かい事ごとのタネが手元にあるのなら、逆にそれをもてあそぶのも一いつ興きようだろう。

……のちにデヤンスタール・ヴォバンはこのときの出来心をたっぷりと後悔し、思い出すたび舌打ちをするようになる。

あの女をあの場で即座に追い出していれば、と――。

しかし、さすがの彼といえども、この時点で予測できることではなかった。

5

羅ら翠すい蓮れんはきわめて浮き世離れした人物である。

俗世の町や都市で暮らすことはなく、他者と交わろうともしない。

しかも人間ではあるが、武術と方ほう術じゆつの道を極めつつある神殺し――。その力は山を抜き、気は世を覆おおうほどに隔かく

絶ぜつしている。

　もはや人というより、剣けん仙せん・女じよ仙せんに喩たとうべき存在だろう。

　とはいえ。

　生まれ落ちたときから、ずっとそうだったわけではない。

　彼女が俗世と縁を切ったのは、『武ぶ林りんの至し尊そん』となってからのことだ。

《飛ひ鳳ほう門もん》の総そう帥すいであった頃は名めい峰ほう・黄こう山ざんの奥深くに道場をかまえ、そこを門派の総本山としていた。まあ、門弟たちの指導は全て人まかせにして、総帥のくせにもっぱら自分自身の修行に専念していたのだが……。

　ときには山を下りて、一介の武ぶ侠きようとして各地を渡り歩くこともあった。

　また、羅翠蓮の生家は隊商の用心棒などを稼か業ぎようとする武芸者『鏢ひよう師し』の一族で、知る人ぞ知る武林の名門であった。

　彼女はそこで両親・兄たちにかこまれて育った。

（ちなみに、羅家はもともと自みずから商売をいとなむ交易商人の家系だったともいう）

　昔の彼女はなんだかんだで、人と交わる機会もそこそこあったのである。

　ただ浮き世離れしているだけではない。後年、羅翠

蓮が生涯ただひとりの直じき弟で子しと認める少年ならば、こう語っただろう。

『その気になれば社会に溶けこむことも渋しぶ々しぶできるくせに、自分のまわりにはひとつだって気に入らないものを置きたくないってワガママ女だから、居心地のいい山奥に引きこもっているだけなんだよな』と。

　また、彼はこうも付け加えただろう。

『でも、まあ、自分が世間に出たら、めざわりなものは人でも町でもかたっぱしから吹き飛ばしていくだろうって自覚はあるようでさ。そいつを自重するために山ごもりしている節ふしもちょっとだけあるから、あれはあれで気を遣つかってるのかもな。一応、師し父ふなりに。気遣いといっても、本当の本当にすこしだけってささやかなレベルだけど』

　彼女のそういう自覚と、文明社会への侮ぶ蔑べつをはぐくんだ時期がある。

　一九世紀のなかばから二〇世紀前半にかけてだ。この頃、ヨーロッパ中の魔術関係者が彼女の威い名めいをあまねく知るところとなる。

　すなわち『東方の妖よう人じん・羅ら濠ごう教主』『魔教教主クンフー・カルトマスター』として。

　この時期の羅翠蓮は七、八年に一度という頻ひん度どではあったが、何か重大な目的を果たすためにしばしば世界

のどこかで剛腕を振るっていた。

　そして——ロンドンに短期滞在していたことも実はあったのだ。

「何処いずこの国でも、下しも々じもの困こん窮きゆうに変わりはないようですね」

　羅翠蓮はひっそりとつぶやいた。

　排煙と背はい徳とくで穢けがれきった大都市・ロンドンの裏路地をひとり歩いている。

　中シ心テ区イと呼ばれる区画のはずれだった。

　都会の洗練とは程遠い場所柄がらだ。うす汚い路地が複雑にいりくんでいる。雑多なゴミ類や酔っ払いの吐と瀉しや物ぶつがあちこちにぶちまけられていた。腐った野菜やつぶれた果物に小こ蠅ばえがぶんぶんとたかっている。

　当然、饐すえた悪あく臭しゆうもツンと鼻をつく。

　生ゴミや酒の臭気、通行人の汗あせ臭くさい体臭などが出所だった。

　二時間ほど前に陽ひは沈み、すでに夜を迎えていた。

　ガス灯のぼんやりとした明かりも、このあたりの路地にはとどかない。

　代わりに、あやしげな店の数々からランプの明かりが洩もれてくる。安酒場や賭と場ば、売春宿、さらには阿ア片ヘン窟くつなど——夜こそにぎわう類たぐいの店が軒のきを連ねているのだ。

　当然、道ゆく者たちも柄の悪い輩やからだった。

荷に揚あげなどの肉体労働で疲れた体に、安酒を詰めこんだ荒くれ者たち。

悪所に出入りする楽しみを覚えた富裕層らしき紳士。けばけばしく着飾った女たち。うしろめたい稼か業ぎように精を出す商売人。花やマッチとひきかえに小銭を得る幼女。救きゆう貧ひん院いんに通って、粗末で不潔な食べ物を施ほどこしてもらう浮浪者たち……。

目の濁にごった阿片中毒者などもちょくちょく見かける。

まっすぐ歩くこともままならないほどに朦もう朧ろうとし、顔つきもうつろだ。

清しん国こくの民たみのみならず、多くの英国人もこの薬の魔性にのめりこみ、正体を失うほどに愛飲して、体と心の双方を自ら痛めつけているのだ。

「…………」

侮蔑するでもなく、哀あわれむわけでもなく。

羅翠蓮は中毒者たちを冷然と眺めるだけだった。

実は数軒の阿片窟にもぐり込み、無惨な内情をのぞき見たあとだった。

いくつもならべた寝台に客たちがだらしなく横たわり、阿片の煙管キセルを無気力に吸っているのである。がりがりに痩やせ細った者が多い。

阿片中毒のせいで、皮ひ膚ふに青い斑はん点てんの浮いた者も見かけた。

いるはずのない話し相手にぶつぶつ語りかけている者もいる。さ

らにはありもしない幻影を見て、ひとりおののいている者なども……。

　さらに、もうもうと立ちこめた阿片の煙。これだけで常人の体には害となる。

　もちろん、至純の域まで内ない功こうを鍛たん錬れんした羅翠蓮は小揺るぎもしない。そっと阿片窟をあとにしたのだが——。

「国が富み、栄えた結果、あのように堕だ落らくした者たちが際限なく生まれるのだとすれば……文明の進歩などというものに、どれだけ意味があることか」

　羅翠蓮のつぶやきは、天地山河と共に生きる仙せん女によの悲ひ嘆たんであった。

　ちなみに、今いる裏路地の界かい隈わいはロンドン橋からも近い。

　テムズ川の東岸なのだ。反対側の西岸には大都市ロンドンの中心、チャリング・クロスの交差点がある。

　こちらはまさしく、大英帝国の中心地であった。

　海軍省、国会議事堂、時計塔、さらにはバッキンガム宮殿などにもごく近い。

方術自在の道どう姑こ・羅翠蓮。その千せん里り眼がんをもってすれば、大帝国ゆえの皮肉な情景もかんたんに俯ふ瞰かんできる。

文明の退廃を冷ややかに視察しつつ、ひとり歩きを続ける。

今夜、彼女はいつもの漢かん服ぷくを脱いでいた。代わりに青い長ちよう袍ほうを着ている。

ワンピースに似た上衣で、裾すそが足下にとどくほど長い。腰の左右にスリットを入れて、動きやすくしてある。その下に褌子ズボンをはいている。

ふつうなら『妙な格好の中国人』として、奇異の目を向けられるところだが。

そうはならない。隠おん行ぎようの方術を使ったからだ。

保護色のごとき効果を生む術なのだ。己おのれの姿をまわりの景色に同化させてしまう。天下の羅翠蓮がこれを使えば、すぐ隣にいる者でさえ彼女の存在に気づかない。

「鉄てつ輪りん王おうから託たくされた願い、さっさと済ませてしまいましょう」

かような退廃の都、武林の至尊にふさわしくない。

早急に清国へ帰ろうと羅翠蓮は決意した。チベット高原の荒野で西さい域いき武林の盟めい主しゆと話をしたのは、半月前である。

あのあと、彼女は飛ひ翔しようの方術を使い、即座に英イ吉ギ利リ国スへやってきた。

イギリス人の手で盗み出された大だい威い徳とく明みよう王おうゆかりの神具・金こん剛ごう三さん鈷こ杵しよ。この品を力ずくで奪い返すために。

金剛三鈷杵の持ち主は雷——鋼はがねの剣神たちが得意とする権けん能のうを使用可能になる。

手て練だれの武侠や法ほう力りき僧そうであっても、そんな神具の所有者と対決することはむずかしい。だから、鉄輪王は神殺し・羅翠蓮に奪還を要よう請せいしたのである。

とはいえ、ここロンドンは異邦の地。

土地勘かんもない魔教教主は捜索を〝配下〟にまかせて、報告を待っていた。自身は幾日もひとりで市内を散策し、民の暮らしを視察していた……。

「まあ」

夜歩きの途中、羅翠蓮は不快な光景に出くわした。眉まゆをひそめる。

灰色のコートを着た、インド人らしき褐かつ色しよくの少女——こんな通りをうろついているくせに不思議とすれた感じはしない——に、酔っぱらい四人がまとわりついていた。

テムズ川の船着き場で荷揚げをする労働者たちだろう。

イギリス人だ。ただし、富裕層などとは顔つきも体つきもちがう。

さほど背は高くない代わりにがっちりとした、やや太めの体型なのだ。この都市の住人はたとえ同じ民族でも、上流・中流・貧民で見た目までちがう。

「あ、あの、すいません。ちょっと道に迷って、この辺に来ちゃっただけなんです。通していただけますか？」

すこしつきあえとからむ酔すい漢かんたちに、少女はけなげに訴えている。

だが、相手の四人は話を聞きもしない。近くの安酒場に、彼女を強引に連れこもうとしている。なかなか可愛かわいらしい少女なので、不ふ埒らちな出来心を起こしたのだろう。

酔漢どもは、少女の前後左右を四人でふさいでしまっている。

「早く勤め先のお屋敷にもどらないと、朝になっちゃいます……」

おずおずとインド人少女は言うものの、男どもは誰も聞く耳を持たない。

尚なお、ロンドンには多くの人種がいる。よく見かけるのはインド人、中国人、マレー人、アフリカ系の黒人たちだろうか。

あの少女もそういった者たちのひとりなのだろう。

無視してもよかったが……これも行きずりの縁。羅翠蓮は肩をすくめた。

しばしば聖教の配下に『義ぎ侠きようの行いを為なし、大義に殉じゆんじて、英雄・大侠たれ』と教えさとす彼女である。

ときには自ら義気を示すのもいい。フッと息を吐き出す。

この吐と息いきはすぐさま衝撃波をともなう魔風となり、不埒な四人組のひとり——その後頭部をがつんとたたきのめした。

あわれな犠牲者は「……」と意識を失い、そのまま前のめりに倒れこむ。

「「「!?」」」

残った三人の酔っぱらいが愕がく然ぜんとして、まわりをきょろきょろ見まわす。

だが、羅翠蓮の存在には気づかない。当たり前だ。こんな輩に隠行の方術を見破るような眼力があるはずない。

　羅翠蓮はさらに三度、吐息を送りこむ。それで終わりだった。

　衝撃波の風が酔った三人の後頭部をがん・がん・がんと立てつづけに殴なぐり、気絶させてしまった。からまれていた褐色の少女は驚き、目を丸くしている。

　魔教教主はフッとほくそ笑み、この場を立ち去ろうとしたのだが。

「あの、すいません！」

　呼び止められた。

　羅翠蓮はイギリスに来てから、初めて驚きよう愕がくした。

　危機感が大幅に足りない風ふ情ぜいのインド人らしき少女は——隠行の方術にも惑まどわされず、まっすぐにこちらを見つめていた。明らかに羅翠蓮の存在を認識している。

　しかも、にっこり微笑ほほえんで言う。

「是非、お礼を言わせてください。どこかでお茶でも飲みながら、お話ししませんか？」

「一体、この館やかたで何があったというんだい？」

　顔を合わせるなり、ジェラール子し爵しやくに訊きかれた。

「あの美しかった温室が全焼だなんて……。厨ちゆう房ぼうじゃあるまいし、火の不始末が起きるようなところじゃないだろう？」

「同感だ。ふつうなら、まず火事など起きる場所ではないな」

　苦々しさを噛かみ殺して、ヴォバンは淡々とうなずいた。

　ハムステッド・ヒースにある豪邸の図書室で、友人を迎えた直後だった。

　……この屋敷、中心にひときわ大きな母おも屋やがある。その東側に図書室のある棟むね、西側に温室のある棟がくっついている構造なのだが。

　昨日、西側の温室がいきなり火災にみまわれた。

　広い屋敷カントリーハウスを田舎いなかにかまえるような金持ちは、道楽でよく草花を育てている。

　庭師にまかせるだけでは飽あき足らず、自ら土いじりをする者もいるほどだ。温室はそのための場所であった。

「ここは君の——デヤンスタール・ヴォバン侯こう爵しやくの住すみ処かだ。誰かが火をつけたとも、ちょっと考えにくいな。僕なら、そんな真ま似ねは怖くてとてもできない」

「…………」

「もしかしてデヤン。主あるじの君が一時の激情にまかせて火を放ったとか？」

「想像におまかせしよう。私の口から答えることではない」

　冷淡な相づちを受けて、ジェラール子爵は納得した顔になる。

自分の想像が正しいのだと勝手に思いこんだようだ。べつに訂正する必要もないので、ヴォバンはそれ以上の言及を避けた。

尚、犯人はとっくにわかっている。新入りのインド人メイドだ。

昨日、あのアイーシャという少女が温室の手入れをしているとき、なぜか火の手が上がったのである。『ごめんなさい、ちょっと失敗しちゃいました！』らしい。

ヴォバンのもとへ陳ちん謝しやしにきたとき、当人はそう申告した。

どう失敗したら、火種もない場所で火事が起きるのか。バカバカしすぎて追及する気も起きず、ヴォバンは眉をひそめただけだった。

アイーシャと出会ってから、半月ほどが過ぎている。

この少女の素す性じようを執しつ事じに問いただしてみたら、本人が語った『ずっとメイドをやっていました』以上のことは不明だという。きちんと教育を受けた魔術師かも謎だ。

だが、『即戦力』のコメントはあながちまちがいではないらしい。

多少そそっかしいところはあるがそれなりに手慣れていて、仕事熱心だと執事から報告された。だが、四日に一度は〝何か〟をやらかす。

厨房を手伝ったときはジャムを一ひと壜びん分、まちがえてシチュー鍋に投入。

バケツで水を運んでいたら、足をすべらせて転倒。その拍ひよう子しにバケツを放り投げてしまい、通りがかった客人に水をぶちまける。

ネズミを追い払おうとしていたら、勢いあまって二〇〇ポンドの壺つぼを粉砕した。ちなみに、平均的なメイドの年収の一〇倍以上といった価格帯だ。

そして、昨日の温室全焼事件……。

　さすがのアイーシャもあのあと、しゅんとした面おも持もちでヴォバンの前にやってきた。

『ほ、本当に申し訳ございません……』

　しおらしく謝罪する彼女は、明らかに最悪の結末を予想していた。

　すなわち失業である。『御主人さま』が今にもクビと言いわたすのではないかと、びくびくしながらヴォバンのしかめ面つらを上うわ目め遣づかいに見あげていた。

　そのおびえぶり、まるで飢うえた狼おおかみを前にした小動物であった。

「あのう……わたくしはこれから、ど、どういたしましょうか……？」

　解かい雇こしなかったのは、そんなアイーシャが不ふ憫びんだったからでは断じてない。

　言ってしまえば、好奇心と反はん骨こつ心しんゆえである。

　厄やっ介かい者ものになりそうだと承知のうえで召しかかえていたのだ。

　なかなか面白そうなやつだと考えて、いわば道楽として。手て間ま暇ひまかけてこそ、遊びは盛りあがる。屋敷が傷いたむくらいでやめる理由にはならない。いや、できない。

　また、無能な使用人はとっとと解雇すべし——。

　そういう当たり前の反応をしたくなかった、というのもある。

『人間ごときが神に抗あらがうことはできない』

　その常識に全身全霊をかけて抗った結果、自分は神の弑しい逆ぎやくに成功したのだから。

　意地と反骨なくして、今のヴォバン侯爵はない。だから今回も「フン」と冷たく鼻で笑っただけで、さっさとアイーシャをさがらせた。

　とはいえ、屋敷の主はそれでよくとも、執事はそうもいかない。

　ドジなメイドが失敗するたび胃をきりきりと痛め、憂ゆう鬱うつの影を濃くしていく。

　幸いにも今日はアイーシャの休日。ロンドン市内へ遊びに行っているため、執事も気苦労を感じてないらしいが——。

「それでジェラール。今日はなぜ、私のところへ？」

「君に教えておきたい情報があるのと、あとは伝言をあずかったからだ」

「ほう」

　屋敷内のごたごたを忘れて、ヴォバンは魔王の貌かおで客人を見み据すえる。

「珍しいな。君がそのような用向きで私の隠れ家に来るとは」

「それだけ珍しい御ご仁じんがロンドンにいらしているからさ」

「なかなか期待させてくれる物言いだ」

「デヤンも知っているだろうが、この街にひそむ魔道の徒は僕らだけじゃない。マレー半島のあやしげな獣けもの使つかい、インド大陸から来た黒魔術師、それに道タ教オの方術に長たけた中国の老師たち……」

「所しよ詮せんは上うわっ面つらのちがいだがな。根本的な部分はどれも大差ない」

「やあ、君らしい言いぐさだ。しかしね。もし中国本土から最高の道教使いタオマスターが来ているとしたら、どう思う？　彼にはあるうわさがある。究極の拳法使いマーシヤルアーテイストでもあり、さらには神すら殺あやめて、その権けん能のうを簒さん奪だつしたともいう——」

「中国から？」

　ヴォバンはつぶやいた。実は心当たりがあった。

七年前、アジア西部から東南にかけてを放浪していたとき、その名を何度か聞いた。

あの一帯で魔術・呪じゆ術じゆつにかかわる者たちはデヤンスタール・ヴォバンを知らずとも、その人物の威名は例外なく承知していたのだ。

「私も聞いたことがある。かの国の南方には私に似た暴君がいると」

旅の途中で繰りかえし聞いた名前をヴォバンは思い出した。

「たしか羅濠とかいったはずだ」

「話が早くて助かるな」

正解だったらしい。ジェラール子爵が即座にうなずく。

「実はね、羅濠老師はチベットの盟友から依頼を受けて、はるばるイギリスまでやってきたんだ。盗まれた秘宝・金剛三鈷杵を取りもどすために」

「またしても聞き覚えのある名前だな」

「彼の指令を受けて、ロンドンの中国人たちは手を尽くして秘宝の行方ゆくえを探った。そして突きとめたんだ。今、聖なる宝は巡りめぐって、東とう欧おうの魔王ヴォバン侯爵の手に渡っているという事実を」

騒ぎを楽しむ野次馬の顔で、ジェラール子爵はにやりと笑った。

「羅濠老師は僕……つまり侯爵の数少ない友人であるイギリス人とコンタクトを取って、こんなことを伝えようとしている。近日中に是非、会談の場を設もうけたいと」

6

「実はわたくし、何カ月か前までロンドンで暮らしていたんです」

「そうですか」

　場末の安酒場パブの適当な席に腰をおろしたあと。

　奇妙なインド人少女はアイーシャと名乗り、いきなり身の上話をはじめた。

　聞き手は羅ら翠すい蓮れん。過去に同性とこういう話をした記憶はない。彼女の長い人生のなかに、実は女友達といえる存在は皆無なのである。

「しばらく海外を旅してきたら、思っていた以上にお金がかかっちゃって……ちょっと貧乏になってしまいました。今はメイドをしながら貯金をしています」

「そうですか」

「今日はたまたまお休みで、ひさしぶりに街に出たら、迷ってしまって。さっきは本当に助かりましたー。ありがとうございます。これで無事、お屋敷にも帰れます」

「そうですか」

「たくさん働いて旅費ができたら、また旅に出るつもりなんですよ♪」

「そうですか」

「ふふふふ。旅っていいですよねー。見知らぬ国をひとりであちこち歩きまわっていると、心が勝手に浮き浮きしちゃって、すごく幸せになれます」

「そうですか」

「ところで、あなたのお名前はなんとおっしゃるのでしょう？」

「あなたに教えるべき理由は何もありません」

　無難な世間話とやらに、羅翠蓮はまったく価値を認めていない。

　みごとなほどの適当さで気のない相づちを繰りかえしていたのだが、ここで初めてしっかりと言葉を返した。

　己おのれはただの羅翠蓮にあらず。最も尊そん貴きなる武人にして『王』である。

　軽々しく名乗ることはできない。当然の返答なのだが、アイーシャは仰ぎよう天てんする。

「そ、そんな!?　こうして知り合えたのも何かの縁じゃありませんか！」

「そうですか」

「そうなんです。だから、お姉さまも是ぜ非ひお名前を。ささ」

「あなたに姉と呼ばれるべき理由もまったくありません」

「ううううっ。なんてつれない」

「義兄弟の契ちぎりはとても神聖にして厳げん粛しゆくなもの。仕方のないことです」

「じ、じゃあ、なんとお呼びしたらいいんでしょうか？」

「そうですね……ならば『天上の星々と同じほどに気け高だかく、神こう々ごうしい、賢明にして強健なる宝ほう玉ぎよくのごとき婦人よ。いかなる神もおよばぬ偉大なる最高の王者よ。我わが忠誠と尊敬を余すところなく捧ささげるべき御方よ』と、呼びなさい」

「な、長すぎます！　やっぱり『お姉さま』がいちばんですっ」

　少女の与よ太た話ばなしは適当に聞きながして、羅翠蓮は酒場のカウンターをちらりと見た。ひかえている給仕係はイギリス人ではない。中国人だった。

　ここはロンドンで暮らす中国からの移民——彼らのたまり場のひとつなのだ。

　経営者も給仕も中国人。さらに言うと、武ぶ林りんの侠きよう客かくや盗ぬす人つとのような裏うら稼か業ぎようの者たちに情報とコネを斡あつ旋せんする場所でもあった。

　はじめ羅翠蓮はアイーシャを無視して、さっさと歩いていったのだが。

　母親に続く子ガモのようにいつまでも着いてくるので、このパブまで仕方なく連れてきたのである。もちろん、いつでも振り切れた。

羅翠蓮は軽けい功こう卓たく越えつ。本気で走れば、誰も着いてくることはできない。

しかし、武ぶ林りんの至し尊そんともあろう者がこのような相手に武芸を使うなど——沽こ券けんに関かかわるというもの。そんな無様は許されない。

ならば方ほう術じゆつでと思ったものの、なぜか隠おん行ぎよう術じゆつが通じない。

少女の素す性じようをいぶかしみつつも結局あつかいに困り、今にいたっている。

「ち……茶をお持ちい、いたしました」

ここで給仕がふたりの卓までやってきた。

羅翠蓮の前にそっと中国茶の器うつわを置く。手がわなわなと震えていた。羅ら濠ごう教主の凄せい絶ぜつなうわさが彼を恐怖させているのだ。

昔からのつきあいがある者しか翠蓮の名を知ら

ない。

　姓は羅、名は翠蓮、字あざなは濠。聖教の長・武林の至尊としてはもっぱら『羅濠』の呼び名で知られている。

　おびえきった給仕に、羅翠蓮は冷徹に問いかける。

「例の件はどのように？」

「い……いまだ進展はないとのことで、でで、です……」

　おびえきった給仕のくぐもった答えに、無言でうなずく。

　今回、ロンドン中の方術・裏稼業にかかわる中国人に命じていた。

　武林の至尊である我われのため、命を賭として忠勤せよ。我が使命は神しん宝ぽう・金こん剛ごう三さん鈷こ杵しよの奪還なりと——。

　彼らは懸けん命めいに調査を行い、ついにその在あり処かを見つけ出した。

　巡りめぐって、宝は『ヴォバン侯こう爵しやく』なる男の手にあるという。今日、ちょうど指示したばかりだった。我をその者と引き合わせよ、と。

「あ、すいません。わたくしにもお茶を一杯いただけますかー？」

こんな空気のなかでも、アイーシャは平然と声をかける。

給仕は困ったように視線を右う往おう左さ往おうさせた。こんなことで羅翠蓮の指示を仰あおげば、どのような制裁を受けるか。よく承知しているのだろう。

実際、任務に関係ない無駄口を叩たたいたら、即座に舌を引き抜くつもりだった。

しつけのゆきとどいた給仕係に羅翠蓮は満足した。武林の至尊たる者、このように畏い怖ふと崇すう敬けいを捧げられるべきなのだ。

……ちなみにこの数十年後。彼女はさらに考えを進める。

武林の至尊はみだりに下しも々じもの前に姿を見せるべきではないだろう、と。

が、この頃はまだ、自身の素顔をさらすことにさほど抵抗感は持っていなかった。

まあ、『羅翠蓮の容よう貌ぼうについて不用意

に語る者は誰であろうと制裁せよ』と、全世界の配下にきつく通達はしていたが。

　給仕は結局、無言のまま卓の前から去っていった。

「今こ宵よいの宿をそろそろ決めねばなりませんね……」

　ふと羅翠蓮はささやく。宿といってもホテルなどではない。

　そもそも、彼女にふさわしい仮住まいがこんな都にあるはずなかった。しかし、すこし郊外に赴おもむけば、まだまだ広大な荒野がロンドンのまわりには広がっている。

　そこで草の褥しとねに横たわり、嫋じよう々じようたる月の輝きを肴さかなにして、一夜を過ごすのである。

　だが、そんな想おもいを読み取れない少女もいる。

「まあ……お姉さまったら、ゆく当てもなくて困っていたのですね！　でしたら、わたくしの部屋にいらしてくださいな！」

「どこかの屋敷で下働きをしていると、あなたは申していましたが？」

　そういった職種の者はほとんど屋敷に住みこみとなる。

　この時代のロンドンの常識だった。案あんの定じよう、アイーシャは「はい」と返事する。しかし、にっこりと笑い、こう請うけ合ってみせる。

「でも、こっそり忍びこんじゃえば大丈夫です。ふたり部屋なんですけど、今はわたくし以外に誰もいませんし」

「見つかった場合、あなたが叱しつ責せきされるのでは？　もし、わたくしの住まいで——」

羅翠蓮は冷ややかに言った。

「そのように不ふ埒らちな真ま似ねをする者がいたら、即座に屋敷から追い出します。己おのれの罪を忘れさせないよう、手足の指でも何本か切り落としたうえで」

「それは残酷すぎます、お姉さま！」

「訂正しなさい。わたくしはあなたの姉ではありません」

「す、すいませんっ。あ——でも、うちの御主人さまはおやさしい方だから、きっとお姉さまおひとりを一晩泊めるくらい、許してくださると思いますよー」

「ほう」

つぶやきながら、羅翠蓮は眉をひそめる。

このインド人少女、きわめて温和かつ柔にゆう弱じやくに見える蓮が、羅翠蓮の指示にすこしもしたがおうとしない。今もまた『お姉さま』などと口走った。

　いかなる配下も、羅濠教主にこのような不敬を働くことはないというのに。

　尚なお、パブにいる中国人たちは皆、残らず恐怖で凍りついていた。

　彼らは知っているのだ。羅濠教主がなにより己の権威を重んじる人物だと。それをないがしろにする輩やからにはわずかな容よう赦しやもしないと。

　とはいえ、あくまで行きずりの娘。彼女は羅翠蓮の正体を知らない。

　聖教の配下と同じあつかいをするのもさすがに酷だろう。

　ひとまず大目に見ることにして、話を続ける。

「あなたの主あるじとやらは、それほど甘い人物なのですか？」

「はい。いつもすごーく不ふ機き嫌げんそうで、ぴりぴり怖い雰ふん囲い気きをまき散らして、誰もオレさまに話しかけるなーみたいな人なんですけど」

「ずいぶんと傲ごう慢まんそうな男ですね」

「でも、とってもおやさしい方ですよー。わたくしがメイドのお仕事でいろいろ失敗したときも、『仕方のないやつだな★』みたいに黙って許してくださいますし」

「なんと生ぬるい。顔や体に刺いれ青ずみでも刻み、罪の証あかしとすべきでしょうに」

「ずいぶんとご苦労されているみたいですから。だから、わたくしのような者にも寛大に接してくださるのだと思います。——あと、ときどき」

　ここでアイーシャは声をひそめた。

「すごく何かを言いたそうにして、わたくしのことを見つめるんです」

「胸に秘めた想いが何かあると？」

「はい。そういうときの御主人さま、すごく苦悩してらっしゃる感じで……。そして昨日、気づいたんです。あの方はたぶん、わたくしを『妹』のように思っているのだと！」

　話を聞きながしていたとき、羅翠蓮は〝来客〟の気配を捉とらえた。

　鋭いまなざしをパブの出入り口に向ける。逆にアイーシャは何も気づかぬまま、こぶしをぐっと握りしめて、力説を続けていた。

「そう考えると全てのつじつまが合います。御主人さまにはきっと、死別された妹君がいらっしゃったのでしょう。その方とわたくしはたぶん瓜うり二ふたつなんですっ」

「ほう」

「きっとまちがいありません。だから、御主人さまはわたくしに目をかけてくださるのだと思います。妹君の代わりとして！」

「なるほど。ところであなた、アイーシャと申しましたか」

「はいはい。何でしょう、お姉さま？」

「わたくしはあなたの姉ではありません。それよりもそちらの御ご仁じん、もしやあなたのお知り合いではないのですか？」

アイーシャの斜め後ろを見つめつつ、羅翠蓮は淡々と訊たずねる。

「先ほどから、何か言いたげにあなたを見ております」

「本当ですか？　一体どなたでしょ――ご、御主人さま⁉」

「断っておくが、私には死別した妹も生き別れた弟もいない。というより、家族の記憶など何ひとつない」

　苛いら立だちを自制心で抑おさえているがゆえの仏ぶつ頂ちょう面づらで、その青年は言う。

　すこし前に入店したあと、まっすぐにこちらの卓へ近づいてきて、アイーシャの背後で立ち止まったのだ。

　この女、どうしてこんなところにいるのだと言いたげに、ひどく不機嫌そうに。

「アイーシャといったか。おまえの頭はどうやらネジが一、二本抜けているようだな」

　青年は冷ややかに毒どく舌ぜつを披ひ露ろうした。

「壊れた頭でこしらえた妄もう想そうなどゴミ溜ためにに放り捨てて、しばらく黙っているがいい。でなければ粗悪品として、おまえ自身をぼろきれのように捨ててやる」

「ひ、ひゃいっ！」

「当家のメイドが失礼をしたようだ。詫わびを申し上げる必要があるな」

　冷徹な命令でインド人少女を硬直させてから、青年はあいさつしてきた。

二十代後半。身なりのいい紳士だった。

いかにも知的な風ふう貌ぼうだ。しかし、羅翠蓮はだませない。

この青年が『紳士』などとはとんでもない。狼おおかみ。それも猛たけ々だけしい魔ま狼ろうの姿が彼の背後にかいま見えた。

道どう姑ことしての卓越した霊れい視し力りよくが彼の本性を幻視させてくれたようだ。

羅翠蓮はフッと凜り々りしく笑い、狼の気をまとう人物へ言う。

「いいえ。この娘の長ちよう広こう舌ぜつ、ほぼ聞きながしておりました。記憶に残すつもりも特にないので、謝罪にはおよびません」

「ふむ。それはありがたい」

「あのぅ。おふたりとも、もうすこしやさしい言葉を選んでくれても……」

「黙っていろと言ったはずだぞ」

「われらの話を邪じや魔ますするのなら、容赦はいたしません」

「は、はあい」

しゅんとする少女アイーシャを無視して、羅翠蓮は青年を見み据すえる。

この者、あるいは我と互角の域にあるのでは――。そのような疑ぎ惑わくまで胸の裡うちに込みあげてくる。ということは、彼がやはりそうなのかと。

羅翠蓮は微笑して、きっぱりと言う。

「あなたの名、デヤンスタール・ヴォバンとお見受けいたしました」

「正解だ。私の方は羅濠教主が今どこにいるかを探らせて、ここまで来たのだが……その名の持ち主が女だとは想像していなかったぞ」

たがいの素性を一目で見抜き、同時にほくそ笑む。

羅翠蓮もヴォバン侯爵もすぐさま認識したのである。目の前に今、同族――自分と同じ〝神殺し〟がいると。

神と出会ったときは、神殺しの直感が相手の正体を悟らせてくれ

る。

　だが、神殺し同士でそういう勘かんは働かない。にもかかわらず、東とう欧おうと中華の両魔王はおたがいが何者かを一瞬にして理解した。

　それぞれがまとう強者の風格、魔王の呪力、戦士のたたずまい。

　そういった諸要素がなによりも雄ゆう弁べんに『神殺し、ここにあり』と訴えている。

　そして、ヴォバンはちらりとアイーシャを見た。

「なるほど。そのメイドは君の手下だったのか。妙なところの多い娘だとは思っていたが、ようやく合が点てんがいった。魔教教主の配下であれば、いろいろ説明が付く」

「何を言うのです」

　予想外の言葉に、羅翠蓮はすぐさま言い返す。

「羅濠の方術をはじく妙な娘……なるほど、ヴォバン侯爵の婢はした女めであったかと、わたくしも納得したところです。このような者、我が聖教の信徒にはおりません。今後、入信を認めることもないでしょう」

「…………」

「…………」

　おたがいに『おまえのところの手下ではないのか？』という視線

を交換し合う羅翠蓮とヴォバン侯爵の横で、話題の当人がおずおずと言う。

「あのう。わたくしの素性は以前、雇っていただくときに説明したとおりでー」

「……私の早合点だったか」

「……わたくしとしたことが少々うかつだったようです」

　魔王同士の会談に割りこむ慮りよ外がい者ものを無視することにして。

　ふたりはあらためて見つめ合う。もちろん、恋れん情じようゆえではない。

　世界にほんの数人しかいない〝同族同士〟だからこその対抗心、敵てき愾がい心しんがふたりの闘志を昂たかぶらせ、相手への興味をかき立てるからである。

　羅翠蓮は思う。もし我と彼とが戦わば、いかなる結果になるものかと。

　そして確信する。相手の方もまちがいなく同じ想像をもてあそんでいるはずだと。

「さて。今夜ここに来た理由はほかでもない。例の神具の問題を片づけるためだ」

　ヴォバン侯爵はおもむろに言った。

「羅濠教主、ひとつ提案してもいいか？」

「うけたまわりましょう」

「君を我が屋敷に招待して、この件についてじっくり話をしたいと思うのだが、いかがだろう？　今ここで全てを済ませてしまうのは、あまりにせわしない」

「ふふふふ。いつもはそのような誘い、決して承しよう諾だくしないのですが」

　狼おおかみ王おうがあえて語らぬ詳細を察して、羅翠蓮はたおやかに微笑ほほえんだ。

　もちろん、会談などが目的ではない。これは西洋の習慣でいう『手袋を投げつける』のと同じ行為なのだ。

「あなたほどの人物に自らお越しいただいての招待を断るほど、羅濠は礼を知らぬ者ではありません。いつうかがいましょう？」

「ならば明日。もちろん、私の方から君のねぐらに出向いてもかまわんが」

「とんでもない。次はわたくしの方からおうかがいいたします。武林の至尊と呼ばれる者の誇りに懸かけて、必ず」

　我が本拠地へ出向くのが恐ろしいのであれば、逆でもかまわないぞ――。

　まさか。そのように惰だ弱じやくな世よ迷まい言ごと、誰が言うものですか――。

　うわべだけ丁てい寧ねいなやりとりの裏に、挑発的なメッセージがいくつもひそんでいる。

　そして羅翠蓮は唐突に感じ取った。まもなく嵐が来ると。それもこのロンドンを根こそぎ破壊しかねない、超ちよう弩ど級きゆうの大嵐が。



7

　風の強い夜になった。

　ぶあつい雲がどんよりと夜空を覆おおい、星も見えない。

　デヤンスタール・ヴォバンが中国の妖よう人じんと出会った翌日である。今こ宵よい、ハムステッド・ヒースの屋敷に彼女は約束どおりにやってきた。

　二階の大広間で顔を合わすなり、羅ら濠ごう教主は言う。

「お言葉に甘えて参上いたしました。お招き、ありがとうございます」

「とんでもない。こちらこそ感謝する。君ほどの大人物をお迎えできたこと、まちがいなく当家の自慢となるだろう」

　そらぞらしい社交辞令をふたりで口にする。

　尚なお、玄関ホールから羅濠教主を案内してきたのは『死せる従僕』だった。

　全ての使用人に特別休暇をあたえてある。せっかくの一大イベント、何者にも邪じゃ魔まされることなく堪たん能のうしたい。そう考えたからだ。

「ささやかだが食事も用意してある。よろしければ、いかがかな？」

　大広間の中央にある、宴席用の長テーブル。

　二〇人以上でかこんだとしても、まだ余裕があるだろう。

　前もって用意させた夕食が載のっている。ウズラのパイ、丸ごとの鶏とりのロースト、子羊肉ラムチヨツプの香草焼き、チーズの盛り合わせ、砂糖菓子、かごに盛った果物数種類、胡瓜キユーカンバーや冷肉のサンドイッチなどだ。

どれも冷め切っているが、味は悪くないはずだった。

「もちろん毒など盛ってはいない。だが、不安なら私が毒味役を買って出よう」

「そのような愚ぐ行こう、あなたがなさるはずないと確信しております。が……夕食の方はお断りいたしましょう」

羅濠教主は今日、ひらひらとした漢かん服ぷくを身につけていた。

昨日の長ちよう袍ほうよりも格式張った装よそおいだ。ヴォバンは例によって隙すきのない紳士の服装。さすがに屋敷内なのでフロックコートはなしだったが。

ふたりそろって正装だとも言える。しかし、それは晩ばん餐さん会かいのためではない。

「わたくしたちには、食事よりも先に済ますべきことがあるはずです」

「たしかに。なら、さっさとはじめるかね」

意見が一致したので、ふたりは同時にふくみ笑いを洩もらす。

不思議だった。生おい立ちも性格もまるでちがう。今後、朋ほう友ゆうとして意気投合することなど永遠にありえないだろう。むしろ不ふ倶ぐ戴たい天てんの宿敵同士となるかもしれない。

だというのに。

ふたりの魔王はたしかに似た者同士であった。

出会いから決闘のはじまりまで、流れるような自然さで事が進んだ。最初に目を合わせた瞬間から、ふたりの間では〝こうなること〟が決定事項だった。

この境地、双方がまつろわぬ神々と戦いつづけてきた『戦士』だからなのか。

両者の間には一〇フィート（約三メートル）ほどの距離がある。こんな間合い、ほんの一瞬で詰めてしまえる。

　ヴォバンはすこしだけ猫背になり、半歩踏み出した。

　対して、羅濠教主はただ突っ立っているだけ。ただし、両手の掌てのひらを開いている。これに匹敵する武器は軍神たちが振るう刀剣や槍やりしかないのでは——？

　そう直感して、ヴォバンは慄りつ然ぜんとした。

　同時に震えるような歓喜も味わった。こうでなくては闘争とは言えない！

「一応、ルールを決めておこうか。単純なものでいいだろう」

　大敵を前にして、猛たけりすぎるのもよくない。

　ヴォバンはあえて肩の力を抜き、大広間の中央に歩いていった。

　冷えてはいるものの豪ごう奢しやな晩餐を載せた長テーブルがある。いくつもならんだ大皿といっしょに、あるものも置いてあった。

　両端が三つ叉またに分かれた東洋の武具。金こん剛ごう三さん鈷こ杵しよだ。

「勝った方が持ち帰るというのは、どうかな？」

「異論ありません。それで結構です」

　賞品を指さしながらの問いに、羅濠教主はあっさりうなずく。

　もはや、ふたりの興味はチベット高原の神具よりも決闘の方に移っていた。欧おう州しゆうの魔ま狼ろう王おうと東方の不敗なる妖人、どちらの力がはたして上なのかと。

　そして、この瞬間だった。

「遅くなって申し訳ございませんっ！　今、お給仕をいたしますね！」

　ばたんとドアが開き、あわて顔のアイーシャが入ってきた。

　黒と白のエプロンドレスにカチューシャ。メイドとしての正装だった。

「ちょっとお昼寝してたら、こんな時間になっていてっ。あら？　御主人さまもお姉さまも怖い顔をされて、どうかなさったんですか？」

「この娘、今日もいたのですね……」

「何か手ちがいがあったようだな……」

　せっかくの緊迫感に水を差す乱入劇。羅濠教主は慨がい嘆たんするようにかぶりを振り、ヴォバンの方は悩ましい思いでささやいた。

　ともあれ、気を取りなおしてアイーシャに訊たずねてみる。

「君をふくめた全ての使用人に休暇をあたえたはずだが？　それも期間中、必ず屋敷を出よという厳命付きで」

「はい、うかがっておりますよー。でも」

　いつも朗ほがらかなインド生まれのメイドはにっこりと笑う。

　まるで毎日『よかったこと』を探している無む垢くな少女のような、もはや鬱うつ陶とうしいほどに前向きで陰のない笑顔だった。

「わたくしは昨日も休暇をいただいてますし、お姉さまをお招きする記念日に失礼があってはいけないと思ったんです。だから、こっそり屋敷に帰っておりました♪」

「そういうことか。ならば」

　ぱちりとヴォバンは指を鳴らした。『死せる従僕』への合図である。

　羅濠教主を案内させた死し人びとで、ずっとドアの脇わきに待機させていた。フランスで革命が起きる前、ベルサイユ宮殿の従僕だった彼は当時の制服を着たまま動き出した。アイーシャの肩を抱きかかえるようにして、大広間の外へ引っぱっていく。

「屋敷の外に放り出してこい」

「あっ。な、何をするんですか⁉　わたくしにはまだ仕事があぁぁぁ──」

　従僕たちの力はおそろしく強い。華きや奢しやな少女にあらがえるはずがない。

　アイーシャのわめき声はどんどん遠ざかっていく。邪魔者の排除に成功したので、ヴォバンはあらためて今日の主しゆ賓ひんに向きなおった。

「お待たせした。では、そろそろ」

「ええ。はじめるといたしましょうか、ヴォバン王」

　魔王ふたりが相打つ決闘、ついに開幕であった。

　二月下旬のロンドンでは、春の足音はまだまだ遠い。

　まだ真冬と言ってもいい酷こつ寒かんの夜に、強風が吹き荒れている。この風を呼びこんでいる元凶は実のところデヤンスタール・ヴォバンであった。

　風雨と雷らい霆ていを操る『嵐』の権けん能のう——。

　こんな力を持っているせいだった。心が昂たかぶると、風や雲が勝手にヴォバンのまわりに集まってくるのである。

　いつもなら雷雨も降り出す。しかし、今夜はすこし趣おもむきがちがった。

　あまりに気温が低いため、雪が降り出したのだ。轟ごう々ごうと吹く強風にたっぷりとした雪が加われば、すなわち吹雪ふぶきの到来となる。

　今こ宵よい、ロンドン市内は突然の吹雪にさらされることとなった。

　うす汚い大都会が降りつもる雪の白さによって、一秒ごとに塗り固められていく。

　只ただでさえ寒い二月のロンドンが雪せつ片ぺんまじりの強風によって、冬の女王の版はん図とさながらに極寒の地へと変わっていくなか。

　吹雪の中心地である郊外の原野ヒースでは、激闘がむしろ過熱気味であった。

「くくくく。似たような力の持ち主というのもいるものだな」

「そう思うのは尚しよう早そうでしょう。南方の女神よりわたくしが奪った竜りゆう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう……まだまだこんなものではありません」

　ほくそ笑むヴォバンに対して、羅濠教主はあくまで冷然と告げる。

　驚くべきことに、風を操るのは東とう欧おうの魔王だけではなかった。

　まったく理屈はちがうものの、方ほう術じゆつ自じ在ざいの妖人も魔風を吹かす。なんと歌声を風に変えて、しかもその詩句に衝撃波まで乗せて、解き放つのである。

「十里の黄こう雲うん、白はく日じつくらし。北ほく風ふうは雁かりを吹き、雪ゆき粉ふん粉ぷん……」

「おお」

「愁うれうなかれ、前ぜん路ろに知ち己き無なきを。天下、誰たれ人びとか君を識しらざらん！」

「ふ——っ。奇妙な言こと霊だまを使う！」

　この『風くらべ』が決闘の第一章だった。

　羅濠教主が桜おう桃とうのごとき唇くちびるより吐き出した嘯しよう声せいは彼女の前で風の渦うずとなり、そのままあっというまに竜巻となってしまう。

　轟々と旋回する暴風にふれたものは、一瞬にして崩壊していった。

　今、難攻不落の城すら薙なぎ倒す衝撃波が羅濠教主のまわりで際限なく回転し、見えざる破壊神の腕さながらに猛威を振るっているのだ。

当然、ヴォバンの大邸宅もほんの数十秒で消滅してしまった。

美しかった白い外壁も、屋根も、梁はりも、柱も――ありとあらゆる建材が粉こな微み塵じんに粉砕されて、そのまま吹雪の夜空へ吹き飛ばされていったのである。

「ふむ。君の手並み、私以上に荒っぽいようにも思えるな」

「世よ迷まい言ごとを。この程度、あなたにとっても児じ戯ぎに等しいはずでしょう」

いまや真っ平たいらとなった屋敷の跡地で、ふたりの魔王は向き合っていた。

吹きすさぶ魔の暴風が只のそよ風だと言わんばかりにどちらも平然と立ち、自然体でおたがいの姿を眺めている。

竜巻の『中心』にいる羅濠教主はともかく、ヴォバンが魔風を苦にしない理由。

「まあ、これがきついなどとはたしかに言わんさ」

もちろん、彼もまた卓越した風使いだからだ。

羅濠教主の歌声が起こした竜巻の風をいなし、己おのれの肉体の左や右に逃がしてしまう。しかも一瞬だけではなく、魔風の衝撃が続く間ずっと――。

百五十年近い戦歴を持つ神殺し、その呪じゅ力りょくと経験があればこその妙技であった。

「ふふふふ。こちらの反撃もそろそろ受けてもらおうか」

「受けて立ちましょう。参りなさい」

ロンドンを襲っていた猛吹雪が局地的にその威力を――爆発的に増した。

ヴォバンがついに反撃の暴風を吹かせたのだ。しかし。

「千せん山ざんに鳥の飛ぶこと絶え、万ばん径けいに人じん蹤しょう滅す。孤こ舟しゅう蓑さ笠りゅうの翁おきな、独り釣る寒かん江

こうの雪！」

　羅ら翠すい蓮れんの口ずさむ歌がさらなる風威を生み出した。

　彼女を取りまく竜巻はさらなる力と勢いを得て、ヴォバンの吹かせた強風を逆に取り込んで、より強大な暴風の渦を作りだしてしまう。

「ならば――！」

「疾チツ！」

　ヴォバンが天より極大の雷を落とせば、羅翠蓮は短い言霊を唱える。

　電光に打たれる寸前、中華武ぶ林りんの至し尊そんは――姿を消した。なんと一瞬にして、一〇ヤード（約九メートル）ほど後方に移動していたのである。

　ごく短距離を瞬間移動する魔術。ヴォバンも知っている術だ。

　しかし、こんな一瞬であざやかに使いこなすとは。そんな使い手は今までひとりも見たことがない。ヴォバンは吠ほえた。

「なかなか器用な逃げ方をする！」

　上空の雷雲に命じて、立てつづけに雷を落とさせる。

　当然、羅濠教主は例の転移術を続けざまに使い、ことごとく逃れてしまう。だが、ここからが本番だった。

　ヴォバンは風使いとしての感覚を研ぎすまして――大気の揺れを読んだ。

　魔教教主が転移してきた直後、突然の闖ちん入にゅう者しやがかき乱した大気の揺らぎを感じ取るや否いなや、その地点に雷霆を落とすのだ。

　もちろん、この手でも一発で仕し留とめられるとは思わない。

　羅濠教主が逃れきれなくなるまで、何度でも雷撃を放ちつづけるまで！

「疾！」

「疾！」

「疾！」

　ヴォバンのまわりで幾度も瞬間移動を繰りかえす羅濠教主。

　そのたびに落とされる稲妻をどうにかやりすごしている。だが、このままではいずれ逃げ切れなくなると悟ったのだろう。

　やにわにヴォバンめがけて――まっすぐ踏み込み、突進してきた！

「どうやら間合いを取っての戦いでは埒らちがあかないようですね」

　今度は瞬間移動の術ではない。

　だが、そうかと見まごうほど速く、鋭い歩法フツトワークだった。気づけば、羅濠教主が目の前にいた。しかも、その勢いを乗せて右の掌しよう打だまで放ってくる！

　これをヴォバンが避け得たのは、野性の反射神経があればこそだ。

「⁉」

羅濠教主が愕がく然ぜんとした。掌打を外したのがよほど意外だったのだろう。

無理もない。これほどの格闘技の使い手、天上の軍神たち以外では初めて出会った。ひそかに舌を巻くヴォバンに向けて、彼女は矢や継つぎ早ばやに掌しよう撃げきの数々を繰り出す。

一呼吸の間に両手の掌を五打ずつ、合計で十撃を打ち込んでくる。

次は五指をそろえて、剣の切っ先のようにまっすぐな突き。

掌の小指側を手刀に変えての斬撃。斬撃。斬撃。

しかし、ことごとくヴォバンはかわしきってしまう。決して洗練された動きではなく、追い詰められた獣けものの身のこなしであった。

「ふん。これでは動きづらくてかなわん！」

「なるほど、そういうカラクリでしたか！」

ヴォバンが吐き捨てながら『狼おおかみ』に化け身しんするのを見て、羅濠教主はうなずいた。

遊びでボクシングをたしなむ程度しか格闘技の心得はない。そんなものでは中華武術の真しん髄ずいをきわめた乙女に太た刀ち打うちできるはずない。

だが、ヴォバンにはアポロン神の権能がある。

数百匹、数千匹という群ぐん狼ろうを召喚し、自身も狼に変へん化げしてしまう力――。

野生の狼すら凌りよう駕がする魔狼の本能を最大限に研ぎすまし、灰色狼と化したヴォバンは羅濠教主との接近戦という大難事に真正面から取り組んだ。

四つ足の獣となって、その俊しゆん敏びんさと反射神経にまかせて。

次々と放たれる精妙強大な掌法の数々をかわす。かわす。かわ

す。かわす。

　そして、隙すきを突いて喉のど笛ぶえに飛びかかり、喰らいつく——寸前。

「ふふふふ。そう来ることは読めておりました！」

　羅濠教主は両手の掌で、灰色狼の顔を左右から挟みこんだ。

　打撃ではない。摑つかみ技だった。教主の掌は——山すら引きちぎりそうなほどの剛力で、狼化したヴォバンの頭ず蓋がいを左右から押しつぶそうとする！

「ちぃっ！　このバカ力も貴様の権能か！」

　一瞬で見抜き、それと同時にヴォバンも得意の権能を使っていた。わずかでも遅れれば、割れたスイカのように頭はグシャグシャになってしまっただろう。

　教主の金こん剛ごう力りきから逃れるため、さらに凶悪な魔狼となるべく——巨大化。

　今までも体長七フィート（約二一〇センチ）はあろう狼だった。が、ここから一〇倍以上も体を一気に膨ぼう張ちようさせたのである。

　そのときの勢いで羅濠教主も振りはらってしまう。

　いまやヴォバンは身の丈たけ六〇フィート（約一八メートル）以上の巨軀であった。

　まさしく『大巨狼』と呼ぶべき、圧倒的な偉容だろう。この早変わりを目まの当たりにして、魔教教主は賞賛のつぶやきを洩らす。

「ここまでの姿に変化できるとは……さすが魔狼の化身」

「貴様の方こそ、そんな剛力を隠し持っていたとはな」

　互いの力量に感かん嘆たんしつつも、もちろん体は休めない。

　ヴォバンは巨狼の顎あごで乙女の姿の教主を丸まる呑のみしにかかる。

しかし、巨大化した狼王の頭部に負けないほど――巨大な拳こぶしが下から突きあげられた。狼の顎を砕くためのアッパーカットである。

ヴォバンはとっさに後方へ跳びのいて、アッパーをかわした。

ぎりぎりだった。一秒でも遅れれば顎を砕かれ、絶命していたかもしれない。

見れば、羅濠教主の両肩から煙のように気が立ちのぼり、これが――巨大かつ筋肉質の男に化身していた。東洋でいう金剛力士である。上半身は裸なので、きわめて屈くつ強きような体格であることが一目でわかる。

アッパーカットを放った巨人の筋肉美、なんと黄金に光り輝いていた。

「いかがですか？　我が顕けん身しん、阿あ吽うん一いつ対ついの仁に王おう羅ら漢かん……その一体です」

「ふん。私に釣り合う敵がいないと嘆なげいていたら、思わぬ大当たりが飛び込んできたものだ」

大巨狼に変化したまま、ヴォバンは傲ごう然ぜんと笑う。

かたや武術と方術を共にきわめんとする東方の武ぶ侠きよう王おう。かたや魔術も武芸も一切学ぼうとしなかった欧おう州しゆうの魔狼王。

まったく対照的な両者だが、戦士としての力量はほぼ互角であろう。

東洋と西洋に君臨してきた両魔王がついに邂かい逅こうを果たした結果の決闘、まさにこれこそヴォバンが求めていたものだった。

8

さて――。

すこし前、『死せる従僕』の手で追い出された少女がいる。

名はアイーシャ。言わずと知れたヴォバン侯こう爵しやく家けのメイドである。彼女はあのあと、あきらめ悪く屋敷の外をうろうろしていた。

ほとぼりが冷めた頃、邸内に忍びこむつもりだったのだ。

「御主人さまもお姉さまもひどいわ。わたくしだけ除のけ者にして」

ぐすりと涙ぐみながら、寒さでかじかむ両手をこすり合わせていたとき。

侯爵邸のなかで、風が爆発した——。

それは屋敷の大広間で『お姉さま』が魔風の権けん能のうを解きはなった瞬間だった。しかも威力全開、全てを消し飛ばすほどの勢いで。

衝撃波をともなう竜巻がうなりをあげて、ロンドン郊外の原野で荒れ狂う。

瀟しよう洒しやな田舎屋敷カントリーハウスはほんの数十秒で原型を失い、その後の数分ほどでほとんどの建材が跡形もなく吹き飛んでいった。

おまけに、この魔風に『御主人さま』が拍はく車しやをかけた。

嵐の権能——後年、〝疾風怒濤シユトルム・ウント・ドランク〟と名づけられる力で暴風と暴雨を呼んだのである。

「あれえええええええええ～～～～～～～～～～～!?」

唐突すぎる魔風と暴風。当然、アイーシャも巻きこまれる形になった。

広壮な屋敷でさえも吹っ飛ばすような風力なのだから、もちろん少女の体も為なす術すべなく冬の夜空に巻きあげられるはずだった。

しかし、とっさに両手で頭をかばいながら地面に這はいつくば

る。

　風の影響を最も受けにくい体勢である。

「うううううっ。お姉さまも御主人さまもわたくしが近くにいることを忘れてしまったんだわ」

　このすさまじい暴風、ふたりのどちらかが起こしたものにちがいない。

　アイーシャはすぐに確信した。まつろわぬ神が近くにいる気配を感じない以上、神殺しのどちらかか両方がやっているに決まっていた。

　こんな芸当、それ以外の誰にもできやしないのだから。

「わたくしもあれをやるしかないみたい……」

　決意して、アイーシャは必死の思いで言こと霊だまを唱えた。

「麗うるわしの乙女よ、恐るべき秘教の門を開け給たまえ——」

　直後から、吹き荒れる暴風に雪がまじるようになった。

　そう。女神ペルセポネから簒さん奪だつした権能を反転させたのだ。春と癒いやしをもたらす力は一転して、冬の凍気と死をもたらす力に早変わりする……。

　少女アイーシャはいまや『冬の女王』であった。

　そして、彼女の権能がもたらした冷気によって、荒れ狂う暴風は猛もう吹雪ふぶきに変わった。

　こうなれば、もう怖いものはない。どんなに強い吹雪であろうと、冬の女王を打ち倒せるはずがないのだから。アイーシャはすっくと立ちあがる。

「おふたりはどうしたのかしら……まあ」

　お屋敷がきれいに消滅したおかげで、すぐに発見できた。

　二階の大広間にいたはずのヴォバン侯爵と中国の貴婦人（御主人さまは『羅ら濠ごう教主』と呼んでいた。それが名前なのだろ

う）。ふたりはいつのまにか更さら地ちとなった地面に降り立ち、そろって風の権能を駆使していた。

　あきれたことに、ふたりは大おお喧げん嘩かをはじめていたのだ。

「おふたりともおおおお、もうやめてくださあああああああいっ！」

　羅濠教主とヴォバン侯爵による激しい『風くらべ』。

　轟ごう々ごうとうなる風の音によって、アイーシャがいくら叫んでも一向にとどかない。

　しかし、このままケンカが続けばロンドンの街まで破壊されかねない。神殺しの権能の威力は自分がいちばん知っている。

「こうなったら、わたくしが止めるしかないみたい」

　がんばらなくちゃと自分に言い聞かせる。御主人さまもお姉さまもまったく気づいてなかったようだが、実は――

　アイーシャも神殺しなのである。

　九カ月ほど前、旅行先のギリシアで女神ペルセポネを殺あやめてしまった。

　それが冒険のはじまりだった。その後、『海のシルクロード』にまつわるゴタゴタに巻きこまれて、なんと香ホン港コンにまで連れていかれる羽目となり、そこでもまつろわぬ神と巡り会うことになった。

　菩ぼ薩さつの相を持ち、善なる民衆の守護神であった彼。

　そんな彼を心ならずも殺めなくてはいけなくなった冒険行。今も悲痛な記憶として、アイーシャは鮮明に覚えている。

　実はこの旅のときまで、アイーシャはちょっとした小金持ちだった。

　前の主人が遺産をのこしてくれたのだ。だが、このとき知り合った難民の人々を救うためにポンと多額の寄付をしてしまい、素す寒かん貧ぴんになってロンドンに帰ってきたのである。

「ほんと、あのときはたくさん悲しいことがあったわね」

　こみあげてきた涙を堪こらえながら、ふと気づいた。

　暴れる魔王ふたりを止めるのだから、あの権能も使っておくべきだろう。

「善ぜん果かいまだ熟せざる間は善人さえも悪に遭あう。善果の熟する時に至れば善に遭う。善人には善果あるべし、悪人には悪あつ果かあるべし……」

　民衆の守護神から簒奪した、幸運の権能だった。

　アイーシャが善行を為そうと誓い、その成じよう就じゆにつとめている間、大小さまざまな幸運を得られる能力なのだ。今回の誓いはもちろんこうだ。

「御主人さまとお姉さまを必ず仲直りさせてみせます。このアイーシャに、どうか幸運の助力をお授けください……あら？」

　唱えた瞬間、雪せつ片ぺんの吹き荒れる空から何かが降ってきた。

　ぼとり。早くも積もりだした雪のなかに落ちたのは鋼はがねの棒だった。両端が三つ叉またに分かれている。長さは一フィート（約三〇センチ）ほど。

「たしか御主人さまのだわ。あとでお渡ししないと」

　この暴風で、屋敷のなかから空に巻きあげられたのだろう。

　アイーシャは三つ叉の棒を拾い、エプロンドレスのポケットに収めた。

　そして、この頃——魔王ふたりの決闘はさらに白熱していた。

　ヴォバン侯爵はなんと巨大な灰はい色いろ狼おおかみに変わりはてている。しかし、羅濠教主の方も負けていない。半はん裸らの金こん剛ごう力りき士しを守護神のようにしたがえて、大だい巨きよ狼ろうと化した侯爵相手に一歩も退ひかない戦いぶりだ。

　あんなふたりをどうやって止めればいいのか？

　ちっとも思いつかないが、とにかくやってみよう。決意と共にアイーシャは雪のなかをずんずんと歩き、魔王ふたりのそばに近づいていった。

　そして、できるかぎりの大声で呼びかける。

「おやめくださいませ、御主人さま！　それに羅濠お姉さまも！」

　反応は――なかった。

　羅濠お姉さまの分身である金剛力士はあざやかな回し蹴げりを繰り出す。

　これを胴体に受けて、御主人さまの変身体である大巨狼が吹っ飛ばされる。が、ダメージはさほどない。わざと横に跳んで衝撃を逃がしたのだ。

　その証拠に、大巨狼は四つの足でひらりと着地を決めた。

　しかも、同時に狼の顎あごから雷撃を放つ。対して金剛力士は呪じゅ力りよくを大いに高めて雷の威力にあらがい、逆に消滅させてしまう。

　一進一退の攻防。御主人さまもお姉さまもおたがいしか見ていない。

「おやめくださ～～～～い！」

　やっぱり反応なし。聞く耳持たない。

「すいませ～～～～んっ。おやめくださ～～～～い！」

　三度目もダメだった。アイーシャは肚はらをくくった。もう仕方ない。柄がらではないが――実力行使しか手段はないようだ。

「天と地と闇やみの女神にして、蛇へびの女王よ。畏おそるべき魔女の貌かおを開示し給え！」

　言霊を唱えて、冬の女王としての権能を使う。

　呪力と冷気――無色無形の力が争う両名にまとわりつき、呪じゅ縛ばくしにかかる。さながら獲え物ものにからみつく大だい蛇じや

のように。

「ぬっ!?」

「この権能は一体!?」

　大巨狼がなんとも人間くさくハッとして、羅濠お姉さまも愕がく然ぜんとする。

　しかし、もう遅い。目の前の相手に集中しすぎていた両魔王は〝冬の女王の呪縛〟にからめとられてしまい、自由を失っていた。

　巨大すぎる灰色狼は今、同じほど巨大な『氷の大蛇』の虜とりこであった。

　狼の頸くびや体や四し肢しには氷ひよう蛇だの長い胴がぐるぐると何重にも巻きついて、その動きを拘束している。しかも、囚とらわれたのは大巨狼＝ヴォバン侯爵だけではない。

　羅濠お姉さまとその分身たる金剛力士も同様だった。

　もう一体の『氷の大蛇』がやにわに現れて、お姉さまたちを襲ったのである。

「まさか——あなたの仕し業わざなのですか!?」

　近くまでやってきたアイーシャを、ついに羅濠お姉さまが真正面から見つめた。

　この中国人女性には奇妙な癖くせがあり、なぜか他の人間としっかり向き合おうとしない。アイーシャのことも視界の隅に入れるだけだった。

　極度の人見知りなのかしら、などとアイーシャは思ったものだ。

　しかし今、ふたりの乙女は紆う余よ曲きよく折せつを経へて、ようやく正せい対たいしたのである。

「実はそうなんです。今まで黙っていましたけど」

　ここぞとばかりにアイーシャは胸を張った。

「わたくしもおふたりと同じで、神様の力を持ってる人なんです

よー！」

「なんという——バカげた話だ……」

「そういえば聞いたことがあります。悲劇がゆきすぎると喜劇になる……西洋ではこのような考え方があると……」

　絶望したような声こわ音ねで狼化した侯爵はうなり、お姉さまは悲痛な面おも持もちでかぶりを振る。

　ふたりとも、信じがたい現実と直面した人間そのものという雰ふん囲い気きだった。大巨狼の姿のまま、ヴォバン侯爵はさらに言う。

「まあ、たしかに——その者が神殺しだとすれば、いろいろ不可解だった事こと柄がらも全て説明が付くようになる。だが、しかし」

「まさかあなたがわたくしと同格とは……あまりにも認めがたい」

　なぜか不服そうにつぶやく魔王ふたり。

　そんな両名は今も『氷の大蛇』にぐるぐると巻きつかれている。これはただロープのように拘束しているだけではない。

　蛇の体は極低温の冷気も放ち、魔王ふたりを凍りつかせようとしている。

　大巨狼、そして中華の美女とその守護神——彼らの全身は白く氷結をはじめていた。

　神話の神々や神殺しすらも凍りつかせるからこそ、かくも冬の女王は偉大にして無む慈じ悲ひなのである。

　このままでは低体温症となり、体のあちこちが壊え死し。最後は凍死してしまう。

　その不吉な未来を直感したのだろう。

　囚われの神殺し二名はちらっと探るようにたがいを見つめてから、やにわに呪力を高めはじめた。それもほとんどふたり同時に。

　呪力を最大限に高めて、冬の女王の呪縛に耐えるつもりなのだ。

「おおおおおおおおおおっ！」

「哈ハ――――――――――――――！」

「あ、あのっ。いきなりどうなさったんですかー？　おふたりがケンカをやめて、仲直りしてくれれば、呪縛はちゃんと解いてあげますよ!?」

「そんな真ま似ね、誰がするものか！」

「まったくです。わたくしは自力であなたの呪縛を打ち破り、あなたとヴォバン王をもろともに葬ほうむってみせます！」

「それはこちらの科白せりふだ。そのふざけた娘と羅濠教主、私がまとめて倒す！」

「ち、ちょっと！　おふたりとも落ち着いてくださ～いっ！」

　魔王らしい威厳も吹き飛ぶ、なんとも子供じみた言いぐさだった。

　そう。結局のところ、神々にすら挑みかかる愚おろかさと無鉄砲さが〝神殺しという種族〟の特徴的な気質なのである。

　だからこそ、それは時に度を過ぎた蛮ばん勇ゆうおよび愚ぐ行こうに結びつく。

　ヴォバン侯爵も羅濠教主も常人の尺度でいえば『老境』というべき実年齢。しかし、彼らは神殺しの基準では――やはり、まだ若い部類であった。

　一方、両魔王の反発を前にして、アイーシャは大いに狼ろう狽ばいした。

　荒事が得意ではない彼女。このまま怒れる魔王ふたりを相手取ることになれば、為す術なく打ち負かされるだろう。

「こ、これって結構まずいのかしら～～～～～!?」

　あたふたした瞬間だった。耳元でささやき声を聞いた。

（いいことをおしえてあげる）

「！」

　幼い男の子の声。アイーシャはハッとした。

（もし、ね。あのひとたちを下に――じめんの下におとしてくれたら、あとはぼくたちでなんとかできるかもしれないよ）

「地面の下……地下ってことですね!?」

　一も二もなく、即座にアイーシャはうなずく。

　いきなり聞こえた怪あやしげな声のアドバイスだというのに、それを気にも留とめない。

　のちにカンピオーネという呼称が定着する人々――その一員であるアイーシャにも、もちろん愚かさと無鉄砲さという度しがたい資質はそなわっていたのだ。

「これもきっと幸運のお導きだわ！」

　彼女は疑いもせずにつぶやいて、とっさに言霊を唱えた。

「髪美しき女神の娘よ――母なる大地の宮を今こそ開き給えっ」

「地震か――いや!?」

「これは地じ母ぼ神しん……冬と死を司つかさどる女神の力！」

　ヴォバンが吠ほえ、羅濠お姉さまが瞠どう目もくする。

　魔王ふたりの足下――地面がいきなり大きく裂けたのだ。

　狼として巨大化したヴォバン侯爵、そして半裸の巨人である金剛力士をしたがえる羅濠お姉さま、この両名を呑のみこんでしまえるほどに長大な亀き裂れつだった。

　そして、おそろしく深い。この裂け目は地の底の冥めい界かいに通じているのである。

　アイーシャが最初に殺めた女神ペルセポネ。

　彼女は心やさしい春の乙女なのだが、冥めい府ふ神しんハーデスの妻でもある。冬が来ると地底の冥界に下りて、無慈悲な死の女王

となってしまう。

　その二面性を体現するアイーシャの権能には『冥府落とし』という切り札があった。

　今、その犠牲となった両魔王が裂け目に——地の底へと落ちていく。だが、すんなりと事は運ばない。

「ふん。猪ちよ口こオざいな術を使うが！」

「わたくしに飛ひ翔しようの心得がないと思うのは早はや合が点てんというものです！」

　落下しながらもヴォバン侯爵は巨狼への変身を解き、風を呼んだ。

　身軽な人間の姿にもどって、己の肉体を上へ運ばせようとしたのだ。そして、羅濠お姉さまはもっと単純な手を使った。

　守護者の金剛力士を消して、飛行の術で急上昇しようとする。

　——冥府落としの地割れに落ちれば、ふつうはそれだけで肉体が仮死状態になる。

　しかし、ふたりともアイーシャが仕掛けた〝氷蛇の呪縛〟を堪こらえるため、最大限に呪力を高めている最中だった。それで堪たえられたのだろう。

「ダ、ダメ押しが必要なんだわっ」

　とっさに思いついて、アイーシャはハッとした。

　ちょうど手頃な品物がエプロンドレスのポケットに入っている。両端が三つ叉に分かれた鉄製スティック。ついさっき拾ったものだ。

　実はこれを拾ったとき、やけに危険そうな道具だと感じたのである。

　その勘かんにまかせて、ありったけの呪力を注ぎこんだ棒を「えいっ！」と地割れのなかに放り投げたら——三つ叉の棒はバチバチ放電を開始。

　そのまま極大の雷撃となって、ヒュンと落ちていく。

　これがちょうど、地上へ飛び出そうとしていた魔王ふたりを襲った。氷蛇による呪縛、冥府落とし、そこに神の雷撃が加わった形である。

「金こん剛ごう三さん鈷こ杵しよ、だと!?」

「疾チツ！」

　これだけ畳みかけられてもどうにか堪えてしまうのだから、それだけ両名はすさまじい呪力を持っていたのだろう。特に羅濠お姉さまはとっさに方ほう術じゆつで三つ叉の棒を手元に引きよせ、摑つかみ取ってしまった。

　お姉さまの右手のなかで棒はついに放電をやめ、おとなしくなる。

　しかし、このとき——アイーシャが開いた地割れの奥底から、すさまじい吸引力が発生しはじめた。万物を吸いよせ、引きこもうとする力だ。

　地上の大気までも吸引するため、地割れの底に向かって強風の流れが生じる。

「「!?」」

　ヴォバン侯爵と羅濠お姉さまがそろって愕がく然ぜんとする。

　ふたりは為す術なく吸引力に囚われて、地の底に落ちていった。

　たび重なるアイーシャの攻撃（？）にさらされていたせいで、これをしのぐほどの余力はもう残されていなかったのだろう。

　ちなみに、アクシデントの張本人はというと。

「あら？　今度は一体、なんの神様が出てきたのかしら？」

　首をかしげていた。アイーシャの権能が起こした現象ではなかったのだ。

　そして、この直後。当の彼女が吸引力につかまってしまった。

「きゃあああああっ！」

　自みずから作った地面の裂け目に呑みこまれて、ひゅーんと落ちていく。

　尚なお、この吸引力は三人のカンピオーネを地底の冥府ではなく、この地上とは異なる世界に運ぶための現象なのだが——

　それを彼らが知るのは、もうすこし先の話である。

9

「あ痛いたたたた……」

　地の底に落ちたはずのアイーシャ。

　しかし、気づけば草の上でうつぶせになり、倒れていた。

　体の節ふし々ぶしが痛む。が、それだけだ。骨折をはじめ深刻な重傷は負ってないようだ。地の底にある冥めい界かいまで落ちた割には、ずいぶんと軽傷のような……。

「あらあら、まあまあ」

　むくりと身を起こして、アイーシャは感かん嘆たんした。

　目の前に『春』が広がっていた。生おいしげる草は青々とみずみずしく、朝あさ露つゆの輝きをその葉に宿している。そこかしこで小さく可か憐れんな花々が色とりどりに咲き乱れていた。

　見わたすかぎりの野原だった。

　近くに人家はない。人工物さえ見当たらない。

「とても素敵だけど……どうしてこんなところにいるのかしら？」

　アイーシャは起きあがり、近くを歩きまわってみた。

　そよそよと吹く風が肌をやさしく撫なでて、なんともくすぐった

い。

　東の空から降りそそぐ陽ひ差ざしも程よいあたたかさ。いつまでもここにいられたらいいのにと思えるほど、居心地のいい場所だった。

　真冬の大都会ロンドンにいたはずなのに、どうしたことか？

　ヴォバン侯こう爵しやく邸ていのまわりはたしかに自然ゆたかな郊外だったが、あんな猛もう吹雪ふぶきに襲われていて、春の足音はまだまだ遠かったはずだ。

　アイーシャが首をかしげたとき。

「おねえさん、もうだいじょうぶそうだね」

　かわいらしい男の子に声をかけられた。

　侯爵とお姉さまが争っていたとき、聞こえたのと同じ声だ。

　見れば、足下に身長一〇インチ（約二五センチ）ほどの小人が来ていた。人間でいえば一〇歳程度の子供といった、幼い容よう貌ぼうだ。

　緑色の服に先のとがった帽子をかぶっている。

　こんな男の子がひとりだけでなく、七人もいるのである。

「もしかして、あなたたちが」

　アイーシャはかがみこみ、男の子たちの目をのぞき込むようにした。

「わたくしをこの場所まで運んでくれたのですか？」

「ぼくたちというか」

「ぼくたちのおやぶん。妖精の国の女王さま」

「ぼくら、みてのとおり妖精なんだ」

「あのわるい魔王のおやしきにつかまってたんだよ」

悪い魔王。ヴォバン侯爵のことだろう。そう気づいて、アイーシャは微苦笑した。

一方、七人の小人たちは口々に発言を続ける。

「あいつのてしたの魔法使いが〝けんきゅう〟っていうのに」

「ぼくたちをつかっていたの」

「ぼくら、にげだすチャンスをずっと待っていたんだ」

「で、おねえさんたちがちょうどけんかをはじめて。これをのがしたらチャンスはもう来ないとおもって、妖精王さまにおいのりしたの」

「どうか妖精境きようの門をひらいてくださいって」

「でも、ぼくたちの力じゃ地上に門をよびこめなかったから、おねえさんにじめんを割ってちょうだいっておねがいしたんだ」

「それでじめんの下にできてた門がみんなをすいこんでくれたんだよ」

ひととおり聞いて、アイーシャは事態を飲みこんだ。

三つ叉またの棒と同じく、これも幸運の権けん能のうが授けてくれた縁なのだろう。おかげであの窮きゆう地ち、どうにか乗りきることができた。

「御主人さま——悪い魔王とケンカ相手の女性はどこにいったのかしら？」

「どこか」

「おねえさんみたいに、妖精境のどこかにおちたはず」

今いる場所というか世界、『妖精境』というらしい。自分が無事なくらいだから、御主人さまもお姉さまもきっと問題ないだろう。

そう考えてから、アイーシャはべつのことを思いついた。

せっかく妖精境とやらに来たのだし、いっそこの世界を旅していったらどうかと。

しかも、七人の小人妖精までそそのかすように言いはじめる。

「ねえ、おねえさん。いっしょに妖精の城へいかない？」

「ぼくらの女王さまがすんでいるところ」

「ふつうのにんげんは誰もたどりつけないところにあるけど」

「ぼくらがあんないしてあげる」

「えっ、本当ですか!?　是ぜ非ひお願いします。うれしいです！」

思いがけない申し出に、アイーシャは身を乗り出した。

この『妖精境』、人間の魔術師が言うところのアストラル界／幽かく世りよである。

妖精王と呼ばれる幾いく柱はしらかの神々が支配者として君臨し、さらに〝かつてまつろわぬ神であった存在〟なども隠いん棲せいする神秘の領域だった。

また、アイーシャを誘った七人の小人、決して善良な妖精などではなく。

実は邪じや悪あくな黒小人の一族で、たまたま見つけた間抜けそうな神殺しを生いけ贄にえにでもしてやろうかと、最初からだますつもりなのであった。

連れていかれた先で、アイーシャは妖精の女王と出会う。

その後、ゴタゴタと紆う余よ曲きよく折せつの末に『妖精の門を開く権能』が魔王アイーシャの手中に転がりこむのだが……それはまたべつの物語である。

また、すこし前にアイーシャはいくつかの幸運を権能によって得ていたが。

その代償として邪悪な妖精との出会いが起きたと悟るのも、その騒動の渦か中ちゆうであった。

結局のところ、唐突な幸運をもたらす力は同じ唐突さで不幸や災

さい厄やくも呼びこみ、あれこれバランスを取ろうとするのだ。

　しかし、この頃のアイーシャはまだ未熟な一七歳の乙女。

　そんなことにはちっとも気づいていなかった。

10

　時は流れて、一八六〇年。

　三人の神殺しが一堂に会した吹雪ふぶきの夜。あの一幕はもう何年も前のことだ。

　デヤンスタール・ヴォバンにとってはとっとと忘れ去りたい記憶なのだが、どうしても頭から拭ぬぐい落とせないのも事実であった。

　同族ともいうべき神殺しと出会うだけでも珍しいのだ。

　しかも、あのとき出くわした二名はいずれもこの上ないほどに印象的だった。

　特にアイーシャとかいうインド生まれの神殺し――彼女の素す性じようを見抜けなかったことは、本当に忌いまわしい失敗である。

　おそらく自分だけでなく、中華武ぶ林りんの羅ら濠ごう教主にとってもそうだろう。

　だが、仕方ないではないか。あんな頭のゆるそうな小娘が神を殺あやめたなどと、どうすれば思いつくというのだ……。

　そう自分に言い訳するたび、「ちっ」と舌打ちしたくなる。

　ちなみに、あのとき。アイーシャの権けん能のうに〝してやられた〟あと、ヴォバンも羅濠教主もアストラル界に引きこまれる形となった。

　その後、ヴォバンはいくつかの冒険を経へて、地上へ帰還を遂とげた。

羅濠教主も似たような方法で帰還したのだろう。あるいは異世界転移の魔術でも使って、さっさと地上に直行したか。ときどき中国方面から彼女のうわさが届けられる。

だが、あのアイーシャという娘の話はまったく聞かない——。

「どこかで野の垂たれ死じにでもしたか」

つぶやいてから、ヴォバンは悩ましい思いでかぶりを振った。

そんなかよわい女が神殺しなどになるはずない。地上かアストラル界かは知らないが、どうせどこかで能天気に暮らしているのだろう。

「まあ、いい。二度と会うつもりはないのだから、これ以上の関かかわりも生まれまい」

ふんと吐き捨てて、この件はもう忘れることにする。

あれから『ヴォバン侯こう爵しやく』の暮らしぶりも変わってきている。

ロンドンに定住する生活にも飽あきたので、今は欧おう州しゆう各地の大都市を転々としている。ベルリン、パリ、バルセロナなど、刺激的な住すみ処かはいくらでもあった。産業の発展にともない、ヨーロッパ列強の諸都市はまさしく現在進行形で変容を続けているのだ。

変わったといえば、魔術の世界も変わりつつある。

ヴォバンがバッキンガム宮殿を気まぐれに表敬訪問した一件。

あれを受けて、ロンドンの魔術師たちは『賢けん人じん議ぎ会かい』なる組織を結成したらしい。暴ぼう虐ぎやくなる神殺しの魔手から女王を守る云うん々ぬんというお題目を並べていると聞いた。核となったのはディオゲネス・クラブという老いぼれ魔術師どもの秘密クラブらしい。

そして、カンピオーネ。

かつてとある神殺しに仕つかえていたイタリア人が論文を発表したらしい。

神を殺めて、その権能を簒さん奪だつした魔王たち——彼らがいかなる存在かを詳細に語った革新的な内容だという。

この畏おそるべき魔王たちに王者の称号『カンピオーネ』を捧ささげるべし。

そうも綴つづられていたとか。意外と影響力があるらしく、このところヴォバンもカンピオーネと呼ばれる回数が増えてきた。

「まあ、たしかに」

にやりと笑って、ヴォバンは肩をすくめた。

「魔術師の王ロード・オブ・メイガスよりはずいぶんと簡潔で言いやすい」

彼は今、バカンスの途上であった。都市部どころかヨーロッパまで離れて、アフリカの東海岸にやってきている。

蒸気船の甲かん板ぱん。転落防止用の手すりにもたれて、風に吹かれている。

船はケープタウンから出航して、ザンベジ川を遡そ航こう中なのだ。とあるうわさをジェラール子し爵しやくが聞きつけて、ヴォバンに注進したことが発ほつ端たんだった。

『ザンベジ川上流部の山中深くに峡きよう谷こくがあってね。そこにはたくさんの洞ほら穴あながあり、太たい古この呪じゆ術じゆつを伝える人々がささやかな王国を築いているんだよ。数カ月前、この地に迷いこんだイギリス人が……女神を見たと言うのさ』

『彼女はすばらしい美び貌ぼうで、しかも、神秘の力を持っている』

『あらゆる怪け我が人にん——死にかけた者でさえ、祈りを捧げるだけで癒やしてしまう。それもあってか、王国の民たみはみんな女神にぞっこんらしい。彼女に頼まれれば、どんなことでもかなえようと努力を惜しまない。彼女のためなら、よろこんで死ぬ……』

『このことを報告してくれた男も今はロンドンにいるわけだけど、うっとりとした目で言うのさ。もう一度、ひと目だけでも女神に会いたいって』

『なあデヤン。もしかすると、まつろわぬ女神が新たに降こう臨りんしたのかもしれないぞ！』

　その真しん偽ぎ、バカンスのついでに確認するのも一いつ興きようか。

　気まぐれを起こした結果、ヴォバンは今、アフリカの地で船旅をしている。

　上う手まくすれば、何処いずこかの女神を相手に一戦交えることもできそうだと。尚なお、これはむしろ余談かもしれないが——二週間後、東とう欧おう出身のカンピオーネは知りたくもなかった真相を知ることになる。

　ザンベジ川上流の奥地には女神などおらず、代わりに旧知の少女がいると。

　彼女は数年前と変わらぬ笑顔で再会をよろこぶのだが、その権能は数年前よりもさらに厄やつ介かいかつ傍はた迷惑な方向に進化を遂げているのだ。

　そして痛つう感かんすることになる。この少女こそ、ある意味で己おのれの天敵なのだと。

　しかし、それは今の時点ではわからない。

　若きヴォバン侯爵はゆったりと船旅を楽しみつつ、まだ見ぬ大敵が世界のどこかで己を待ち受けていればいいのだがと思いにふける——。

第10話　内戦前夜

　救きゆう世せいの英雄、この世の最後に顕あらわれる王。

　ついに明かされた真の名はラーマチャンドラ。しばしばラーマとも略される男との死闘から半日近くが経過していた。

　すでに深夜零れい時じを過ぎて、日付も変わっている。

　携帯電話で時刻をチェックしたあと、おもむろに草くさ薙なぎ護ご堂どうはつぶやいた。

「もう体もよさそうだし……家に帰るか」

「えっ？」

　きょとんとしたのはリリアナ・クラニチャールだ。

　東京都文ぶん京きよう区くのマンション。エリカ・ブランデッリの住まいである。

　今、リリアナとふたりで客間にいる。だが、すこし前まで護堂はここのベッドに横たわり、ラーマとの激闘で死にかけた体を休ませていた。

　というより、仮死状態だった。

　が、数時間の睡眠を取ることで、いまや完全なる健康体にもどっている。

　ウルスラグナ第八の化け身しん『雄お羊ひつじ』を使ったのだ。

　戦いで汚れ、破けた衣服の着替えも済ませてある。それで体調に問題ないのだから、さっさと帰宅すべきだろう。

　そう決心した護堂へ、リリアナがあきれたように忠告する。

「もうこんな時間ですし、今夜はこの部屋に泊まられてはいかがですか？　あなたは昼間、胴体を串くし刺ざしにされたばかりなのですよ」

「いや、でもさ。本当にもうなんともないんだ、俺の体」

「そうなのだろうとはわたしも思いますが、戦いの疲れだってあるはずです。このまま朝までゆっくりなさってください」

　忠実でまじめな女騎士らしい、常識的な意見だった。

　だが、護堂には護堂でもっと尊重しておきたい良識がある。

「でもなあ。だからってエリカの……女子の家に泊まっていくのも問題あるだろ」

「べつにふたりきりというわけではありません。空あき部屋もあることですし、わたしと清せい秋しゆう院いん恵え那なもごいっしょするつもりです」

「そう言われると、決心が鈍にぶるけどなあ」

　本当のところを白状するなら、心身共に疲れはてている。とっととベッドにもぐりこんで、三日は寝ていたい気分ではあるのだが。

　それでも護堂は言った。

「朝帰りなんてしたら、静しず花かのやつがぎゃあぎゃあうるさそうだ。おとなしく家にもどって、自分の布ふ団とんで寝ることにするよ」

「世界の命運よりも妹君との関係に悩むあたり、いかにもあなたらしいですね」

　はあとリリアナはため息をついた。

「でも、あなたの騎士、そして執しつ事じでもある者として申し上

げます」

　いずれ草薙護堂が『魔王』として一家をなしたとき、副官／助言役／執事として家中を取り仕切るはずの人材こそリリアナ・クラニチャールだと言う人もいる。

　そんな少女はいかにも世話焼きな口調で告げた。

「もし無理にでも出ていかれるおつもりなら……私とエリカでこの部屋のドアに魔術の鍵かぎをかけて、閉じこめて差しあげますからね。脱出などあきらめて、こちらのベッドで朝までゆっくりおやすみください」

「監禁ってのは物騒だな」

「心配してもらえるうちが花だとも言います。自慢の不死身ぶりは棚たな上あげして、すこし人間らしくされてはいかがですか？」

　冗談めかしたリリアナの薦すすめに、護堂は苦笑した。

　厚意から言ってくれることなので、やはりありがたい。彼女のアドバイスどおりにしようかと思いかけた——ときだった。

　コンコンとひかえめにドアがノックされた。どうぞと声をかける。

「失礼いたします。おかげんはいかがですか、護堂さん？」

「リリアナのやつはきちんと休めって言うんですけど、割と問題ないです」

　入ってきたのは二は〇た歳ち前後の女性だった。

　アリアンナ・ハヤマ・アリアルディ嬢。魔術結社《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》の構成員ながらエリカの個人助手をおおせつかった黒髪の美女だった。

　その業務内容はほとんどメイドで、今もメイドのエプロンドレスを着用している。

　そして、このとき——ドアが開け閉めされた一瞬。

　護堂はおそろしく不吉な気配を感じ取った。

　いや、かぎとったというべきか。ちょっぴり刺激的な異い臭しゅうがドアの外からただよってきたのである。常人なら気づかないかもしれないが、魔王カンピオーネの鋭い五感には十分すぎるほどの危険シグナルだった。

　しかし、そんな兆ちよう候こうとは裏腹に、アリアンナ嬢は晴せい朗ろうに言う。

「いけませんよ。今日、すごい怪け我がをされたというお話ではありませんか。今夜のところはきちんと朝までお休みください。そんなふうに起きあがったりもされないで」

　ベッドを抜け出し、着替えも済ませていた護堂への忠告その二だった。

　年上の女性にまで言われると、さすがに抗弁しにくい。護堂が恐縮したところで、アリアンナ嬢はさらに言う。

「そうそう。エリカさまからご伝言があるんです」

「伝言？」

「はい。結社の仲間から急な呼び出しがあって、出かけてくると。今夜はもどらないかもしれないから、先に休んでいてほしいとおっしゃっていました」

　エリカが忙しいのはいつものことだ。

　夜遅くまで外出して、魔術関連の知り合いたちと会う日もあるという。特に今夜は『最後の王』が顕けん現げんした直後なので、その関係の呼び出しかもしれない。

「あと、清秋院さまもご用事ができたとかで、お帰りになりました」

「あいつまで、ですか」

「なんでも正史編へん纂さん委員会の方とお話があるそうで」

　委員会の人間――もしかしたら、沙さ耶やの宮みや馨かおるだろ

うか。

　関東地方が事件の中心地である以上、むしろ正史編纂委員会の方がエリカなどよりも圧倒的に忙しくなるはず。だから、それもおかしなことではない。

　護堂はより緊急に究明すべき問題について、訊たずねることにした。

「わかりました。それよりもアンナさん、もしかして今……何か作ってます？」

「よくおわかりですね！　そうなんです。護堂さん、昼の戦いでお疲れだと思って、実はお夜食を作っていました。わたしたちの結社に伝わる秘伝の調合を応用して、どんな疲労も一口で吹き飛ぶはずの特製スープを煮込んでいるところで――」

　恐るべき告白を聞いて、護堂はすぐに目配せした。

　もちろん、銀髪の女騎士へ向けて。数カ月前、奥おく秩ちち父ぶの山中から熊肉という食材が届けられた日の夜、アリアンナ嬢は誰よりも独創的な鍋料理を披ひ露ろうしてくれた。

　あの夜を当然覚えていたらしく、リリアナは即座に言う。

「残念だが、草薙護堂もそろそろ出発しないといけない。今夜中に帰らないと、妹君の静花さんが心配するからな……」

「まあ、そうなんですか？　じゃあ、お夜食はわたしとリリアナさんで――」

「ち、ちなみに、わたしも護衛のために同行する！　そういうことだから、そろそろおいとましようと思う。いろいろ世話になったな！」

　どんな疲労も吹き飛ぶスープ。

　その効力はさぞたいしたものなのだろう。しかし、意識と健康まで飛ばしてしまったら、元も子もないというものだった。

かくして十数分後。

「まさに危機一髪でしたね……」

「アンナさんの煮込み料理は本当にやばいからな……」

護堂とリリアナは文京区根ね津づの夜道をふたりで歩いていた。

二月の深夜。冬の季節、やはり星がきれいに見える。だが、もちろん不都合もあった。

「もうすぐ三月だってのにまだまだ冷えるな」

「でも、すこし安心しました。ラーマ王子が健在なら、もっとあたたかい夜になったでしょうから……」

「そういえば、そうだった」

リリアナの指摘で護堂はうなずいた。

盟めい約やくの大だい法ほうによって究極の戦士と化したラーマチャンドラは〝ただそこにいるだけ〟で周辺地域の温度を上昇させていくのだ。

居続けるだけで地球温暖化を促進し、世界を破滅させる存在。

それもあって、彼は〝この世の最後に顕れる王〟と呼ばれるのだろう……。

全てのカンピオーネの宿敵であるという。だが、護堂は敵てき愾がい心しんを抱けない。彼の錆さびをふくんだような美び貌ぼうを思い出して、かぶりを振る。

あのデタラメすぎる強さとは、もう二度と戦いたくない。

ああいう気持ちのいい男とも、もう二度と戦いたくない。

二重の意味で『宿敵』とは呼びえない青年のことを思ってから、護堂は忠実なる騎士へ言葉をかけた。

「こんな時間まで付き合わせて悪いな。リリアナのうちまで送っていくよ」

「バカをおっしゃらないでください。護衛をしているのはわたしの方です。あなたのご自宅まで、責任を持って見送らせていただきます」

「でも、女の子に送ってもらうってのもなあ」

「女子としてではなく、騎士としてのつとめです、これは」

　エリカのマンションから草薙家とリリアナの家は近い。

　かんたんに歩いていける。ちなみに、この辺は下町風ふ情ぜいの残る静かな界かい隈わいなので、いつまでも夜遊びしているような輩やからもいない。

　物騒な場所柄がらではまったくないが、すれちがう人もほとんどいなかった。

　まあ、見送りがいるに越したことはない夜道ではあった。そんな道中、ふとリリアナが表情を変えた。急にもじもじと恥ずかしそうにしたのである。

「どうかしたのか、リリアナ？」

「あ、いえ……」

　つぶやいてから、彼女は——唐突に身を寄せてきた。

　それだけでなく護堂の左腕を取って、そのまま歩みを続ける。

「!?」

「お寒い……ということでしたから。これも騎士のつとめです」

「き、騎士として？」

「はい。だから草薙護堂、何も言わずにこのまま……」

「あ、ああ」

　リリアナはぎゅっとしがみつくようにして、護堂の左腕に密着している。

　当然、そちら側はあたたかい。しかも、他人とこうしてふれあう

とき特有の安あん堵ど感、充足感のようなものが心を満たしてくれる。

　護堂だけでなく、リリアナもそれを感じているはずだった。

　それにしても――。

　騎士とその主という名目のもと、どれだけの行為を重ねてきただろう？

　リリアナとふたりきりになったときだけ、こういう空気が生まれる。どこかうしろめたい気持ちになるのに、そのくせ、それがかえってふたりの激情を燃えあがらせるという独特の雰ふん囲い気きであった。

　ふたりきりで腕を組みながらの夜歩き。

　気づけば、いつのまにか草薙家のある商店街の前まで来ていた。

　この通りに入っていけば、すぐに自宅へもどれる。しかし、護堂は相方の目を見た。リリアナは何かを訴えかけるように見つめかえしてくれた。

「もうすこし……歩きたい気分だな」

「き、奇遇ですね。実はわたしもです」

　かくして、ふたりは根津三丁目の商店街前を素通りした。

　結局、根津神社のある町内の外れの方まで歩き、さらに千せん駄だ木ぎの団だん子ご坂ざか界隈まで来てしまった。もちろん、ずっと腕を組んだままだ。

　途中、コンビニであたたかい緑茶とミルクティーを買った。

　店を出たあと、どちらからともなく自然に腕を組んで、ふたたび歩き出した。

　ふたりはあまり広くない公園に入って、そのベンチにすわって、飲み物の缶を開けた。そうして寒空のもと、休憩することしばし――。

「ところで、昼間はあわただしくて、確認できなかったのですが」

　おもむろにリリアナが言った。

「その……ラーマ王を切り裂く言こと霊だま、みごと手に入れられて、あなたは幽かく世りよから帰還されました。お供は万ま里り谷や祐ゆ理りと清秋院恵那のふたりで」

「あ、ああ」

　またしても危険の兆候を感じて、護堂の声がすこしうわずった。案あんの定じよう、リリアナはこちらの急所を的確に突いてくる。

「ということは、お相手はやはり――」

「あ、いや！　そんなことはどうでもいいじゃないか！」

「なるほど。もしかしてと可能性だけは考えていましたが……両方でしたか」

「!?」

　護堂は愕がく然ぜんとして、どうしてそれをという目でリリアナを見つめた。

　すると、鋭すぎる追及者はハァとため息をついて、あきれたようにささやく。

「実を言うと、今のはただカマをかけただけなのですが」

「えっ!?」

「もう十分です。それはさすがにないだろうとこちらが勝手に思うところへ、あなたは軽々と踏み込んでいかれる。いつもどおりだったというわけですね」

「…………」

「でも、ですね。草薙護堂、あなたには義務だってあるんです」

「義務？」

　不意にリリアナの口調が――変わったように思えた。

　堅苦しい騎士のそれから、拗すねた女の子のような口調に、いきなり。

「ええ。ご存じですか。複数の妻を持つことが許された宗教の教義には、このようにも記されています。汝なんじ、全ての妻を平等に愛せよと」

「…………」

「あなたは今日、媛ひめ巫み女こふたりと事に励まれました。そして、わたしの推測が正しければ……すこし前にサルバトーレ卿きようを追いかけたとき、エリカとふたりだけでサルデーニャ島に一泊されている。そのときにも、もしかして――」

　糾きゆう弾だんというには、あまりに甘やかすぎる声音でリリアナはささやく。

　ふたりだけで深夜の公園でベンチにすわり、じっと見つめ合っている。ほんのすこし手をのばせば、彼女の体にもう一度さわることができる。

「わたしだけ、のけものはいやです……」

「リリアナ」

「あっ」

　ここまで言われて、無視することなどできない。

　女騎士の華きや奢しやな体をいきなり、有う無むを言わさずに引きよせて、護堂は自分の膝ひざの上に乗せてしまった。そのうえで彼女の妖精めいた美び貌ぼうを見つめて、唇くちびるを寄せる。

　もちろん、リリアナはすぐに両目を閉ざしてくれた。

　ふたりの唇が合わさる。

　くちゅくちゅと唇と唇の粘膜を交まじわらせ、唾だ液えきを交換し合う。

　おたがいの唇だけでなく舌までも愛いとおしさにまかせて吸いつき、舐なめ、味わい、熱く濃密な接せつ吻ぷんをふたりで存分に愉

たのしむ。

　その間、護堂はかたくリリアナの体を抱きしめていた。

　膝の上に乗っている少女は決して肉付きゆたかとはいえないが、十分以上にやわらかな感触で、しかも女性らしいメリハリの利きいた体つきだった。その肢し体たいを抱いているだけで、得えも言われぬ心地よさを味わえた。

　リリアナの方も護堂にぎゅっとしがみついている。

　護堂が激しい口づけで彼女の唇に吸いつけば、より激しい唇の動きと舌使いでそれに応こたえて、しがみつく力をさらに強くしてくれる。

　そうして何分もキスをし続けて、ふたりはようやく唇を離した。

　今までほんの一、二秒、中断することはあったが、ついに息が続かなくなったのだ。荒い呼吸をととのえるため、はあはあとせわしなく呼吸を繰りかえす。

　深夜の寒さのせいで、ふたりとも息が白い。

「あの……こんなことを言えば、騎士失格かもしれませんが」

　とろんとした目つきでリリアナはつぶやいた。

　いつでもキスを再開できる。それほどの近さで護堂と見つめ合いながら。

「今夜、あなたを帰したくありません。ずっと……ふたりだけでいたいです」

「俺の方はそうじゃない……って言ったら、ウソつきになるな」

　ささやき合ってから、ふふっという微笑も同時に洩もらす。護堂もリリアナもおたがいを求める気持ちがひどく高まっていた。

「わたしの家に、いらっしゃいますか？」

「それもいいかもな——って、リリアナ」

　不意にハッとして、護堂は言った。

「ええと、その、そっちにはほら、カレンがいるだろう？」

「あ……っ。たしかに、そうでしたね」

　専属メイドにして、魔女の後輩でもあるカレン・ヤンクロフスキ。

　リリアナの家に住みこんで働いている少女のことを思い出した。まだ十代前半のくせに世なれていて、しかも、詮せん索さく好きで冷やかし好き。

　一筋縄ではいかないカレンの存在がふたりの冷静さを回復させた。

「…………」

「…………」

「そろそろ家にもどるか」

「そう、ですね。今日はその方がよさそうです」

　名残なごり惜おしいような、これでいいような。微妙な気分でぼんやりと護堂がつぶやけば、リリアナもくすりと苦笑して相づちを打つ。

　ふたりとも、落ちつくべきところに落ちついた感じはたしかにあった。

「そうだ。これを忘れるところでした」

　不意にリリアナがポケットを探さぐり、黒い鏃やじりを取り出した。

　鋼鉄製である。一見、何の変哲もないくせに、不気味な禍まがまがしさをまとっている。幽世から帰還するとき、玻は璃りの媛ひめから贈られた品物だった。

「あなたが持っていたものです。これはもしかして……」

　女騎士の鋭さを取りもどして、リリアナは言った。

「古代ガリアで見た鏃と同じものではありませんか？　カンピオー

ネの強きよう靭じんな肉体をも悶もん死しさせる、ラーマ王子の毒矢に使われていた――」

「ああ。実は幽世で渡されたんだ。俺の役に立つだろうって」

「！」

　リリアナが愕然とする。さすがに鋭い。

　これが『役に立つ』はずの状況を瞬時に想像してみせたのだ。護堂は忠実なる騎士にうなずきかけて、ため息と共に言った。

「これからたぶん、俺たちカンピオーネ同士でやり合うことになるだろうな。誰かひとりがラーマと戦えばいいって、その挑戦権を取り合う感じで」

　東京スカイツリーの天望デッキ。

　この場所で、羅ら翠すい蓮れんは昇る朝日を冷然と眺めていた。

　ラーマ王一党との戦いから一夜明けて、早朝だった。特別に早起きしたのではなく、この刻限にはいつも起き床しようしている。

　太陽は夜明け直後が最も清せい澄ちような気を放つという。

　その陽ようの気を取り込むため、あえてこの時間に内ない功こうを修行するのである。

　地上三五〇メートルの眺望のなか、東の空から神こう々ごうしい太陽がゆっくり昇ってくる。まあまあ程度の絶景というべきだろう。

　羅翠蓮は自力で空を飛び、いつでもこの高みに昇ることができる。

　こんなに大がかりな塔をわざわざ建てなくとも、気が向けばいつでも似たような朝日を見物できる。

「わざわざ都を見おろすために、このような代しろ物ものを造るとは……なんと愚おろかしい」

「まったくです。師し父ふのおっしゃるとおりでございます」

　追つい従しようしたのは、羅翠蓮唯ゆい一いつの直じき弟で子し・陸りく鷹よう化かだった。

　師と共にいるとき、必ず夜明けの練れん功こうに付き合う。それがこの師弟の不ふ文ぶん律りつだった。ちなみに、羅濠教主のお膝ひざ下もとたる中華圏にも同じような高層タワーは複数あるのだが、もちろんそのことは一言たりとも報告していない。

「ところで鷹よう児じ。ひとつ指示があります」

「うけたまわります。弟子陸鷹化になんなりとお申し付けください」

「わたくし以外の魔王が今、どこで何をしているのか……聖教の全配下に通達して、細大漏らさず報告させなさい」

「承知いたしました」

「特に綿密に調べるべきは——あの魔女。アイーシャ夫人です」

　かしこまりました、と答えつつ、陸鷹化は軽く目をみはった。

　現在、地上に君臨するカンピオーネは七人。そのなかで最も戦闘力が低いのは、まちがいなくアイーシャ夫人だろう。

　もちろん、それだけで魔王たちの恐ろしさを測れるものではない。

　しかし、天下の羅翠蓮が真っ先に彼女を警戒せよと言い切るとは……。陸鷹化の表情に出た意外さを読んだのか、麗うるわしき魔教教主は言う。

「あの魔女はおまえたちが思っている以上に危険で厄やつ介かいなのです。わたくしも何度、煮え湯を飲まされたことか……」

「あの方が師父を追い詰められたのですか。それも何度も！」

「ええ。思い出したくもない過去でしたが、そうも言ってはいられません。いくさがもうすぐはじまるのですから」

「いくさ——アイーシャ夫人との？」

「いえ。全ての神殺しを相手にする大いくさです」

　驚きよう愕がくの叫びを洩らしそうになって、陸鷹化はどうにか堪こらえた。

　そのような粗そ相そう、羅翠蓮の前で絶対にすべきではない。代わりに澄まし顔でうなずき、淡々と訊たずねる。

「では、叔お父じ上うえとは共闘するという形に？」

「それについては……考えがあります。たしかに義あ姉ねと義弟おとうとが手を取り合い、共通の敵を打ち破るいくさもすばらしいでしょう」

　なぜか羅翠蓮の美び貌ぼうに憂うれいの影が現れていた。

「しかし、あえて義姉が義弟の前に立ちはだかり、死力を尽くして競い合うことで、ふたりはより美しい絆きずなで強く結ばれる——。そのようないくさもあるはずです」

「……へっ？」

　あまりに予想外な言葉を聞いて、陸鷹化はきょとんとした。武ぶ林りんの麒き麟りん児じともあろう者にしては、少々間抜けすぎる声だった。

「……それはつまり、叔父上とも敵同士になるってことですか？」

「無論です。一千の言葉を費やすよりも、たがいに拳こぶしひとつで殴なぐり合う——そのようなひとときの方がより多くの気持ちを伝えてくれるもの。あの子もきっと海より深き義姉の愛を卒そつ然ぜんと悟り、感動の涙を流すことでしょう」

「……殴り合った結果、叔父上が死ぬって未来もありうるような」

「それはまあ、たしかにありうるでしょう。しかし、これはラーマ王と戦うべき者を決めるための大いくさ」

　フッと羅翠蓮は微笑ほほえんで、来きたるべき戦いに思いを馳はせる。

「道なかばで斃たおれるのであれば、そこがあの子の限界というだけ。要いらぬ心配は無用というものです」

　まもなくはじまる、魔王カンピオーネ七人による最大の内戦。

　ある意味で、ラーマ王子をもしのぐ最大の雄ゆう敵てきが草薙護堂の前に立ちはだかる——その兆きざしは早くも現れていた。



あとがき

　みなさま、シリーズもいよいよ一八巻目。

　ここまでおつきあいいただき、まことにありがとうございます。

　今までの一七冊はスーパーダッシュ文庫からの刊行なのですが、今回からダッシュエックス文庫のレーベルへ移籍という形になります。

　それに合わせて、カバーが両面仕様とあいなりました。

　表側はダッシュエックス版、そして裏側はかつてのスーパーダッシュ版の表紙となっておりまして、既き刊かんと変わらぬデザインをご利用いただくことも可能です。

　……個人的には、「ここまできたら最後までスーパーのままでもいいんじゃないの」とも思うのですが（苦笑）。発行部数やら何やらを考慮して、このような変則仕様での移籍になったと聞いております。

　これも全て、みなさまの変わらぬご愛あい顧こがあればこそ。

　あらためて御礼申し上げます。

　さて、今回はあちこちで発表しておりました短編あれこれとドラマＣＤ脚本、そこに書き下ろしを加えた内容です。

『第一話　媛巫女たちと七人目のカンピオーネ』　初出：ＴＳＵＴＡＹＡ購入特典冊子

『第二話　王様の晩餐会』　初出：ＷＥＢ特集

『第三話　カンピオーネと勉強会』　初出：ＷＥＢ特集

『第四話　王様のゲーム』　初出：ＷＥＢ特集

『第五話　草薙家のアルバイト』　初出：一五巻＆コミック版二巻購入特典冊子

『第六話　ある日の男子（？）会』　初出：ＷＥＢ特集

『第七話　四方山昔語り』　初出：ＷＥＢ特集

『第八話　草薙護堂と奥多摩の怪物』　初出：雑誌付録ドラマＣＤ

『第九話　神殺し、霧の都に集う』　書き下ろし

『第十話　内戦前夜』　書き下ろし

　まず一～八話。

　作中一年目の九月から二年目一月までのエピソードが時系列順に並んでおります。

　また、第一話を掲載したＴＳＵＴＡＹＡ購入特典冊子はシリーズ紹介も兼ねて、アニメ放映前に配布されたものです。そのため『カンピオーネとはなんぞや？』というテーマの掌しよう編へんになっております。

　第五話掲載の特典冊子は逆にアニメ放送終了後、一五巻とコミック版二巻を同時購入された方に贈られた『カンピオーネ！ LIMITED BOOK』ですね。

　一連の短編はわれらが主人公をめぐる日常的なエピソード中心の構成で……それだけにかえって目に付きますね。彼が全然ふつうではないという事実が。

　ちなみに一巻を書きはじめる前、草くさ薙なぎ護ご堂どうのキャラクターを作るに当たって、中国文学の偉大なる暴れん坊たちを参考にしました。『西さい遊ゆう記き』の孫そん悟ご空くう、『水すい滸こ伝でん』の黒こく旋せん風ぷう・李り逵きなどですね。

まあ、人格的にはちょっと誉ほめられるところがすくない感じの人たちです（苦笑）。

そして、同じく中国の誇る偉大な武ぶ侠きょう小説家・金きん庸よう老師の作品には『偽ぎ君くん子し』というあだなで呼ばれるキャラがおりまして。それをヒントにエセ平和主義者というパーソナリティーをくっつけて、草薙護堂は誕生いたしました。

そういう背景を持つキャラなので、読者のみなさまには是ぜ非ひ「まじめなのは口だけのろくでなしめ！」とかツッコミを入れていただければと常々思っている次第です。

そんな男にも、アニメ化に際して声が付くことになりました。

初公開はアニメ放映に先駆けて製作されたドラマＣＤ。コミック版『カンピオーネ！』を連載していた雑誌『スーパーダッシュ＆ゴー』の付録ですね。

今回、その脚本も収録いたしました。

一五巻のなかですこし言及されている『ムカデ退治』のエピソードです。

僕が一から考えた話なので、原作上であった出来事にしてもいいやとタイムラインに組み込んだのですが……雑誌付録という性質上、このＣＤを入手することは現在ちょっとむずかしいようです。

ＣＤ未聴のみなさま、こちらがその一部始終となります。

収録時、脚本を書いた僕と集英社の担当編集氏、アニメのプロデューサー氏、あとドラマＣＤの音響監督とで協議しながら声優のみなさまに「こういう感じで」と演技をお願いし、セリフに若じゃっ干かんの修正を加えました。

ＣＤをお持ちの方は音声と脚本をくらべてみるのも面白いかもしれません。〝現場の判断〟で微修正した箇所がたぶんわかると思います。

そして、いまや大人気の護堂役・松まつ岡おか禎よし丞つぐさん。

毎回の熱演だけでなく、うんちく語りの再現等でもたいへんお世

話になりました。

　さてさて。

　第九話の中編と最後の短編は書き下ろしです。

　一八五〇年代、シャーロック・ホームズやワトソン医師がまだ幼児だった時代のロンドンにカンピオーネ三人が集まるエピソードは——登場人物が出そろった時点でオチ担当も決まるという組み合わせです。

　侯こう爵しやくさまと教主さまだけだと、ストーリーはよくも悪くもシンプルになります（笑）。

　が、そこに（加える必要のない）アクセントを加える彼女。

　実は七人いるカンピオーネのなかでも最も特別なトリックスターであり、ジョーカーでもある存在です。

　次巻からはじまる『魔王内戦』。

　一九世紀ロンドンでのゴタゴタは、その遠い前ぜん哨しよう戦せんでもあります。

　アイーシャ夫人という〝爆弾〟のあつかいに手を焼きつつも、残りのカンピオーネたちはいよいよ未み曽ぞ有うの内ゲバを開始いたします。

　舞台は日本。最凶の敵たちを迎え撃つ草薙護堂。

　よろしければ、次巻もまたお読みいただければ幸いに存じます。


カンピオーネ！18
あとがき
しこゑきー
ご愛読いただき
ありがとう
ございます!!

【電子版特典】

18巻発売記念

カンピオーネ！

おさらいＢＯＯＫ

シリーズ累計１３０万部突破！

新神話バトルファンタジー！

17巻までの軌跡を教授！

　※本コンテンツは、書店配布用の小冊子（非売品）を電子版特典として収録するものです。


非売品
カンピオーネ!
Campione
丈月 城
Illustration
シコルスキー
おさらいBOOK
18巻
発売記念
シリーズ 累計130万部突破!
丈月 城が手がける
新神話バトルファンタジー!
17巻までの軌跡を教授!
集英社
ダッシュエックス文庫



カンピオーネ!
～まつろわぬ神々と神殺しの魔王～
Blu-ray BOX
24,000円(+税)
新神話を美麗な映像で!
ブルーレイBOX好評発売中!
初回限定特装版
描き下ろしBOX (7DISC・全13話収録)
特製添い寝シーツ (サイズ:200×140mm)
発売元:ワーナー・ブラザース・ホームエンターテイメント
© 丈月城・シコルスキー/集英社・「カンピオーネ!」製作委員会

カンピオーネは魔王である。

カンピオーネとは何か

神話に抗い地上に災厄をもたらす『まつろわぬ神』を殺し、その能力-権能-を簒奪した者が「カンピオーネ」の称号を得る。彼らはまた「覇王」「魔王」とも称せられる。

カンピオーネは、イタリア語でチャンピオンの意。実力や経験を問わず『勝ち方』を見つけて勝利できる生粋の戦士としての資質を持つ。その多くが戦いを好む凶暴な性格であり、決して人を慈しむ存在ではない。しかし彼らは、『まつろわぬ神』に対抗する力を持つ者として魔術あるいは霊的なものとかかわる人々から「王」として崇められる。現在、世界に存在が確認されているカンピオーネはわずか7人である。

Story

ペルシアの軍神・ウルスラグナを倒し、その権能を得て「カンピオーネ」となった草薙護堂。魔王となった護堂の元には、イタリアの美しき魔術師で自称「愛人」のエリカや、日本を霊的に守護する媛巫女の祐理をはじめとする美少女たちが神の力を求めて集い始める。同時に、人間に災厄をもたらす荒ぶる神々『まつろわぬ神』や、護堂以外のカンピオーネたちも、魔王たる護堂との戦いを求めて暗躍するようになり――。現代を舞台に繰り広げられる新たなる神話がここに紡がれる!


美しき姫たち
リリアナ・クラニチャール
《青銅黒十字》に属する魔女で、「剣の妖精」とも呼ばれ、エリカに比肩する戦闘力をもつ。護堂の「騎士」を自任し、公私を問わず彼に献身する。一方で、恋愛小説や詩を書くのが趣味。
エリカ・ブランデッリ
イタリアの魔術結社《赤銅黒十字》に所属する強力な魔術師で、『紅の悪魔』の異名を持つ。護堂の「愛人」を名乗り、人目もはばからず護堂にアプローチする。
清秋院恵那
剣術・呪術ともに全国でも最高の資質を持ち、天叢雲剣を操る「太刀の媛巫女」。祐理とは幼馴染で親友。護堂の「お妾さん」を目指している。自由奔放で裏表のない性格。
万里谷祐理
日本を霊的に守護する「媛巫女」のひとりで、高い霊視能力を持つ。真面目で、特に護堂を取り巻く女性関係について叱責する場面も。護堂の「正妻」と呼ばれている。



人物紹介　魔王と神、そして

カンピオーネ

草薙護堂を含め、世界にわずか7人しか確認されていない『神殺し』。神から簒奪した権能で『まつろわぬ神』と戦う。

▶P.14

草薙護堂（くさなぎごどう）

ごく普通の高校1年生だったが、軍神ウルスラグナを倒し「カンピオーネ」になった。自称・平和主義者だが、神々との戦いの場面では獰猛なまでの闘争本能をさらけ出す。誰にでも優しくするため、多くの女性を意図せず篭絡してしまう。

アイーシャ夫人

150年以上生きるカンピオーネだが、自称17歳。穏やかな性格で聖女と呼ばれることもあるが、傍迷惑な権能で騒動を引き起こす。

羅濠（らごう）教主

濠は字、名は翠蓮。廬山に座す魔術結社《五嶽聖教》の教主。武術と方術の奥義を極めたカンピオーネ。

まつろわぬ神

数多いる神のうち、人の紡いだ神話に背き地上に降臨した神々。神であるからこその、圧倒的な力を持ち、ただ通り過ぎるだけでも世界に災いをもたらす。

アテナ

護堂がローマで出会った闘争と智慧の女神。見た目は銀髪の少女。護堂に一度敗れるも、その後も何度か護堂の前に現れる。

ウルスラグナ

護堂が倒した、古代ペルシアの軍神にして光の神。見た目は14、5歳に見える美少年。自信家の負けず嫌いで、イタリアで出会った際、護堂と意気投合した。

カンピオーネ！の軌跡

カンピオーネとなった草薙護堂を取り巻く、物語の軌跡を振り返る！

3月

イタリアでエリカと出会う

祖父の友人に届け物をするため、イタリアに向かった護堂。「まつろわぬ神」についての情報を教えてほしいと、エリカが声をかけたのが初めての出会い。イタリア語を理解できない護堂は思わずエリカに見惚れてしまう。





ウルスラグナを倒しカンピオーネに

ウルスラグナとメルカルトとの戦いに巻き込まれた護堂は、『プロメテウス秘笈』の力を借り、ウルスラグナに勝利。カンピオーネに転生した。

はじめての『教授』の術

魔術をはじいてしまう護堂に、エリカから必要な知識を口うつしで伝える『教授』の術をはじめて行うことに。エリカのキスの純潔を奪った護堂は勝利を誓う。





第3巻 はじまりの物語

4月



サルバトーレ・ドニとの決闘

6人目のカンピオーネであるサルバトーレ・ドニに決闘を申し込まれ断った護堂だが、剣術で襲い掛かってくるドニと戦うことに。ドニは護堂の戦いぶりをみて、護堂を気に入る。



第11巻　ふたつめの物語

5月

媛巫女、万里谷祐里との出会い

「正史編纂委員会」の依頼により、護堂が真にカンピオーネなのか鑑定することになった万里谷。護堂の妹、静花を介して2人は出会う。



アテナとの戦い

護堂が守る魔道書『ゴルゴネイオン』を求めて、現れたアテナ。『死』の言霊を浴びせられ、窮地に追い込まれた護堂だが、エリカの剣『クオレ・ディ・レオーネ』を使い、アテナを倒した。





第1巻　神はまつろわず

6月



ヴォバンとリリアナが日本へ

最古参のカンピオーネであるヴォバンが、万里谷の力を利用しようと、エリカのライバルで《青銅黒十字》のメンバーであるリリアナとともに日本へ。

カンピオーネ同士の戦い

連れ去られた万里谷を助けるため、ヴォバンに向かう護堂。厳しい戦いになるが、、護堂の権能のひとつ『山羊』が発現し、切り抜けた。





第2巻 魔王来臨

7月

イタリアでアテナと再会

夏休み、イタリアに訪れた護堂の前に現れたのは、日本で退けたはずのアテナ。アテナは護堂を成長させるため、ペルセウスと戦うように仕向ける。





ペルセウスとの戦い

ペルセウスと戦うも、攻撃をかき消され、瀕死の状態に陥った護堂。リリアナから知識を得て、もう一度戦うも、あと少しのところで気絶してしまう。そこへドニが現れてペルセウスを倒した。



第4巻 英雄と王

9月

清秋院恵那が送り込まれる

護堂の『お妾さん』の座を狙うべく、学校に現れた清秋院恵那。もともと好戦的な性格だったこともあり、特に護堂の近くにいるエリカに戦いを挑む。



化身『少年』に目覚める

恵那との戦いで大きなダメージを受けてしまったエリカを見て、『少年』の化身に目覚めた護堂。エリカは「永遠の従属を誓う」条件を受け入れ、護堂からのキスでウルスラグナの『加護』の力を受ける。





第5巻 剣の巫女

10月

ジョン・プルートー・スミスが登場

ロサンゼルスにて《蝿の王》の邪術師、神祖アーシェラが復活し、レヴィアタンへと変化するもジョン・プルートー・スミスの銃により駆逐される。

羅濠教主VS護堂

封印されている斉天大聖を復活させて戦いたい中国のカンピオーネ、羅濠教主が護堂たちのいる日光へ。どうにか復活を止めようと、護堂は羅濠と戦うことに。





第6巻 神山飛凰

10月

ひかりが孫悟空に

護堂と羅濠の対決は引き分けたものの、復活した斉天大聖・孫悟空に、祐理の妹・ひかりが体を乗っ取られてしまう。





打ち解ける護堂と羅濠

孫悟空の石山巌窟（せきざんがんくつ）の秘法により、閉じ込められてしまった護堂と羅濠。激しく争っていた2人だったが、羅濠が護堂の戦いぶりを称賛し、護堂を助ける。



スミスが護堂たちを助ける

孫悟空との戦いに苦戦を強いられる護堂たちの元にスミス（アニー）が現れる。アーシェラを追ってきたスミスだが、護堂たちを救ってくれる。



孫悟空と最終決戦へ

孫悟空は完全復活し、沙悟浄と猪八戒を使って攻撃してくるが、護堂と羅濠（らごう）、スミスの3人のカンピオーネのチームプレーで孫悟空を倒すことに成功した。



第7巻 斉天大聖

11月

アテナVSランスロットの決戦

『最後の王』復活を目論むグィネヴィアが彼の愛刀を蘇らせた瞬間、女神アテナが降臨。護堂との再戦を願うアテナは王の復活を阻止するためにグィネヴィアを守護するランスロットに挑むが、「魔導の聖杯」によって徐々に生命力を奪われていく。



「聖絶」――神獣をも倒す言霊の力

イタリアに渡っていたエリカは、魔導書『ダヴィデによる勲の書』による聖絶の言霊『聖なる殲滅の特権』を会得。聖絶の名手であった叔父パオロの導きで研鑽を積み、グィネヴィアが召喚した神獣を倒す。



アテナ、最期の戦い

自分の死期を悟り、護堂との決着をつけるために現れたアテナ。しかしグィネヴィアの策略で護堂が唱えた秘術によって体内の聖杯が覚醒。一時的に護堂と共闘してランスロットに対峙するも、全ての力を使い果たしたアテナは、護堂にある力を与えて消滅した。

黒王子(ブラックプリンス)アレクと暴走した護堂の衝突

イギリスのカンピオーネ、黒王子アレクは、強奪した神器『天之逆鉾(あまのさかほこ)』で東京湾に浮島を出現させる。その罠に仇敵グィネヴィアをおびき寄せて討とうと策略するが、謎の女に操られ、彼女側についた護堂と戦うことに。







第9巻 女神再び

11月

呪力を打ち消す、禍祓い

護堂に呪術がかけられていることを知ったエリカたちは、護堂にランスロットの知識を与える『教授』と見せかけて、祐理の妹で媛巫女見習い、ひかりの解呪の力を込めた石を飲ませ、正気を取り戻させる。



軍神ランスロットとの決戦

アレクにグィネヴィアを討たれたランスロットは完全なまつろわぬ神となり護堂を襲う。エリカ、リリアナ、祐理の力を借りた護堂は、激闘の果てに権能『猪』と天叢雲剣を駆使しランスロットを倒した。



12月

絆を取り戻すために

仲間たちとの関係や記憶に妙な違和感を覚える護堂。彼らの記憶は農耕神サトゥルヌスの復活を目論む祭司によって、改竄されていた。護堂は禍祓いの媛巫女の力で呪詛を解き、ウルスラグナの化身『白馬』で打ち払う。



玻璃（はり）の媛の預言

夢の中で媛巫女の祖先である神祖、玻璃の媛と再会する護堂。彼女はかつて護堂と戦ったペルセウスが死後、「王の鏃」として『最後の王』復活の時に備えていることを告げ、警告を促す。





第10巻 槍の戦神

1月

火の女神、襲来

東京タワーが狙撃される。射出ポイントとされる千葉県銚子の犬吠埼で護堂たちを襲ったのは、「名のある勇士」を探しに来たという姿なき火の女神と神獣だった。神獣を倒された女神は護堂の強さに惚れ込み、再会を誓って去る。

奪い取られた権能

南の島での再戦。女神に圧倒されるが、窮地に立たされた時、女神アテナに託された秘術が発動。祐理の補佐で天叢雲剣が呼び起こした嵐によって、島が消滅する。







半死半生の女神の妙計

女神の正体はアレクによって休眠から復活した暁の魔女神キルケー。護堂と祐理を追い詰めるも、化身『白馬』の前に散り、自分が見初めた護堂にある力を託して息絶えた。

2月

最後の神殺し、妖しき洞穴の女王

ドニの策略で謎の洞穴に吸い込まれ、古代に転移した護堂とエリカ、恵那。それは過去や異世界に通じる通廊をランダムに作り出し、時間旅行を楽しむカンピオーネ、アイーシャの権能だった。護堂たちは現代に戻る方法を模索する。





第12巻　かりそめの聖夜



第13巻　南洋の姫神

2月

古代と現代、カンピオーネ同士の死闘

アイーシャを娶るべく護堂たちに戦いを挑む古代ガリアの神殺しウルディン。戦闘向けの権能を多数駆使するウルディンに追い込まれた護堂は、女神アテナとキルケーの導きで掌握した『黒の剱』で対抗し、相打ちに持ち込む。



『最後の王』の顕現

古代で部族を率いて暴れるドニと合流した護堂は、手負いの女神アルティオと『最後の王』と交戦するが、不完全な覚醒だった『最後の王』にあっけなく勝利。女神はドニに憑依して反撃するも、時空を超えたリリアナとエリカの参戦もあり敗北。再び『最後の王』を召喚して消滅する。



神祖パラス・アテナの真の目的

現世に帰還し、『最後の王』の素性を探るドニを追跡する護堂たち。そこに古代の『風の神』を従え、神祖として蘇ったパラス・アテナが現れる。護堂に宣戦布告をする彼女の元には、かつて戦った鋼の軍神、ペルセウス、斉天大聖、ランスロットが結集していた。




第14巻 八人目の神殺し


第15巻 女神の息子


第16巻 英雄たちの鼓動

魔王殲滅の力に敗北を喫する

竜蛇神となり護堂と戦うパラス・アテナは、封印が解かれて再臨した『最後の王』によって致命傷を負う。護堂は復活を察知して来日した羅濠と共に挑むも、完全状態の『最後の王』の圧倒的な力の前に、命からがら撤退する。



明かされる『最後の王』の真名は

護堂は切り札となる剣の言霊を磨くために、幽世で玻璃の媛と接触。かつて古代の神殺しと『最後の王』が相打ちになった場所、彼にまつわる記録が封印された聖域に導かれ、祐理と恵那の教授によって『最後の王』の真名「ラーマチャンドラ」を知る。



決戦の果てに

鋼の軍神たちに苦戦を強いられるも、『最後の王』の知識を得た護堂は、『最後の王』に反旗を翻したランスロットやアテナ、エリカたちの尽力もあり、辛くも勝利を収める。ところがこの世に神殺しがいる限り『最後の王』は何度でも甦ってしまう。魔王殺しの権能を完全に封印するための策。それは7人のカンピオーネ全員が思い描いた結論だった——。

——そして、最終章前夜……

カンピオーネ！18巻に刮目せよ！





第17巻 英雄の名

カンピオーネ!『権能』報告書

カンピオーネの権能は、『グリニッジ賢人議会』により、暫定的な名前をつけられ、
レポートにまとめられている。現状で判明している『権能』をここに報告する。



草薙護堂

軍神ウルスラグナの『権能』を有する。カンピオーネとしては新参者ながら、『権能』の化身を駆使して戦う様に、他のカンピオーネも一目置いている。

東方の軍神
The Persian Warlord

10の化身を必要に応じて使用できるが、制約があり、思うままには発動できない。また、化身はそれぞれ1日1回までしか使用できない。

第一の化身 強風
護堂の名を呼んだ相手のいる場所へ瞬間移動する。
発動条件:お互いが顔見知りであり、どちらも風の吹く場所にいて、呼び出す側が危機的状況にいること

第二の化身 雄牛
人並み外れた怪力を得ることができる。
発動条件:相手(車や動物も含む)が人間を凌駕するほどの剛力を所有していること

第三の化身 白馬
太陽を呼ぶ力で太陽神の長槍を天空から照射。地上の標的を清めの焔(ほのお)で焼き尽くす。
発動条件:攻撃する相手が民衆を苦しめるような大罪を犯していること

第四の化身 駱駝
苦痛に鈍感になり、治癒力も高くなる。また、蹴りの威力と鋭さが爆発的に上昇し、10m以上の跳躍ができる身軽さも得られる。
発動条件:一定以上のダメージを受けること

第五の化身 猪
体長約20mの巨大な猪の神獣を召喚できる。神獣が地を駆けることで小規模な地震が発生。咆哮に付随する衝撃波や突進で対象を粉砕する。
発動条件:巨大な物体を標的に定めて、破壊を決意すること

第六の化身 少年
相手に口移しでウルスラグナの加護を与えることが出来る。加護を授かるとしばらくカンピオーネと同等の頑強さを得られる。
発動条件:大切な誰かに危機が迫った状況であること、相手が永遠の従属を誓うこと

第七の化身 鳳
超人的なスピードと身軽さを得られる。その分、身体への負担が大きく、発動中には胸に激しい痛みがあり、使用後もしばらくは行動不能になる。
発動条件:高速の攻撃を受けること。剣や銃弾の速度でも条件を満たす

第八の化身 雄羊
瀕死の状態から奇跡的な回復力で、復活することができる。瀕死の時に自分の意思によって行使しなければならないため、即死では発動できない。
発動条件:自身が瀕死の状態であること

第九の化身 山羊
周囲の仲間や民衆の想いを一つに集め、雷撃を振るう。周囲の者は、生命力を奪われるため、意識が遠のくなどの影響が出る。
発動条件:周囲の群集(死者でも可)が護堂の戦いに助力したいと願うこと

第十の化身 戦士
相手となる神の知識を言霊にこめることで、黄金に輝く光球を生み、神力を斬り裂く智慧の剣を創りだす。ただし、実際の剣同様に使うほど消耗してしまう。
発動条件:相手の神について深い知識を得ること



サルバトーレ・ドニ

剣の達人で『剣の王』とも呼ばれ、
すでに4人のまつろわぬ神の『権能』を手に入れている。

斬り裂く銀の腕
Silver-arm the Ripper

右腕が銀色の金属のように変質し、その手で握った刃物は魔剣となり、地上のあらゆる物体を切り裂くことができる。

鋼の加護
Man of Steel

北欧神話の英雄ジークフリートから簒奪した権能。肉体を鋼より硬くして不死身に近い身体にする。外見は変わらないが体重が増加する。

いにしえの世に帰れ
Return to Medieval Style

周囲の文明を中世レベルにまで退行させる。持続時間は半日ほど。何らかの物体に『nudus ara』『sere nudus』（裸で耕せ、裸で種を蒔け）というヘシオドスの文を刻むと発動する。

聖なる錯乱
Divine Confusion

自身の権能を含め、あらゆる魔術や呪力を活性、暴走させて制御不能にする。ギリシア神話の狂気を司る酒と豊穣の神ディオニュソスから簒奪した。



羅翠蓮

最古参のカンピオーネの1人で、ヴォバンと同等に戦える力を持つ。
『権能』と武術のコンビネーションで戦う。

大力金剛神功（だいりきこんごうしんこう）
The Power

羅翠蓮が阿吽一対の仁王から簒奪した権能で怪力をふるうことができる。金剛力士の形となって、自身の武術を行使させたり、鎧代わりにすることも可能。

竜吟虎嘯大法（りゅうぎんこしょうだいほう）
Dragon Voice

羅翠蓮がインド神話の歌の女神ガーヤトリーから簒奪した権能。謡声（うた）を強大な衝撃波へと変換できる。

黄粱一炊夢
Terrible Metropolis

自分が住んでいる街が勝手に繁栄する。住人のモラルも向上し治安も良くなる。ただし一定以上の人口のいる場所でなければ発動できない。

百草芳菲、千花繚乱
Hopeless Forest

場所を問わずに草木や花々を咲かせる。呪術と時間をかければ日本列島全体をジャングルにすることもできる。



サーシャ・デヤンスタール・ヴォバン

かつては孤児であったが、カンピオーネとなってからは、
魔王の力を利用し成り上がった。
最古参のカンピオーネだけあり、その『権能』の数も多い。

貪る群狼
Legion of Hungry-wolves

濃いネズミ色の体毛、馬ほどの巨躯の狼を数百頭も召喚することができる。さらに、ヴォバン自身も体長約30mの銀色の巨大な狼へと姿を変えられる。

死せる従僕の檻
Death Ring

自らが殺した人間を生ける亡者に化生させ、生前の知識や能力は残したまま、忠実な従僕に変えてしまう。倒しても、しばらくすると再生する。

疾風怒濤
Sturm und Drang

嵐を呼び、風や雨、稲妻を操ることができる。ヴォバンの気が昂ぶると自然と発動し、周囲が嵐になる。

ソドムの瞳
Curse of Sodom

生者を塩の柱へと変え、生きながら無機物へと変えてしまう邪眼。対象の数や範囲は、コントロールできる。

冥界の黒き竜
Otherland's Dragon

肉体が仮死状態になる代わりに、霊体が実体を備えたブラックドラゴンになり破壊の限りを尽くす。使用には1～2カ月は回復しないほどの大量の呪力を消耗する。

劫火の断罪者
Red Punishment

天から、神すら灼き殺す焔を落とし、最低でも都市1つ覆い尽くすまで燃え広がる。いつでも中断できるが、最高で七日七晩燃え続ける。



アイーシャ夫人

基本的には争いを好まない穏やかな性格だが、
自分で制御ができない、
はた迷惑な『権能』でトラブルを巻き起こす。

生か死か
Live or Die

瀕死の人間すら一瞬で治癒することができる。反転させて冬の権能を使うと、周囲を冷気で包み、不毛の大地に変えてしまう。しかも、制御不能。

妖精郷の通廊
Beyond the Timeless Horizon

アストラル界や過去に通じる穴を作り出す。ある程度の時間の調節はできるものの、基本的には制御不能。

女王の呪縛
Charm and Curse

他者を魅了して、相手に忠誠心を植えつける。ほほえみを見せるだけでも発動してしまい、結果として狂信者を生み出してしまうこともある。

幸いなる聖者への恩寵
Grand Luck

善行を行う際には成功するように幸運の力が働き、逆に行動を邪魔する者に対しては不幸をもたらす。

不思議の国の剣
Jabberwock Slayer

上半身に甲冑を纏い下半身が煙の巨大な魔神を生み出す。魔神がダメージを受けると甲冑の継ぎ目から蒸気と火の玉が噴き出て、相手を攻撃する。



アレクサンドル・ガスコイン

気品の高さから『黒王子アレク』とも呼ばれる。
肉弾戦を好まず、『権能』も直接的な戦闘には
向かないものが多い。

電光石火
Black Lightning

その名の通り、神速で移動できるほか、他の者に神速を与えたり、自ら雷に化身して相手に攻撃したりすることもできる。

復讐の女神
Judge of Furies

『復讐の三女神』を召喚して、彼女たちの前で行われた攻撃や呪詛を攻撃者にやり返す。召喚には一定時間が必要。

大迷宮
The Labyrinth

地下や地上に大迷宮を築いて、相手を引きずりこむ。またその中の様子全てを把握し、自在に移動できる。魔力を注がなければ3ヶ月程で消滅する。

無貌の女王
Queen the Faceless

白い翼を持ち下半身が蛇の女神を召喚する。顔を見られると消えてしまうが、戦闘だけでなく、他の案件にも対応できる。

さまよう貪欲
Weird Greed

吸引と重圧の『権能』。暗黒の球体を呼び出し、ブラックホールのようにあらゆるものを吸引する。球体の移動速度は遅い。



アニー・チャールトン／ジョン・プルートー・スミス

仮面の怪人にしてロサンゼルスの守護聖人。
使用できる『権能』には制限も多く、戦いで不利にならないよう、事前に下調べをしている。

超変身
Metamorphoses

『贄』を捧げることで五つの姿へと変身する。
1度使ったものは以降7日間使用できない。

第1の変身体
大いなる魔術師
贄：人が土から造った巨大な建造物

シャーマンのような異相の全高15mの巨人で、超変身最強の形態。

第2の変身体
豹（ジャガー）
贄:照明などの人工の光

超高速移動と、影から影へ移動ができる。

第3の変身体
殲滅の焔
贄:雨と自分自身

自ら蒼黒い焔の塊になって、自身もろとも敵を焼き尽くす。

第4の変身体
黒き魔鳥
贄:大地

発動と引き換えに地震が発生。毒で麻痺させる灰色の煙を翼から放つことができる。

第5の変身体
蛇使い
贄:自分以外の者が殺した生き物の屍

“煙を吐く者”と関係があるらしい。

魔弾の射手
The Freeshooter

通称『アルテミスの矢』。追尾機能も有した魔弾を放つ。新月の夜を起点に1カ月に6発しか放てない。

妖精王の帝冠
Lord of Elves

アストラル界と地上を行き来できる。短時間であればアストラル界の生物を呼び出すことも。








丈月 城
書き下ろしコメント




作者の想像以上に長期シリーズとなった当作品。いつのまにか文庫で17巻という分量に達してしまいました。その内容をまとめて小冊子にするという手のかかる企画、編集スタッフのご尽力のおかげで、作者もうろおぼえだった時系列までわかりやすい形に整理されております。そして、ついに開幕した『最後の王』編では正義の勇者さまが降臨し、さらにカンピオーネ七人によるバトルロイヤル、というより内ゲバがはじまろうとしています。最終章と銘打たれている割に、かんたんには幕を引けそうにないエピソードですが。さすがにここから最終章だけで17冊も刊行される事態には……ならないと思います。ええ、たぶん。読者のみなさま、よろしければあと何冊かおつきあいいただければ幸いです。












神殺しが紡ぐ最強の新神話
ダッシュエックス文庫に降臨!
知られざる
魔王たちの冒険譚
カンピオーネ!
XVIII
Campione
—魔王たちの断章—
丈月城
Illustration
シコルスキー
Story
草薙家の非常識な日常、美少女達の奇想天外な料理バトル、果ては常識外れのギャンブル大会まで!?　魔王様ご一行の破天荒な爆笑短編をたっぷり収録!　さらにあの最凶の老カンピオーネ・ヴォバン侯爵とアイーシャ夫人の若き日のエピソードが書き下ろし中編で登場!
ダッシュエックス文庫


『カンピオーネ！』の丈月 城が描く
幻想と歴史がクロスする
覇道ファンタジー戦記第２弾！
偉大なる強敵
“獅子心王”降臨!!
シリーズは
発売即
重版!!
『カンピオーネ!』『盟約のリヴァイアサン』
丈月 城
BUNBUN
『結城友奈は勇者である』『ニーナとうさぎと魔法の戦車』
クロニクル・レギオン2
CHRONICLE LEGION
王子と獅子王
ダッシュエックス文庫

著者紹介

丈月　城　たけづき　じょう

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

もうすぐ最終話という頃なのに『Ｇのレコンギスタ』一話を見たら、うっかりはまりそうな自分に気がつきました。あのエンディングテーマは中毒性が高すぎると思います。

illustration

シコルスキー

神奈川県在住のイラストレーター。ＡＢ型のネコ好き。clip studio paintに等高線塗りという新機能がついたのですが、これが非常に面白いツールです。

ダッシュエックス文庫DIGITAL

カンピオーネ！

XVIII 魔王たちの断章

著者　丈月　城

２０１５年５月31日発行

この電子書籍は、ダッシュエックス文庫「カンピオーネ！

XVIII 魔王たちの断章」

２０１５年４月29日発行の第１刷を底本としています。

発行者　　鈴木晴彦

発行所　　株式会社　集英社

〒１０１－８０５０

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　　株式会社デジタルディレクターズ